［研究報告］
1995年 9月

山の手文化の研究

－ホームコンサートのある生活－

財団法人 ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

『山の手文化／ホームコンサート』研究会報告書

＜メンバー＞　岩渕潤子（代表）

伊藤　恵　犬飼素子

岩野裕一　鈴木伸子

松岡温彦　水野統夫

米村洋一　（五十音順）

＜研究目的＞

『山の手文化』の検証とホームコンサート（西洋音楽）普及の歴史を考察することで　日本型ハイライフの過去を記録に留め　同時に将来の可能性を模索する

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

94年度「山の手文化研究会」研究報告書

■ 序
代表・岩渕潤子 ―― 1

■ メンバー紹介 ―― 3

■ 研究レポート
米村洋一
ホームコンサート、サロンコンサートに関する一考察 ―― 7
松岡温彦
近代日本における「エリート」による文化の継続 ―― 13
水野統夫
「個の確立」を目指して ― 真に豊かな生活の確立のために ―― 21

■ 活動レポート
伊藤　恵 ―― 29
犬飼素子 ―― 30
岩野裕一 ―― 31
鈴木伸子 ―― 32

■ 座談会 ／ 95年2月23日　読売広告社別館 ―― 33

■ ホームコンサート活動報告 ―― 53

■ 94年度　活動記録 ―― 117

■ 研究会　議事録 ―― 119

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

『序』

岩 渕 潤 子

１９９３年の秋、発足して、まだ間もなかった（財）ハイライフ研究所の事務局から、「日本人のハイライフについての文化的研究をお願いしたい。ついては、具体的な研究プランを提出してください」と言われたときには、正直言って面食らった。そもそも、「日本人のハイライフ」とは、いったい何を指し示すのか？　それよりも何よりも、この面映ゆい響きを持った「ハイライフ」という言葉は、いかなる文脈で使われているのか？　私は、どう答えて良いものかわからずに、とまどうばかりであった。

そこで、要領を得ないながらも説明を聞いてみると、ハイライフ研究所とは「日本人の生活様式の将来的な在り方」について、また、「生活の質の向上」についてを模索・提案していくために、実験と研究の機会を提供する機関として設立されたものであることが理解された。「日本人の生活の質の向上」は、本来、日本人の各個人が心から求めれば難無く達成されるべきはずのことである。それを、研究の対象としなければならないこと自体に、私は若干の杞憂を覚えないわけにはいかなかったが、とりあえずは、以下の点を考慮してテーマを選択することとした。

1）「日本人の生活の質の向上」を模索・提案するためには、必然的に、日本固有の文化と歴史的背景を再検証することから始めるのが基本である。なぜならば、かつての日本は、いまよりゆとりのない社会だったとは必ずしも断言できないからである。

2）「将来」の日本人のライフスタイルについて議論する以上、過去の歴史を遡る上限は、日本が近代国家として生まれ変わった明治までとする。

3）近代日本社会で「文化・芸術」として認められた分野、もしくは、文化や芸術と関連性のあるテーマを選ぶ。

最終的に、私は、戦前の日本の文化生活の中で大きな役割を果たしながら、いままではあまり積極的に評価されることのなかった都市中産階層による「山の手の文化」について、当時、西洋文化の象徴であったクラシック音楽（西洋音楽のある暮らし＝ホームコンサート）をキーワードに研究することと決定した。

共同研究者としては、伊藤恵、犬飼素子、岩野裕一、鈴木伸子、松岡温彦、水野統夫、米村洋一の各氏（アイウエオ順）をお迎えした。伊藤、犬飼両氏は音楽家で、いうなれば、鑑賞、そして、プロダクト、または、サーヴィスとして、消費の対象ともなり得る「芸術」を社会に提供することを仕事としている人たちである。岩野、鈴木両氏は月刊誌の編集者で、彼らは芸術家の活動を含めた社会の動向を情報として社会に提供することが職務である。松岡、米村両氏は民間シンクタンク勤務を経て、現在は主に独立した委託研究を行なっている。共に、新しい地域開発のカタチ、リゾート開発のありかた、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

日本人のライフスタイル研究の分野においてはエキスパートだ。そして、水野氏は、日本固有の文化背景に注目しつつ、文化・芸術・福祉・環境を含む地域デザインを考える建築家である。
このメンバー構成の興味深いところは、全員が、何らかのカタチ（供給する側であるにせよ、受給する側であるにせよ）で、仕事の上だけでなく、個人的にも文化や芸術と深くかかわり、自分自身の生活の質の向上させることに積極的に取り組んでいる方ばかりであるという点であろう。いわゆる学術研究者ではなく、職業としてポリシーメーキングに携わる官僚も含まれていない。

この人選は、ある意味で、私の考える日本人の「Higher Standard of Living 」実現の方向性、あるいは、そのメソッドを暗示しているかもしれない。なぜならば、私は、生活の質の向上とは、まず、当事者がそれを切実に求めない限り実現され得ぬものであり、その実現へのメソッドは、極めて個人的な試行錯誤を繰り返しながら、個人の精神と体内にのみ蓄積されるものと考えるからである。いかに、優れた学者や官僚が結集して、抽象論としての生活の質の向上実現のメソッドを弁証法的に積み上げたところで、それは、何ら現実の結果をもたらすものではないのだ。「豊かな生活」とは、個人が家族や社会の趨勢に気がねすることなく、自分の行動を思うままに意思決定できる自由な社会においてしか実現できないのだ。その意味で、日本社会における将来のより豊かなライフスタイルを模索することは、日本の将来の在り方そのものを模索することに他ならない。

私たちは、三年計画で実行する『山の手／ホームコンサート』研究の第一年度の目標を、「何回かのホームコンサートを実際に企画して、主催者となること」を経験し、また、いらしてくださった「音楽家、お客様の反応・意見を取材する」ことと定めた。そして、その結果について通常の研究会で討論、分析することにした。その記録は、ここに収録されている通りである。そして、この経験を踏まえ、一年次の終わりに各メンバーより一年の活動を通じて、それぞれが考える「音楽」を通じた日本のハイライフの在り方への思いをレポートとして提出してもらった。さらに、松岡、水野、米村三氏には、それぞれ、「日本の戦前の山の手の文化」について、「個の確立とハイライフ」について、「日本のハイライフ：将来に向けての提言」を、現段階での個人的考えとしてまとめていただいた。

第二次大戦終結５０周年を迎える本年は、我が国のみならず、世界各国が「戦後５０年」を振り返り、２１世紀への思いを新たにする年となる、ことに、戦後の新しい価値体系のなかで、未曾有の物質的繁栄を実現し、世界に稀に見る平等社会を実現した日本は、ここへ来て、戦後初めてとも言うべき経済停滞、さらには、政治的混迷を経験している。このような時期に、近代以後の我が国の歴史を分析し、特に、西洋の文化と日本人との関係について研究することは大変有意義なことではないかと思われる。

本報告書は、なにぶん研究の途上にあることでもあり、ひとつの真理が引き出せたわけではないが、二年度の研究への継続するための足がかりとして、まずは、一年度の成果をここに報告したい。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

メンバー紹介

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

研究会代表

岩渕潤子 いわぶち じゅんこ

profile

美術館管理運営研究者。
神奈川県逗子市に生まれ育つ。
カルフォルニア美術工芸大学卒業。
85年同大学院修士課程修了。
その後、イタリアフィレンツェに留学。
著書に『ニューヨーク午前0時　美術館は眠らない』
『億万長者の贈り物』『イタリアを丸焼き！』
『ルーベンスが見たヨーロッパ』など。
現在は博士号取得のため、毎年三ヶ月イギリスに滞在しつつ、日本でも旺盛な研究、執筆活動を行なっている。
趣味は料理、食べること、音楽鑑賞など。
横浜市在住。

伊藤 恵 いとう けい

profile

ピアニスト
桐朋学園高校卒業後渡欧。
ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学、
ハノーヴァー音楽大学で学ぶ。
1979年以来、数々の国際コンクールに入賞。
1983年、ミュンヘン国際コンクールで優勝。
日本では1984年以降、本格的な演奏活動を開始。
88年より、ライフワークとする
シューマンの全曲ＣＤシリーズ
リリースが開始される。
国内、海外オーケストラとの共演などを含めて
精力的な演奏活動を続けている。
横浜市在住。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

犬飼素子 いぬかい もとこ

profile

フリーのヴァイオリニスト。
オーケストラに所属していたが、
もう一度ヴァイオリンの勉強をしたくなって、
88年から91年まで、アメリカ・ロサンゼルスに留学。
かつて岩渕氏が大学時代ホームステイしていた家の
次女と同級生となった縁で岩渕氏と知り合いになる。
現在はさまざまなオーケストラに参加して
全国を演奏して回る日々。
ヴァイオリンのすぐれた小品を集めた
ホームコンサートをやっていきたい。
横浜市在住。

岩野裕一 いわの ゆういち

profile

編集者。
1964年東京生まれ。
ワイン研究家である父親の仕事の関係で、
十勝ワインの里、北海道池田町で幼少時を過ごす。
当時、自宅の前に線路があったので、
自然と鉄道少年となり、現在は隠れ鉄道マニア。
高校時代からブラスバンド部に所属。
上智大学文学部新聞学科卒業。
大学在学中は上智大学管弦楽部に所属し、
ファゴットを担当。
卒業後、実業之日本社に入社。
ガイドブックの編集を経て、
『実業の日本』編集部へ。同誌の岩渕潤子氏の連載、
「脳ミソにビタミン！」の担当でもある。
東京都大田区在住。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

鈴木伸子 すずき のぶこ

profile

編集者。
1964年東京生まれ。
東京女子大学文理学部史学科卒業。
幼少時から、クラシックマニアで
ワグネリアンの父親が聞くＦＭ放送と
レコードの音の中で育つ。
自らは音楽的素養はまったくない。
大学卒業後、都市出版で
月刊誌『東京人』の編集にあたる。
趣味は料理、散歩、買物、食べ歩き。
東京都豊島区在住。

松岡温彦 まつおか あつひこ

profile

住友信託銀行審議役。
1940年東京築地聖路加病院生まれ、麻布育ち。
早稲田大学文学部哲学科及び、政経学部経済学科卒業。
在宅勤務歴六年。一年の半分を軽井沢の別荘で過ごす。
軽井沢ナショナルトラスト副会長。
趣味はテニス。日本18世紀学会会員。
母方の曾祖父は、鹿鳴館時代の外国人宿泊施設
日比谷にあった東京ホテルの設立者だった。
東京都渋谷区在住。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

水野統夫 みずの のぶお

profile

建築家

松岡氏と同じく、築地聖路加病院の生まれ。

吉武泰水氏、太田博太郎氏、前川國男氏に師事。

建築設計事務所、ナイスパートナーズ代表取締役

を務めるかたわら、

湘南リゾートオフィスで、

湘南のライフスタイルの研究も行っている。

趣味は料理。横浜市在住。

米村洋一 よねむら よういち

profile

1943年生まれ。

東京大学工学部卒業後、野村総合研究所入社。

在職中は、サーフ90協会チーフコーディネーター、

多摩東京移管100周年記念事業総合コーディネーター

などを務める。93年、野村総合研究所退職。

現在は、多摩大学、多摩大総研、客員主任研究員。

(株) ＡＡＰ取締役研究統括担当。

地域交流センター代表幹事。

専門は、環境管理計画、廃棄物処理及び資源化計画、

地域計画、事業化コーディネーション。

趣味はヨット、音楽。

鎌倉市在住。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

研究レポート

米村洋一 …… ホームコンサート、サロンコンサートに関する一考察

松岡温彦 …… 近代日本における「エリート」による文化の継続

水野統夫 …… 「個の確立」を目指して ― 真に豊かな生活の確立のために

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ホームコンサート、サロンコンサートに関する一考察

米村　洋一

1．ホームコンサート、サロンコンサートの位置づけ

中世においては、富と権力を持つ王侯貴族がサロンコンサートを催し、優れた音楽家を発掘し、音楽家に対するパトロンシップをとることによって、古典音楽を発展させ、成熟させることに大きく貢献した。またこの時代には、もうひとつの権力である教会も、宗教音楽を発展させ、後世に残る多くの優れた作品を生み出すことに大きく貢献している。その意味においては、現在のクラシック音楽は、初期においては貴族と教会によって育てられたということになるが、同時に中世の社会制度や封建意識の下で閉塞状態に陥ってゆく。

この過程で、文学などの精神世界では１４～１５世紀にルネッサンス運動が起こり、新たな精神運動が進むが、音楽の世界では必ずしも明確な動きは見られず、むしろ絶対君主や教会で庇護のもとでさらに発達し、１６００～１７００年のバロック音楽として花開くことになる。すなわち、最初のサロンコンサートは封建社会から資本主義社会への移行期に発達し、より広範な人々が音楽を楽しむ場としての劇場へのデビューのための登竜門は、名前の通ったサロンコンサートを幾つか経験することであったと言われている。この時期にあっては、音楽家が成功することは、貴族や教会のパトロンシップを得ること、すなわち権力者のお抱え音楽家になることであった。

音楽がロマン派音楽の登場などによって新しいうねりとなってゆくのは、１９世紀であり、いわゆるブルジョアジーが新たな社会勢力として登場する、産業革命の時代である。この時代が音楽にとってのルネッサンス期と言ってもよいかもしれない。産業革命以後の近代産業社会では、音楽は劇場という空間において、より広範囲の人々にサービスとして提供されることによって、数多くの演奏家が存在し、活動できる条件が整ってきたと言えよう。

さらに産業技術の進歩によって、印刷技術が楽譜の大量頒布を可能にし、次にレコードに始まる音響機器は演奏会そのものの疑似体験を可能にし、さらに放送という巨大なメディアが演奏の場や時間にとらわれない音楽鑑賞を可能にすることによって、より多くの大衆によって音楽が支持されることになった。音楽家は権力者に直接庇護されることから自由になることができ、経済的に成功するためには、その音楽が大衆から支持されることのほうが重要になってくる。

言葉を変えていえば、このような歴史の中で、クラシックを中心とした音楽は、作品も演奏も商品化されることによって、ますます成熟度を高めてきたと言えよう。またポップス系の音楽にいたっては、最初から商品化を前提として成立することが一般的であるとさえいえる状況になっている。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

音楽に限らず、絵画や彫刻その他の芸術活動のほとんどが、このような商品化のプロセスをたどることによって、優れた人材やそれを支える環境条件を充実させてきた。（このことは、当事者であり主体である芸術家が、経済的動機にもとづいて行動しているか否かとは無関係である。むしろ芸術家にあっては、芸術的表現そのものの魅力が動機づけになっているほうが一般的であると見ることもできよう。）

このような商品化の過程を通じて、音楽表現の技術レベルや、表現の場が高度化し、洗練されてきたという効果がもたらされたが、他方、表現者と鑑賞者が分化し、交流が希薄になったり、すれ違ってしまい、交流の媒体である生の音楽は特別な場所でしか鑑賞できなくなってきている。

現代のサロンコンサートは、こういた現状に疑問を感じている音楽家や市民が取り組みつつある、第二のルネッサンス運動であるとも言えるのではないだろうか。

すなわち、中世のパトロンと芸術家という、社会的には上下の関係にあった封建的な構造を、産業革命でのルネッサンス運動が解放し、音楽家に自由と独立の基盤を与えたとすれば、産業社会の中で商品化され、引き裂かれてしまった芸術家と鑑賞者の非人間的な関係を、より人間的で、対等な関係として取り戻す取り組みが、現代のサロンコンサートやホームコンサートであると言えよう。

これは市民の生活意識が、「ものの豊かさから心の豊かさ」へと変化してきた現代の時代性とぴったり対応する動きでもある。

したがって、現代のサロンコンサートやホームコンサートは、単に豊かになった市民が音楽家に対するパトロンシップをとる仕組みであるということではなく、音楽を生活の場に取り戻し、音楽家と生活者の人間的な交流を進める仕組みであり、運動であると位置づけられるのではないだろうか。

2．サロンコンサート、ホームコンサートの類型

1．で述べたような位置づけを踏まえるなら、ホームコンサート、サロンコンサートにおいては、優れた演奏家による演奏を身近に体験することを目的とするだけではなく、コンサートを通じて音楽家と参加者が協力して知的、文化的ライフスタイルを実現することが大切である。

そのための具体的な方法は多様であり、ホームコンサート、サロンコンサートの性格は画一的に考えるべきではない。すなわち、サロンコンサートやホームコンサートは、参加者の価値観やライフスタイルに応じたさまざまなタイプがあり、その種類によってコンサートそのものの運営の仕方、演奏家のタイプなども異なってくるものと考えられる。

たとえば、

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

a．音楽鑑賞型：いい演奏家でいい音楽を聴きたい。
演奏家の確保が重要。
演奏を行なう空間の音響的質も重要。

b．雰囲気重視型：　ホームコンサートの雰囲気を楽しむ。
主催者の演奏、会場の設定などがポイント。
会場は音響空間としてだけではなく、アメニティも重視することが重要。

c．交流型　　：　演奏家との交流、参集者の交流を楽しみたい。
演奏家と聴衆の質がマッチすること。
交流の場の確保と演出（たとえば楽しいホームパーティーなど）が重要。

d．パトロンシップ型：優れた演奏家、作曲家を発掘し、育てたい。
将来性のある演奏家や作曲家を発掘し、応援する仕組みが重要。本格的な活動をするにはＮＰＯ（非営利団体）のような制度必要。

等が考えられる。

これらのタイプによって、コンサート実施の動機も異なり、運営の条件も方法も異なってくる。　その具体的な内容については、これからさまざまなタイプのコンサート、ホームコンサートを経験する中で明らかになってくるものと考えられるが、今年度の経験を通して明らかになってきた基本的条件を整理すると、以下のようになる。

3．サロンコンサート、ホームコンサートの基本的条件

ホームコンサートは商品化され、興行として行なわれる劇場型のコンサートとは異なる仕組みで運営されることが必要である。

音楽家の意識の問題は別として、経済学的な観点では、通常の劇場音楽や、メディアを通じた音楽ビジネスにおいては、音楽家が自分の演奏や作品を商品として消費者に提供し、演奏家、作曲家はその対価を得ることができる。

その活動のプロセスは社会的にも定着しており、ビジネスとしての音楽事務所、プロモーターがスケジュールの調整、会場の確保、ＰＲその他の業務を行なうし、時にはレコーディングを行なったりマスメディアを利用したソフトの提供も行なわれる。

この領域では、音楽家の経済的権利を確保するために、著作権などの諸制度も厳格に適応されることは言うまでもない。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

これに対してホームコンサートは、たまたま音楽を媒介としてはいるが、その本質は音楽という素材を中心に展開される、人と人との自発的なコミュニケーションであり、知的・文化的ライフスタイルの実現である。

サロンコンサートやホームコンサートを実施するための条件としては、以下のような事項に留意することが必要である。

□ 演奏家と参加者の交流

・交流のための演出（たとえばホームパーティ的な演出）

・演奏家と参加者の関心や価値観の共有

□ 知的好奇心に応える

・曲の解説（エピソードなど）

・特殊な楽器などの場合はその解説

・演奏法の説明など

□ 会場の雰囲気

・建物そのものの物語性、話題性

・心地よい部屋、適当なサイズ

・インテリアなどのデコレーション

4．ホームコンサートを社会に普及させるための取り組み

新たな知的・文化的ライフスタイルを実現するムーブメントとしてのサロンコンサートや、ホームコンサートを社会に普及拡大するためには、以下のような環境整備が必要である。

□ 音楽家の意識改革、ノウハウ開発

サロンコンサートやホームコンサートにおいては、演奏家と参加者の交流が重要な要素となる。そのためには音楽家自身も音楽を通じて交流することの意義や楽しさを理解していることが重要であるが、一般に音楽大学では演奏家としての訓練が主流であり、社会的活動の訓練の機会にはそれほど恵まれてはいないと考えられる。

プロとしての音楽家にとって、音楽ビジネスや著作権などの社会制度についての知識が必要であり、そのような領域での専門家の育成が重要であると同様に、これからの成熟社会においては、生活の中に知的・文化的な活動を取り入れる訓練は、音楽家だけではなく一般市民の教養の一部、生活のノウハウとして基礎的教育を取り入れられることが望ましい。

また、このような事項について専門的に研究し、具体的なノウハウや社会的仕組みなどを開発する活動も必要である。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

□　サロンコンサート、ホームコンサートに対応できる人材を動員できる仕組み、環境づくり

サロンコンサートやホームコンサートは小規模に行なわれるので、従来の劇場音楽のような大規模な仕組みを前提とした活動とは、経済的条件ひとつをとっても大きく異なる。すなわち、大量の観客を動員したり、レコードやＣＤ等の商品の販売を可能にするような、高名なアーティストにこだわらない仕組みが必要である（プロとして活動しているアーティストであっても、サロンコンサートやホームコンサートでは、ビジネスの世界とは異なる動機で行動することが必要である）。

したがって、サロンコンサートやホームコンサートに対応しやすい音楽家側の人材を把握するためには、従来のビジネスとは異なる新たな方法が必要である。

たとえば音楽系大学のエクステンションサービスとして実施する仕組みや、大学のサークル、アマチュア音楽愛好者などの人材が、このような非営利型の活動には適している。つまり、一流のプロとしての音楽家よりも、音大学生やプロ指向の音楽家の協力体制を確立することが、音楽家、参加者双方にとってメリットも大きいと考えられる。

受入れ側についての条件整備では、サロンコンサートやホームコンサートを実施できる空間の確保が重要である。個人で実施する場合には、音楽を楽しむことができ、近隣に迷惑を及ぼさないだけの空間的質的余裕が住宅に必要である。また地域によっては、このような空間をコミュニティとしてもつことも考えられる。

いずれにせよ、このような活動が普及するためには、市民の側にサロンコンサートを受け入れる意識やライフスタイルが育っていることが必要である。

□　情報サポート

サロンコンサートやホームコンサートを実施したい人が、気軽に利用できる情報サービスが必要である。この活動そのものが小規模・非営利なので、通常の商業的なコンサートのようなコストのかかる媒体を利用することは困難である。このようなサービスは、従来は公共セクターが行なうことが一般的であったが、これからはパソコンネットワークのような方法が注目される。

□　経済的環境整備

サロンコンサートやホームコンサートのような非営利型の活動は、ＮＰＯ的な制度による支援が必要である。このような制度により、前述のような情報サービスなどが安価な非営利公益型の市民活動として可能になる。

ビジネスの領域では、音楽家の権利を守るために著作権などの制度があるが、サロンコンサートのような非営利的な活動と音楽家の権利保護とを両立させる、制度的な検討が必要である。

これはアマチュア音楽団体の活動を活性化するための政策とも共通していることであり、非営利型の活動が音楽家の生活権に係わる環境を悪化させないように配慮すると共に、知的・文化的ライフスタイルとしてのサロンコンサート、ホームコンサートの普及拡大が阻害されないような制度上の改善が必要である。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

□　社会実験（デモンストレーション、体験事業の実施）

いずれにしても、ここで考えているサロンコンサートやホームコンサートは、これから社会に普及してゆくものであり、そのためのルールや意識も確立していないものである。したがって、今後さまざまな条件のもとでいかにホームコンサートを実施できるかを実験し、実施ノウハウを蓄積するとともに、制度上の課題を明らかにすることが必要である。

以　上

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

近代日本における「エリート」による文化の継続

松岡　温彦

はじめに

明治維新と太平洋戦争敗戦後のふたつの時期が、日本の近代における文化の変容の局面であったことは誰にも異論がないだろう。

しかし、多くの論議は“文化の創造”という視点からなされていて、“文化を生活の中に受容する”人々の態度については、殊更それだけを取り出して研究されているようには思えない

今回の調査研究の目的は云うまでもなく、「豊かな生活」を作り上げていくための基礎になる理論構築である。戦後５０年になる日本の社会が、復興、高度成長、成熟社会と巡っていく中で、漸く人々が人間として生きる意味を問う時代が到来し、個人個人がライフスタイルを追求していこうとしている。われわれは、これまでの経済を中心とした生活を変えて、人類が育んで受け継いできた文化を、改めて意識する必要がある。

ここでは、社会構造をまったく異にする戦前の「エリート社会」と戦後の「大衆社会」を比較することによって、文化の受容が社会に果たす意味を検討していこうと思う。簡単に言うと、文化が、社会的には少数の人たちの専有物であったが、生活の中にとけ込んで楽しまれていた時代と、文化が皆のものであるにもかかわらず、生活に組み込まれていない現代、との比較になる。

一．戦後と文化

1.　経済偏重による文化軽視

われわれ日本人は、１９４５年８月１５日の敗戦を経て、「経済安定九原則」に始まる占領政策による経済調整期の５年間を経験したのちに、朝鮮戦争による特需景気によって経済中心の社会がスタートした。この特需景気がなければ、復興経済は長い困難な試練に見舞われ、単調な経済一本槍の軌道に乗り切ることができなかったに違いない。

戦後復興に目標が定められているうちはよかったが、１９６０年に「所得倍増計画」が出され、１９６４年のオリンピックで頂点に達したこの５年間で、日本は経済以外の目標を見失った。

もちろん経済政策の成功は評価すべきものなのだが、日本の経済が繁栄したのは、他のあらゆることを犠牲にしたから、あるいは軍事面の負担がなかったからであろうか。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

戦前に、あれだけ富国強兵政策を採ったにもかかわらず繁栄したことを考えると、必ずしも経済活動のみに傾斜したことが成功の原因ではないようである。

しかし、エリートの資質を持たない戦後のリーダーは、政治家も官僚も、経済に傾斜することが成功の唯一の方法だと考えて、経済政策にすべてをつぎ込んだ。本来ならば、所得倍増計画を出したとき、すでに経済復興期の終了宣言を出し、社会の目標を多様化すべきであったのだが、大学教育において教養科目を減らし専門科目を重視することなどに如実に現れているように、ますます経済に傾斜して、人間を道具とするいわゆる「人材」主義で経済価値のみの人間を育成し、のちに高齢化社会の不安要因をつくることになった。

経済運営にある程度の自信が出来たのか、その後歴代の内閣は、経済政策の巧拙によって評価され、社会全体の価値基準は経済が主柱になった。戦前では「天職」と言われ、人格が評価の基準であった教師や医者までが、その収入によって評価されるようになってきた。加えて、労働組合の役割が大きくなり、人々を経済的な処遇によって評価するように働きかけたため、ある意味では働くことの意味を一面的なものにしてしまった。

財閥解体によって、資本家が実質的には存在しなくなった日本で、大企業や三公社五現業を資本家階級に見立てた労働者階級を作り上げたことによって、労働は社会の多様な価値を実現する手段から、隷属的な貨幣価値でしか計れないものに堕落した。現在になってようやくこの単純な図式が崩壊し、始めて誤りに気がつきつつあるが、労働あるいは「働く」ことにはさまざまな価値があり、さまざまな評価があることを社会システムに組み込めなかったことが、われわれが文化を生活の中で容易に受け入れられなかった第一の原因である。

2. エリート不在の超大衆社会

半世紀にわたり文化を二次的に扱ってきた第二の大きな理由は、日本の社会が世界に類を見ない超大衆社会（政治・経済的には超社会主義社会）になって、誰もが文化を考えることができる社会になったことである。

これは逆説的のようだが、順を追って説明しよう。

支配するものとされるものの「ピラミッド型社会構造」の中では、下部構造を形成する階級に回れば、文化は「娯楽」として消費物となり、次の創造に向かう感動ではなく、労働に疲れた頭脳と肉体を再生させる道具となる。したがって、戦後の日本のように生産中心で、ほとんどの人々が下部構造に属する社会では、文化はあくまで消費されるものであって、誰もが受動的に関わることしかなかった。

だが、エリート社会では、文化を国民の民度をあげるために使う民主主義社会と、文化を国民の民度を下げるための情報操作に使う専制国家に二分される。いずれにしても、エリート階級は文化の価値を理解しているので、文化を等閑視することはあり得ない。

さて、戦後日本にもたらされたアメリカ民主主義は、占領軍が考える理想的な民主主義として、日本人すべてを平等に扱い、政治のリーダーは選挙によって公平に選ばれる

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ことになった。自国民の多くの犠牲の上に勝ち取った体制であれば、リーダーの質は自ら決まってくるが、与えられた民主主義で選ばれた人々は、社会全体を認識して役割を果たすというわけにはいかなかった。

むしろ逆に、大衆に迎合することによって選ばれる仕組みが定着して、大衆に対してインフォーマティブになることが出来なくなった。この状態では、大衆は文化を自らのものにするすべを知らない。しかも、どのような文化に接することも自由であるため、緊張感や摩擦を感じることがなく、かえって文化に対して鈍感にならざるを得なくなった。権力を意識するエリートが文化に敏感であることが、大衆の鋭い反応を呼び起こしていくものである。

3. 管理される「文化」

戦後の文化は、これまで述べてきたような経済優先社会体制の中で、「役に立たないもの」として大衆によって監視されてきた。また同時に、「公序良俗」という枠組みによる法的な管理が文化には適用されてきた。こうした現象がおこるということは、この国が社会の仕組みとして民主主義ではないことを表している。官僚制度が愚民対応であるといっては語弊があるが、国民は自立せず保護を受けるものである、ということを前提にした制度によって、日本の社会は管理されている。聖徳太子の律令政治が始まってから、日本の官僚制の考え方はほとんど変わっていない。親元の中国の官僚制といまだに合い通じるものがある。

エリート支配国で愚民政策がとられている国は、中国のように文化に対するリーダーの干渉が強いが、日本のようにエリートのいない大衆国家では、そこまでの干渉はない。しかし大衆も国の過保護政策に甘え、とどまるところを知らないため、この頃では、権力をもつことの意味を理解できない官僚が、善意で文化に干渉することが必然的に増えている。　だが、文化は社会の規範にとらわれることはない。むしろ、それに先行し、新たな社会規範を打ち立てていこうとするものである。したがって、歴史的に証明されているように、新しい文化創造は常に社会に摩擦を起こしてきている。

人間の求める快適性の大きな部分は、惰性に基づいている。新しいことを求めるには不安と危険が伴うため、安心出来ず快適にはならない。痛みを伴わない、わずかの新味をもとめるのが大衆である。従って、多くの新しい文化活動は大衆が支持しない。かえって大衆が摩擦を恐れて自主規制するようになり、創造性が減退し民度が下がる。

以上、戦後の文化状況について、社会学的に分析したが、日本人は現在も世界にも例のない特異な環境の中にあり、それに比べると戦前は、どこの国々も同じような、わかりやすい社会の中で文化が育まれていたと考えられる。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

社会の構造（表１）

エリート 愚民社会 *管理強*	エリート 民主主義社会 *競争弱*
大衆 愚民社会 *管理弱*	大衆 民主主義社会 *競争強*

＊「愚民社会」という言い方は象徴的なものであり、国民は弱く保護すべきものという考え方による政策。当然管理社会になり、管理されると国民はそれに甘え自主性を失い民度が下がる。

二．戦前のエリートと文化

1.「教養」を育てた旧制高等学校

１８８６（明治１９）年に設立された旧制高等学校は、敗戦によって教育制度が変わるまでの約６０年間、日本のエリート教育の根幹をなしていた。日本は国の政策としてエリートの存在を認め、彼らを教育することにしたのである。

明治政府は士農工商の身分差別は廃止し、国民はすべて平等であると宣言したのだが、もちろん天皇制を頂点とし、位階は厳然と存在したのであって、今日の日本の平等観とは異なっている。しかも、現在の日本の平等観を正しいものとして考えることは、社会の本質を見誤る恐れがあり、注意する必要がある。とくに、現在の国際社会の中において、日本人の平等観は一般化できるものではなく、かなり特殊なものと考えておいた方がよい。

さて、当時の政府がエリートを認識していたことはもちろん、個人としてもエリートを自覚していた人たちがいて、さらに社会の多くの人たちはエリートの存在を認め、彼らに対して期待さえしていたのである。旧制高等学校の教育は、エリートとして社会に役立つ人を育てることが目的であった。

１８８６年の「中学校令」では、高等学校の専攻分野を法学、医学、工学、文化、理学、農学、商学として、場合によっては高校卒業で専門性のある社会人になれるようにとの意図があった。しかし、この時代の認識では、大学に進む人間に基礎的な全人教育を受けさせなければならず、とても専門教育と一緒にしては無理があるということであった。「教養」過程の必要性が強調され、現在の“教養過程不要 論”は、少なくともエリート教育を前提とする社会では出てこなかった。

そのため、この専攻分野性は医学を除いてすぐに廃止され、代わってエリートではない実務家を養成するための、高等専門学校（４年間）の過程が作られた。この考え方の中に、人間の能力に応じた社会での役割分担という理想がある。

エリートは日本社会を率いていく責任がある。これもある意味では専門領域と考えてもよいわけだが、この責任を果たす上で「教養」が必要だと考えられていたのである。「教養」がなくてもひとつの社会をリードしていけると思う人はいないだろうから、戦

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

後の日本は、リードする人を必要としない社会が可能かどうかの実験がなされているのか、よその国にリードされているのかどちらかになっている。

旧制高等学校の教育は、そのカリキュラムもさることながら、校長の影響力が大きかったようである。これもエリートの構造的なものであるが、その社会の中でのヒエラルキーが存在し、校長の責任は非常に大きかった。第一高等学校が創立されて三年後、校長に任命された木下広次の言葉によると、一高の生徒は「後年社会ノ上流ニ立チ、学術ニアレ技芸ニアレ政治ニアレ、人中ノ先達トナリテ日本ヲ指揮スヘキ人々ナリ、左レバ……」と、端的にエリートの社会に対する全面的な責任を述べている。当然大衆と一線を画し、大衆の圧力に迎合したり、大衆の娯楽に誘惑されることを戒めている。

その後、１９０６年には新渡戸稲造が校長になり、教養豊かな文化人の育成に力を尽くした。彼がアメリカで受けた教育に含まれていであろう多様性を評価する態度が、大正期に入った一高でのさまざまな音楽、絵画、歴史、演劇、そしてもちろん文学や哲学の大小さまざまなサークルを生むことになった。現代文学の旗手たちである谷崎、芥川、川端、菊池寛、太宰、井上靖、大宅壮一等は校内誌に処女作を発表した。同時に演説やエッセーもこの校内誌に載り、高校生たちは、この時代の文化の担い手を自負していた感じであった。

「大正時代は旧制高校の時代で、生徒は英語、ついでドイツ語を学んだ。入学するやいなや必ず哲学書を読んだ。いまと違って旧制高等学校の生徒には、知的虚栄心があって、好んで哲学書を読んだから……」（山本夏彦『私の岩波物語』）という状況で、文化に対する価値観は非常に高かった。したがって、帝大に進学して仕事に就いても、文化面を考慮することは当然であった。

たとえば、１９１１（明治４４）年、東大教授の本多静六は、軽井沢遊園地設計方針として次のように述べている。

「矢ヶ崎山の麓には、湖中に突きでたる箇所を設け、此所に二層よりなるひとつの料理店を置き、船やアイススケートの道具を貸したりする所とし、会場には音楽堂に充つるときは、夏季に幽えんなる湖畔に憩いて音楽を聞き、秋は清冽なる紅葉とを眺めつつ音楽中の人となることが出来る」

彼は、ミュンヘン大学で国家経済学で博士号とった人であったから、音楽のイメージもヨーロッ

戦前の文化活動の例（表２）

建築・建築家
演奏会・音楽会
文学賞・作家、詩人
展覧会・画家

1873東京ホテル開業
1873日光金谷ホテル
1886婦人矯風会設立
1901　1873箱根富士屋ホテル
1890奏楽堂（芸大）
1901日本女子大
1894軽井沢万平ホテル
1920フランス絵画彫刻展
1921小林秀雄一高
マンドリンクラブ
1921エルマン
1923クライスラー
1928テイボー　1926逗子なぎさホテル
1928月曜クラブ（婦人団体）
1931立原道浩一高
短歌会
1932聖ルカ病院
1936ゴールドベルグ
クラウス、フォイアマン
1937山の上ホテル
ヴォーリス

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

パの野外演奏会のようなものであったに違いない。彼は湯布院の計画も立てていて、当時の日本にリゾートの開発を進めた先駆者であった。その構想は文化面を考え、環境の保全に考慮し、現在のリゾート開発を担う人たちと比較すると、その相違が顕著である。８０年前に、少なくとも環境や文化に対する見方が現在に比べて優れていたという事実は、エリートのもつ強い責任感が、大衆の合意に基づく責任感に比べて強いとも考えられ、今後の社会を考えていく場合にひとつの検討課題となろう。

2. 有産階級

戦前のエリートのひとつの柱は、旧制高校によって作られたと考えてよいが、文化的には、明治以前からの主として都市の大商人がより重要である。この面は最近パトロネージュの研究など盛んに行なわれているのでふれないが、こうした商人の子どもや孫が西洋文化に深くかかわったことが重要で、旧制高校、大学を出て政治、行政分野で活躍するエリートに対して、彼らが経済界のエリートとして多大な文化面の貢献をしたのである。こうした経済的にゆとりのある商人の娘と結婚することが、地方から出て、旧制高校、帝国大学を出たものの目標にもなっていた。

「父（旧制四高、東京帝大）の生涯でたったひとつ押し通したことは、山の手のピアノの上手なお嬢さんと結婚することだったんですって。山手線の目黒駅の上大崎のお屋敷でピアノを弾いていたのが母だったの」（宮沢明子『ピアニストの自画像』）

こうした大商人の代表格である三井や岩崎は政商として、当時の急務であった「入欧」の先頭に立っていた。一例として、三井の朝吹家と西欧文化との関連を挙げておこう。のちに帝国生命社長になった朝吹常吉は、１８歳で２年間ロンドンに留学した。結婚相手の長岡磯子の父、長岡外史陸軍中将は４年間ドイツに留学し、高田師団長のときスキーを広めた人として有名である。常吉、磯子の娘が、フランスの哲学者サルトル、ボートヴォワールと親交があった仏文学者登水子で、子どものときにはイギリスから雇われた家庭教師、いわゆるガーヴァネスに教育された。この家庭教師が登水子に『ピーター・ラビット』など、イギリスの童話を読んで聞かせたという（宮原安春『軽井沢物語』）。朝吹家の生活は、夏の軽井沢の避暑生活を含めてイギリス風で、ティーパーティ、日曜日の教会、テニス等がライフスタイルに組み込まれていたのである。しかも、朝吹家が特殊な例というわけではなく、当時の有産階級には、欧米の文化やライフスタイルが広範に広がっていた。

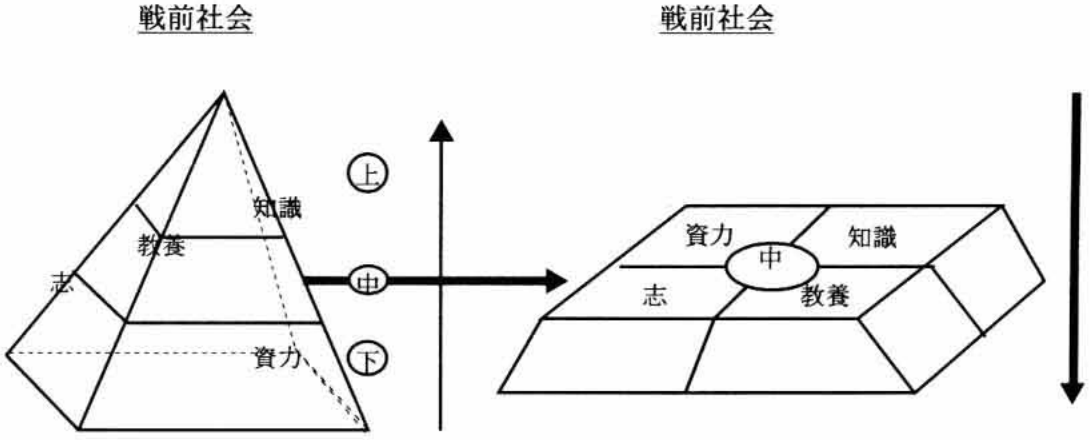
また、こうした人々は欧米の文化に惹かれると同時に、日本の伝統文化に対しても強い愛着を持っていた。彼らは欧米人と単なる仕事関係ではなく個人的な交友関係が深く、教養ある欧米人が日本文化を高く評価していることを良く知っていたからである。

したがって、旧制高校で頭から入った西欧文化と、有産階級がライフスタイルとして体得した西欧文化との違いがまだ大きいままに、戦争に突入したのである。もし、旧制高校第一世代が有産階級の子女と結婚し、その子どもや孫の世代になって西欧文化と日本の文化がライフスタイルにとけ込むようになっていれば、欧米との戦争にはならなか

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ったであろうし、その結果として日本の社会はヨーロッパに近いものになっていたであろう。日本の文化は有産階級のものと大衆文化の二極に分かれて発達し、ふたつが拮抗する形で次々と新しいものを生み出し、現在のように文化がスプロールする事はなかったであろう。

戦前・戦後社会構造の比較（図１）



例　一般階級社会

上流　志、教養、知識
　　資力、共高い

例　専門中流大衆社会

資力中流　サラリーマン

知識中流　教師

教養中流　アーティスト

志　中流　政治家

コンセンサスを得る方向、民度低下

専門分化しているため理解をはかるのに最大公約数的なものになる

三．戦前戦後のリーダーの違い

欧米に追いつくということが経済面に限られている戦後の場合と違って、戦前はあらゆる面に向かっていたことが特徴である。この、戦前と戦後の欧米に対する社会のリーダーの姿勢の違いを、ここで明らかにしておく必要がある。

戦前の階級社会でのリーダーは、

(1)　欧米との差は文化、文明の差と認識していた。

(2)　国家を意識したリーダーで国を当時する間隔で欧米の研究をした。

(3)　目標は仕事、生活すべての面で欧米化することであったので、自然に欧米文化の

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

導入にも熱心であった。

(4) 階級社会におけるリーダーであったから、必然的に欧米文化に限らず文化というものに対する素養があった。

(5) アメリカの文明の前にヨーロッパの文化に接していた。アメリカ人もヨーロッパ文化に対するコンプレックスを持っている時代で、そのことを知っていた。

(6) 教養に基づいた人格の上に専門性をもって欧米の技術を導入しようとし、一般庶民には生業のために技術を取得させた。

一方、戦後の大衆社会でのリーダーは、

(1) 敗戦によって「経済復興」を最優先にせざるを得なくなり、アメリカの援助に頼った。

(2) 敗戦は日米の経済力の差としてとらえられ、アメリカ型大量生産体制を目標とした。

(3) アメリカの民主主義を日本のモデルとした。

(4) 健全なアメリカ中産階級をイメージし、文化といえば映画を中心とする大衆文化であった。

(5) ヨーロッパ文化に回帰するアメリカのリーダーの世界を視野に入れるチャンスはなかった。

(6) 文化的源泉であった欧州が戦火に蹂躙され、戦前のリーダーは自信を失った。彼らの系譜は社会的なマイノリティーとしての文化人に引き継がれ、相手にする必要が無くなった。

(7) アメリカよりも純粋な社会構造として、階級社会から大衆社会へ移行したが、単純な生産と消費という図式の中でのリーダーになった。

このような違いを見ると、戦前のリーダーに求められた能力は、現在日本のリーダーが必要とされている能力とはまったく違い、前者では全人格的能力であるのに対して、後者では経済運営の技術的能力である。

文化は、戦後の政治家や官僚のようなテクノクラートが扱えるような、合理的な構造をもっていない。こうした社会のリーダーの役割は、文化に対する「感受性」であって、文化政策は人々の高度な文化の受容に支えられたものでなければならない。

以　上

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

「個の確立」を目指して

― 真に豊かな生活の確立のために

水野　統夫

1.　豊かな生活に対する？マーク

戦後５０年、追い求めてきた経済的豊かさが実現されたかに見えたとき、私たちは初めて、経済的豊かさと生活の豊かさがイコールでないことに気付かざるを得なかった。経済指標に現れない多くの問題が次々と生じており、実感レベルにおいて豊かさが感じられないことに対するいらだちと不安から、今後の生活のあり方に対する反省が生まれ、さまざまな角度から豊かさに対する検討が行なわれるようになった。その成果として、たとえば「生活大国５ヶ年計画」では、「国民の一人ひとりが、豊さとゆとりを日々の生活の中で実感でき、多様な価値観を実現するための機会が等しく与えられ、美しい環境のもとで、簡素なライフスタイルが確立された社会の実現」を目指すとされたし、第１３次国民生活審議会総合政策部会は、ゆとり、安心、多様性のある国民生活を実現するための基本政策として、「個人の生活を重視する社会の実現」を提案している。

これらをみると、豊かな生活では、多様な価値観を認め、個人のライフスタイルの確立が可能な社会が目標になっていると考えられる。しかし、そんな簡単な話なのだろうか。明治維新以降、近代日本が成立して以来の我々の生活を振り返ってみるとき、個人の生活が重視され、多様な価値観が社会的に認められたことがあっただろうか。しかも、それが大きな国の施策として提示されていることに一抹の不安を覚えざるを得ない。今回の調査研究の目的が、今後、真に「豊かな生活」を創り挙げていくための基礎になる論理の構築であり、新しい生活価値観とライフスタイルの追求（ハイライフ研究所設立パンフレットより）であるとするなら、豊かな生活のベースとなっている個人の確立と多様な価値観が認められる社会の可能性について、私たち自身の立場で深く検討することが必要である。

この問題は、行政から指導される問題ではなく、むしろ私たち自身が、市民社会の一員として確立せねばならない問題である。それが達成されたときこそ、第１２次国民生活審議会、余暇・生活文化委員会報告書のなかで、野中委員が発言しているように、このような委員会の報告書が“笑い話のギャグになるとき”がくるものと思われる。

【野中委員】

○イタリア、オーストラリア、フランスといった余暇先進国（？！）の人々にこの報告書案をみせると異口同音、“Ｗｈｙ？”の声。何故、人間としての根源的な、存在の証といってもおおげさではないくらい大切な「休暇」の空間と時間的意味

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

や意義について、国が音頭を取って議論するのだろうかと言う。「余暇に対する考え方」あたりをみると、最初のうちは声を出して笑っているが、その後まじめになって怒りだす。こんなことを他人に、しかも行政から言われること自体おかし い。これはあくまで個の問題だというわけである。

○この最終報告書が笑い話のギャグになるようなときが、日本にも早く訪れることを祈りたい。

2．個を認めない（多様な価値感を認めない）社会

―― 日本社会の問題点

豊かな社会の今後の目標として、「多様な価値観を認め、個人のライフスタイルの確立が可能な社会の実現」が社会的に提案されることに対して疑問符を投げかけざるを得ないのは、これまでの日本の近代社会の歴史を振り返ってみると、まったく正反対のことが行なわれてきたからである。私たちの社会が、個を認めず、多様な価値観を認めない社会であった歴史はあまりにも永いものである。

明治維新からの戦前の社会は、大正デモクラシーから昭和初期にかけての一時を除くと、国家による価値観の強制の歴史であった。このことについては詳しく述べる必要もないと思う。それが終戦によって取り除かれた以降、戦後社会をつらぬいているひとつの価値観は、「平等」ということであった。この価値観によって得られたものも多かったが、それと同時にこれが悪しき平等主義となって、多くの創造的な芽をつぶしてきたし、その残骸がいまも確固として残っている。

たとえば、私たちが小・中学校の校舎を設計するとき、まず言われるのは、その自治体の他の学校と同じようなプランにして格差を生じないようにすることであり、その学校が建つ環境を生かして他と違ったものになるのはタブーなのである。

この悪しき平等主義は、経済の高度成長期以降、経済的合理性というひとつの価値観となり、それ以外のすべての価値が否定されるようになってしまった。その結果、貨幣換算されないものは評価の対象外となり、経済的価値観だけで私たちの生活が支配される結果となった。

秋田県横手市は、「山と川のある町」として知られ、市の中央を流れる横手川と丘陵地の緑に囲まれ、自然・歴史・街の三要素が有機的な関係を保っており、「日本の街なみの生きた典型」といわれているが、この川とその桜並木を分断して、都市計画道路が経済的合理性の名のもとに計画されている。この道路が作られたとき、それによって失われたものに住民が気付くのは、川が埋められ、お江戸日本橋の橋の上を高速道路が通ったときに、江戸の下町の住民が味わった気持ちと同じではないだろうか。

このようなＧＮＰ指標的、単一の価値観による豊かさの達成が、本当の豊かさなのだろうかという反省と行きづまりから、この数年来、上記のような生活大国に象徴される豊かさ論議が行なわれている。その結果として、個性の尊重や余暇の充実が盛んに叫ば

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

れるようになってきた。

しかし、気をつけなければならないのは、この反省がいつのまにか、商業ベースによる消費活動の中に飲み込まれてしまい、商品としての個性・ライフスタイルになってしまっている危険性が高いことである。

出窓、屋根窓、フローリングの床、システムキッチン、吹き抜けの斜めの天井といった、“個性化という名の画一化”が見事なまでのおぞましさとなって出現している郊外住宅地の風景、円柱、疑似様式風の窓、石貼りの外装が都市のペンシルビルにまで及んでいるポストモダンと称される建築群、こういうものに接すると、個性的ライフスタイルの確立ということが、経済的仕組みのなかに組み込まれ、あやしげなオブラートに包まれた商品として売り出され、個性的という幻想のなかで画一化され、我々がいつのまにかそれにはまっている可能性が高いことを思い知らされる。ときには美術や文化さえも、消費財となってしまっている現状を考えると、本当の豊さのある「ハイライフ」を実現していくためには、行政による啓蒙（？）や商業主義の落とし穴にはまらないだけの、しっかりとした価値判断の基準をもった「個の確立」が必要であり、それはむしろ自立とか自律といった方がよいと思われるものである。

こう考えてくると、今後私たちが目指す「ハイライフ」（豊かな生活）とは、物質的な豊さを求める生活でもなく、単一の価値観にしばられた生活でもない。我々が目指すべきものは、現状の社会の動きや傾向に流されることなく、自分自身のしっかりとした価値判断により、自分でどういう生活（ライフスタイル）を創りだしていくかということであると思う。

3．「個の確立（自立）」のために

社会の富の生産力が爆発的に伸び、これまでの経済的欲求が目的であった時代から、それが手段にすぎない社会が到来（P．F．ドラッカー『新しい現実』）すると、豊かな生活が目指すものは、「多様な価値観に裏づけられた自由度の高い生き方（自立度の高い生き方）」になってくると言えるであろう。そのような生き方（生活）を創りだしていくためには、個人個人がしっかりとした価値感を築き、個人として自立することが大切になるが、そのような個の確立のためには私たちがなすべきことを考えてみたいと思う。

(1)　まず、私たちが取り組むべき事柄は、現在のライフ（生命・生活・人生）を規定しているすべてを洗い直してみる作業である。

ここに、小学生が書いた作文がある。週刊誌等でもとりあげられ、話題になったものである。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

とうめい人間

このごろお父さんは
とうめい人間
ぜんぜん見えない
会社で
とうめい人間目グスリをさす
そうすると体がきえて見えなくなる
だいたい
十時間ぐらいもつ
はやく
目ぐすりのききめが
きれてほしい
お父さんのすがたが見たい

（福島県いわき市汐見が丘小学校六年　福原武彦）

この詩で表現される父親像は、現代日本を象徴する「会社人間」そのものであり、この父親は、自分が朝から夜遅くまで働くことによって家族を養っているのであり、こういう働きかたは生活を維持していくためのやむを得ない条件であると思っているかもしれないが、これが子どもや家族に与える影響までは考慮の対象外になってしまっている。

より広い視野に立って生活のあり方（ライフスタイル）を見直したとき、現在のような働き方で良いのかを検討することが必要である。働き方（ワークスタイル）が、ライフスタイルに与える影響は非常に大きい。現在のような一ヶ所に多数の人間が集まって働くワークスタイルは、産業革命以後のことであり、これによって生活習慣も大きく変わらざるを得なかった結果、本来家族がそろって食べる昼間のごちそうを意味する「Ｄｉｎｎｅｒ」という言葉が、父親が働きに出て家にいなくなった結果夕食を表すようになり、昼の残り物などを利用した夕食の意味の「ｓｕｐｐｅｒ」が、半日押し出されて行き場を失い、軽い夜食を意味するようになってしまったとのことである（玉村豊男＋松岡温彦『遊職人種宣言』）。

このように、働き方の変化によって、私たちの生活が大きく影響を受けるということは、逆に私たちが自分に相応しいライフスタイルを確立しようと思えば、そのライフスタイルに相応しい働き方を確立せざるを得ない、ということである。

ここ数年来、マスコミ等にも盛んにとりあげられ、私たちのグループもその実験等を推進してきたテレコミューティング（在宅勤務、サテライトオフィス、リゾートオフィス等）の運動も、日本に於いてはなかなか実を結ばないのは、この試みに参加する企業人の考え方が、いままでの会社中心の考え方であり、現在の企業社会における働き方の枠を踏襲した上でのワークスタイルの見直しでしかなかった結果であり、個人のライフスタイルを確立するためのワークスタイルの見直しではなかったことによる、当然の結果であった。

私たちが真に豊かなライフスタイルを確立するためには、現在の生活においては当た

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

り前になっている条件を見つめ直す作業が必要である。現在のようなワークスタイルですら、産業革命以来たかだか２００年位の歴史しかなく、現在の技術の発展や社会の変化を考えれば、いつまで続きうるのか分からないのだから。

(2)　それと同時に、現在のライフ（生命・生活・人生）に関するすべてについて、多次元的な尺度で判断し、多様な価値観の存在を認めることが必要である。特にこれまでのＧＮＰ的価値判断の絶対視をやめ、それ以外の価値観をより広い視野に立って認めることによって、私たちが見落としてきた多くの価値を再発見できるのではないだろうか。デンマークでは、失業者も職安に休暇届を出せば、その間の就職活動を行なうことが免除され、子供や家族との休暇を楽しむことができる。彼等の意識では、それが当然の勤労者の権利であるとのことだが、これに対しつい最近まで、わが国では「イギリス病」とか「北欧病」という言葉で、低成長や停滞という犠牲を払って豊さを求めてはならないという考え方が強かった。これと「お父さんは透明人間」の世界と比較したとき、どちらが本当に「病」なのかを考えてみることが大切である。

いまの日本の状態は、一次元的尺度でのみ「豊か」であり、生活にかかわる多次元的尺度で考えると、多くのものがむしろ「病」になっているように思える。多次元的尺度で考えれば多様な価値基準があり、自分と違う価値基準の存在を認められうる自己の形成と同時に、そういう個人の集合からなる社会の形成が必要である。そのためのスタートとして、映画『ブッシュマン』にでてきた、下記のようなブッシュマン宣言の価値感を認めることから始めて、自分のライフスタイルの中でいかに充実した時間を過ごすかを考えてみてはどうだろうか。

陽が昇るから　　目を覚ます
目を覚ますから　　腹が減る
腹が減るから　　狩りをする
狩をするから　　メシ食える
メエシ食えるから　　金いらない
金いらないから　　働かない
働かないから　　時間がある
時間があるから　　遊んでいる
遊んでいるから　　不満がない
不満がないから　　ケンカがない
ケンカがないから　　気分がいい
気分がいいから　　眠くなる
眠くなるから　　陽が沈む
陽沈んだら　　あと知らない
だからアフリカ平和です
だからぼくらはブッシュマン

そして、このような価値感も含めた多様な価値観にもとづく個人の自立が、経済的な豊さを背景として文化を生み、生活を変えていくのであり、固定された単一の価値観の

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

支配する世界からは活発な文化的活動は生まれない。文化とは、生活のしかたの総称であることを考えると当然なことである。

(3) さらに、多様な価値観の存在を前提として、私達自身の生活の質を見定める、個人としての内発的な価値判断の基準づくりをすることである。それによって、自分自身としての生き方を自己の意志で創りあげ、生活の現場において価値の創造をしていくことが可能になる。

自己のしっかりした価値判断の基準や生き方がなく、世間的評価のような相対的価値判断のなかでしか生きられなかった人の悲劇が、吉武輝子の『夫と妻の定年人生学』のなかで描かれている。三菱銀行の名古屋支店長をしている著者の父親は、定年退職後、伊那製陶（現ＩＮＡＸ）の重役に天下りするのだが、盆暮のつけ届けも減り年賀状もガタ減りするなかで、うつ病になり一年後自殺してしまう。こうした、私たちにとってはある意味では喜劇でしかない悲劇は、はっきり言ってうんざりである。このような人は、立場が変われば、Ｊ．Ｋ．ガルブレイスがその著『豊かな社会』のなかで指摘している「シマ状の貧困」（近隣や友人がもっている物へのひがみによる貧困感や技術革新についていけない人たちの相対的貧困感）に陥ってしまうのではないだろうか。私たちがしっかりとした価値判断の基準をもち、自己の生き方を内発的に創りあげていれば、こういう話とは、無縁なはずである。

幸せなことに、自分自身の生き方を自覚し、自己の判断価値によって、自立したライフスタイルや、それに係わるワークスタイルを選ぶ人が少しずつ増えており、また、そうした個人の自立、自覚の必要性が現実の社会のなかで評価され始めていると考えるのは早計だろうか。

トヨタ自動車が定年退職者の再雇用希望者を募集したところ、会社の期待に反して、応募者は４００人中数十人でしかなかったとのことである。また福武書店がフリータイム制を採用した結果、働く人間の自主性が高まり、残業時間が大幅に減少したり、アメリカのテレコミューティングの最大の成果は、同じ理由で能率の向上であったりすることは、今後の経済社会においても「個の確立」が必須なことであり、豊かな生活の前提条件となっていくことを示しているのではないかと期待される。

４．山の手の生活文化に「個の確立」の萌芽を見出す

この研究会が活動の対象として“山の手の生活文化”に着目するのは、そこに近代日本に於いて、その光はかすかとは言いながら、「個人の自立・自我の存在」が見られるからであり、それによってひとつの自立した文化の芽が生まれ、成熟化の方向に向かっていたからである。文化的成熟は、個人の自立とそれに基づく実践なくしては生まれないものである。

文化とは、生活のしかたであり、人間が学習によって取得した生活の総称であり、物

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

心両面にわたる生活形成の様式と内容である（『広辞苑』）ということから考えても、文化は上からすべての条件が整えられて与えられることによって生まれるものではなく、むしろ個人が各々の生活を基盤として自立することにより、ときには、上からの力をはね返すなかで生まれてきたのであり、日本文化の歴史をたどっても、そのことは、はっきりしている。

平安時代の女性による文学、室町期のいわゆる河原者にその源をおく能・狂言、および利休の茶、さらには、士農工商の身分社会のなかで成熟した江戸時代の町人文化――これらの文化が開花してきた条件を振り返ってみると、生産力の増加を背景に新しい経済力が成長しており、その力に支えられた個人の自立心と既成の枠に捕らわれない多様な価値観による意志の発露が見られる。

同じ江戸時代において、文化的成熟が武士の世界ではそれほどでなく、町人の世界を中心に展開するのは、武士が儒教的単一の価値観（忠義・お家大事）によって人間の自由な精神活動が抑えられていた結果ではないだろうか。題名は忘れてしまったが、山本周五郎の小説のなかにでてくる武士の妻は、なぎなた等の武芸から琴、鼓、笛……と多種のいわゆるけいこ事を習得するのだが、そのひとつの事に上手になり、本人が面白くなりかかると、それを禁止され、次のものを習うように姑によって指導される。たびたびのことに、笛なら笛をさらに習熟したいと申し出ると、「武士の妻のつとめの第一はお家大事であり、笛をさらにつづけることはそれを忘れかねないことになるのでまずい」とおしかりを受けるのである。芸術的成熟が、既成の価値観を壊す可能性を予防しているのである。このような硬直した価値観のなかで生きざるをえなかった武士に対し、町人の方は、身分的にはその最下位に位置づけられながらも、貨幣経済の浸透を背景に経済力を生かして、多様な生き方を実践したことによって文化的成熟を生み出したのである。

山の手の生活文化も、戦前という富国強兵的環境のなかでのゆがみはあるとしても、明治末期から昭和初期にかけての経済的発展を背景に、自由民権運動から大正デモクラシーに発展する自由な精神の存在が生み出したものと言える。確かに山の手文化は、それ程確かなものではないとはいえ階級社会を背景にして成立しており、戦後の一億総平等社会に於いては否定されるべき点も無しとはいえないが、これからの豊かな生活のあり方を探るうえでは、多くのヒントを与えてくれるのではないだろうか。（階級社会との関連については、別項松岡氏の論文を参照されたい。）

山の手文化を現在振り返ってみたとき、その特徴となるのは次の点ではないかと思う。

ひとつは、ルネッサンス・宗教改革・市民革命を体験した西欧の思想の導入が、ときには権力者側の予想を超えるスピードで着実に浸透していき、夏目漱石や森鷗外にみる近代的自我の確立への悩みのレベルまで進んでいったことである。

ふたつには、山の手文化を担った人々は、いわゆるサラリーマン層（官吏、軍人、大学教授、医師、芸術家、資産家と会計・銀行員）であり、多くは明治維新後の藩閥を形成した連中とは違う士族であり、彼らはその知的能力を生かしながら、新しい都、東京での新しい生活を自力で築いてきており、その思想的背景になっているのがアメリカ経

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

由のキリスト教精神も含めた西欧的な自由・自治の思想であった。彼らにとっては、生活の西欧化－近代化が文字通りの意味で精神的バックボーンとなっていた人々であったと言える。このバックボーンのもとに、新しい生活に対する明確な価値観が形成され、それに基づいた多彩な山の手の生活文化が開花する。たとえば西欧館または洋室、家族中心の合理的な衛生的な住宅、椅子式の立居振る舞い、洋服や西洋料理、音楽やスポーツ、観劇や三越での買物、避暑地の開拓等、表面的に見れば、うわついた生活の洋風化とだけしかとられないことも、しっかりとした内発的意思の力が背景にあることを見逃してはならない。

それは、

西村伊作 ――― 文化学院と小田原の芸術家コロニー
ヴォーリズ ――― キリスト教の伝導とアメリカ村
小原国芳 ――― 成城学園・玉川学園の開校・開発
羽仁五郎・説子 ――― 自由学園と南沢学園町の開発

等の人々の存在を考えると、ときには西欧直訳ながらも、彼等自身の確固とした価値観による生活像の提示が読み取れる。

今後、こうした生活文化の実際の姿を、文学作品、随筆、伝記、校友会誌等を調べ、データベース化することによって、ともすれば公に表わされることが少なく、資料も少ない山の手の生活を再現し、一面に於いて西欧生活のものまねという面があるとはいえ、個の確立（多様な価値観と自立心）を背景として成立した山の手文化の盛衰を調べ、今後の豊かな生活文化形成の指針としたい。

以　上

―― 引用文献 ――

・「豊かな」の生活学　中嶋　俊介著　ＰＨＰ研究所
・「豊かな時を創るために」
　第12次国民生活審議会綜合政策部会
　余暇・生活文化委員会報告書
　経済企画庁国民生活局編　大蔵省印刷１局
・「個人の生活を重視する社会へ」
　第13次国民生活審議会綜合政策部第一次報告書
・「ゆとり」時代のライフスタイル　日経マーケティア
　飽戸　弘　松田義幸編
・新しい現実　ダイヤモンド
　Ｐ・Ｆ・ドラッカー著
　小田惇生、佐々木実智男訳
・「日本株式会社」批判　社会思想社
　内橋克人＋佐高信共著
・お父さんはとうめい人間　光雲社
　青い窓の会編

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

活動レポート

伊藤　恵
犬飼素子
岩野裕一
鈴木伸子

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

「日常」と「非日常」の融合をめざして

伊藤　恵

２１世紀に向けて、これからの私たちの生活、特に「日常生活」の在り方を考える上で、私にとってこの一年間の活動は、大変有意義なものであった。

現在の日本の都市生活において、決定的に欠如しているものは、「空間（スペース）」と「時間」である。ところが、それに反比例するように「物質」が溢れ返っているために、その三者のバランスが崩れ、多くの人々がストレスを感じている。これを“現実的な日常に追われる生活”と名づけた場合、私たち人間は、非日常、または非現実の精神世界をきちんと確立しない上には、個人としてのアイデンティティを保てない。

いかに「日常生活」のなかに、もっとイマジネーションの世界、つまり「非日常的生活」を取り入れるかが、私たちの精神生活を豊かにする課題だと思う。

ホームコンサートを行なうということは、衣食住という現実の場所に、音楽の、それも生演奏を持ち込むわけであり、まさに「日常」と「非日常」の融合である。

ホームコンサートの具体的な楽しさは、そこに生の音楽があるということだけでなく、その場所に集まる分野の違う多くの人々との交流の充実が大きな要素となっている。

音楽を通して、お互いに触発され、聴覚や視覚、あるときには味覚をも刺激しあい、豊かな会話が成り立つのも、ホームコンサートならではの醍醐味だろう。そのことは特に、第三回目の「全員参加メサイヤ合唱コンサート」で証明されたと思う。

私自身は、第二回目のコンサートに、バイオリニストの久保田巧氏と共に、演奏者の立場として参加させて頂いた。何がいちばん嬉しかったかというと、演奏後に、聴衆としていらしてくださった方々一人ひとりから、演奏や音楽について率直な意見をうかがえたことであり、大きなコンサート会場で千人単位の聴衆と対峙するときには得られない体験であった。もちろん、演奏中、目の前にお客様がいらっしゃるというのは、とても緊張するが……。

私自身、考えを改めなければと反省したことは、音楽というものの存在の在り方である。冒頭に述べたように、理想的な生活は、日常生活と豊かな精神生活の融合だと思うが、私自身、音楽をあまりに非日常的に考えすぎるきらいがあるようだ。もしかしたら、音楽をするということが、あたかも空気を吸ったり吐いたりするように、自然の一部だと考えられたら、もっともっと私自身も解放されるかもしれない。

そんな意味も含めて、本当にこの一年間、恵まれた研究員のメンバーの方々の中で勉強させて頂くことができ、大変感謝している。来年は、もっと多くの人々に私達の研究を知って頂き、コンサートを通じて参加していただけたらと、心より願ってやまない。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

音楽が生活に「不可欠」なものとなるように

犬　飼　素　子

山の手研究会の顔合わせから一年、月々開かれる会合、そして三回のコンサート、短い期間ではあったが、そのなかで、実に有意義な活動ができたと実感している。

第一回目、９４年７月３日の葉山・旧東伏見宮別邸での、吉武由子さん、トリオ・ソリスツ・ウラジオストックをお迎えしてのコンサートでは、館内見学の時間もあり、現存する数少ない震災前の西洋館というものの内部をよく知ることができた。また、岩野氏のレクチャー、「白系ロシア人と東アジアのオーケストラ」を聞くことで、吉武さんを通じて交流のあるウラジオストックの方々を迎えてロシアの音楽を楽しむという実際のコンサートのすばらしさに加えて意味深いことになった。“戦前の日本において、特定の階級層の人々によって行なわれていた西洋館におけるサロンコンサートの再現及び歴史的検証コンサート”という山の手研究会の主旨は、参加者全員に明確に伝わったと思う。第二回目に、“提案型のホームコンサート”ということで、９４年１１月２７日に植松邸のギャラリーで開かれた伊藤恵さん、久保田巧さんを迎えてのコンサートは、すばらしい演奏者による、すばらしい音楽を心から満喫できたうえに、設備などの点でもとても恵まれたホームコンサートであった。第三回目として９４年１２月２５日に、やはり植松邸ギャラリーで開かれた、“メサイアを歌う ― 全員が参加するコンサート”も、本当にカジュアルに、それぞれの技術、感性を持ち寄り、ひとつの音楽の場を創り上げる楽しさ、そして楽しさを共有する喜びを実感できた、とても大切な意味を持つコンサートであった。

これらのコンサート、そして活発な意見が交わされる会合を通じていま再確認したこと、それは、時代と共にライフスタイルが変わり、コンサートの形態もさまざまになるなかでホームコンサートは、ライブ音楽の楽しさ、感動を、親しい人々と共有するということこそが、その魅力である、ということだ。その魅力を充分に感じ、慣れ、主催する側にしろ聴く側にしろ、自分の生活の必要不可欠なものとなっていくことにホームコンサートの定着があり、そのような生活が、ホームコンサートを例に取った場合の現代の「ハイライフ」なのだ、ということである。９５年の活動として、既に定期的にホームコンサートを開く予定になっているが、聴く側として、新しい人々ももちろんだが、毎回同じ人々にも続けて声を掛けると良いと思う。一方的に“これがハイライフだ”“ホームコンサートを開こう”というだけではなく、続けて参加することで、実感してもらえたら良いと思う。また、それらの人々と研究員が話合いの場を持つというのも効果的だと考える。それと並行して、９４年にはあまり進まなかったホームコンサートの実態調査もぜひ行ないたい。自宅に小ホール、ギャラリーなどを持つ人などを中心に、ホームコンサートはかなり増えているということをよく耳にする。研究員の幅広い人脈を使って、そういう人々の話、コンサートの取材をすることから、現状の把握ができ、きっと興味深い発見ができることと思う。限られた時間と限られた研究員だが、山の手研究会二年目でどこまで掘り下げ、どこまで効果的な歩みができるか、とても楽しみである。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

“消費としての文化”に対するアンチテーゼ

岩　野　裕　一

「クリスマスの＜メサイヤ＞はとても楽しかった。ありがとう」

何人かの友人から、こんな年賀状を受け取った。わが研究会が主催した、みんなでクリスマスに合唱しよう、という催し（94年12月25日、世田谷・植松邸）への感想である。指揮、伴奏にプロの力を借りたとはいえ、参加者自らが“演奏者”になり、歌い終ったあとは持ち寄った食べ物、飲み物でパーティ、という、まさにホーム・コンサートにふさわしいスタイルで心豊かなひとときを送ることができたのは、研究会１年間の締め括りに相応しいものだった。

この日の経験は、“自分は文化の受け手に過ぎない”と思い込んでいた人たちが、ホーム・コンサートという形態をとることによって、立派な“送り手”になり得ることを教えてくれた。そして、もうひとつ感銘を受けたこと、それは、参加してくださった方々が、初対面同士にもかかわらず、パーティの場で“会話”を存分に楽しんでいたことである。

豊かな暮らし、という言葉から連想するイメージは人それぞれだが、その基本となるのは『会話の喜び』ではないだろうか。私はこのことを、研究会を通じて身をもって体験した（定例会議で飛び交う会話の、何と愉快で刺激的だったこと！）。「ライフスタイル」「カルチャー」「心の時代」……、物質的な豊かさを追い求めていた社会が行き詰まり、次なるキーワードばかりがひとり歩きしている昨今だが、思ったこと、感じたことを互いに話し合う、という行為を抜きにしては、精神的な豊かさはあり得ないはずだ。いま、物質に代わるものとして、“消費としての文化”を追い求めるという愚行に走りつつある日本の風潮に、何とかブレーキをかけるには、そのことを改めて認識する必要があるように思えてならない。

言い換えれば、１年間の実践的な活動を通じて私が学び取ったのは、「ホーム・コンサート」は“消費としての文化”に対する強力なアンチテーゼであるということであった。そして、山の手文化もまた、西欧文化の模倣からスタートしたとはいえ、その時代の日本における理想的なライフスタイルを提示した、という意味で、文化の送り手として存在していたのではないだろうか。

シンクタンクというものは、理論先行で研究を進めるのが従来のスタイルだったため、３回のコンサート開催という私たちの方法論は、型破りだったかもしれない。そのため、山の手文化の研究が後手に回ってしまったという反省はあるが（付言すれば、研究会のメンバー一人ひとりが、実は山の手文化の“申し子”であり、すでに血肉となっているために、かえって理論的研究が遅れたきらいもある）、こうした実践的な活動も、新しい価値観を探るための試みの一環と位置付けて、各位の理解を求めたい。

最後に、２年目の課題として『ゲストを招いてのヒアリング』『コンサート開催にあたって事務局との役割分担明確化（特に経費の面）』の２点、将来的には『研究員の持つ問題意識を広く世に問う文字媒体（雑誌、パソコン利用など）の開発』をあげておく。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

山の手ライフスタイルとホームコンサートの間にあるもの

鈴　木　伸　子

山の手と下町。『東京人』という雑誌の編集が本業である私にとっては、常に身近にあるテーマだ。しかし、下町はともかく、山の手文化についてはあまり数多く取材した経験もないし、そういった記事の反響が大きかったという記憶もない。

山の手と下町では、圧倒的に下町のウケがいい。あったかい人情、路地、商店街、銭湯、お祭。みんな観光地的要素の揃っている下町を好む。ハレの場として、遊びに行く場所としてはそれでいい。それでいて、総中流化した豊かな日本人、東京人たちは、山の手に住みたがる。

山の手の住宅でホームコンサート、という、一見誰もが憧れそうな生活スタイルに、実はそれほど欲求はないのではないかという疑いを、昨年の活動のなかで、実は私は持っていた。日本人の生活は、それほど根底まで西欧化していないし、下町の路地や人情が好きだといいながら、山の手に住みたがる東京人に、絵に描いたような山の手ライフであるホームコンサートをやりたいと言わせるには、あまりにも恥ずかしさや衒いが大きすぎる。たとえ百歩譲って熱烈な音楽愛好者だとしても、家の天井は低く、部屋は狭く、隣りの家と密接していて、自宅ではステレオを鳴らすこと、アップライトピアノを弾くのがせいぜいなのだから。実際、昨年、ホームコンサートを開くことができたのも、教会の寮だったり、画廊になる予定の場所だ。

ホームコンサート、サロンコンサートというものは、やはり戦前の邸宅に住む一部上流階級にのみ許されたものだったのかという懸念ももたざるを得なかった。

そんななかでいくつかホームコンサートを経験してみると、これが楽しい。小さな空間で音楽を演奏家と聴衆で分かち合える贅沢さ、生演奏の持つ迫力、合唱で演奏に参加することで得られる満足感などに開眼してくる。そして、それらはいままで体験したことがなかっただけに、回を重ねるごとに増してくるのだ。やはり人間やってみなければわからないということがある。

ただ、現在の日本の状況でなかなか、ホームコンサートを自分の家でやってみようという発想自体が生じにくいだろう。それを普及させるには、かなりの啓蒙活動が必要だ。

私たちが育った高度経済成長時代には、子どものいる各家庭にはピアノがいきわたり、幼少時からの音楽教育は必須かつ常識になった。それから２０年を経て、音楽を受容し楽しむ人口は圧倒的に増えたはずだ。ホームコンサートの下地はできあがっている。あとは、みんなにこういう楽しみ方があると気づいてもらうことだ。

そのためには、従来より小さめのいままでのような形でのコンサートを行なっていくことで、より数多くの人にホームコンサートを実体験してもらうこと。そしてまた、より小規模な、ヴァイオリンとアップライトピアノだけでもできるホームコンサートをどんどん行なって実績を作っていくことはどうだろうか。

「知ってもらうこと」と「やってみること」、このふたつが大切なのでは、と感じたのが、私のこの一年間の成果だった。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

座談会 ／ 95年2月23日　読売広告社別館

“ハイライフ”ってなんだろう？

――――「エリート」不在の“平等社会”と生活文化

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

<山の手文化研究会　ホームコンサートプロジェクト　特別座談会>

“ハイライフ”ってなんだろう　？

――――「エリート」不在の“平等社会”と生活文化

◆メルセデス・ベンツに乗って、
ルイ・ヴィトンのバッグを持って、
ウィーンのオペラを見に行くのがハイライフなのではない。
より豊かな生活、その理想像を自分自身で描ける人の少なさ。
何かモノを消費することでしか豊かさを感じ取れない人の多さ。
戦前には確かに存在したはずのハイライフが、
いつのまにかこの国からなくなってしまった。
すみずみにまで平等が行き渡ったこの社会で、
何がハイライフかを模索するのは難題だ。
たとえば音楽を楽しむ、たとえばリゾートを楽しむ――
方法からして、まだまだぎこちない。
自分で自分の心地よさを探すことに慣れていない戸惑い。
結局、ハイライフの探求とは、
「豊かさとは何か」「日本人とは何か」という
根源的な問いになってしまうのだろうか？

［出席者］　岩渕潤子、岩野裕一、鈴木伸子、松岡温彦、水野統夫、米村洋一

■　情熱と勇気が怨嗟を乗り越える

岩野　そもそも、日本人はほんとうに“ハイライフ”を求めているんでしょうか？　ゆとりが欲しいといいながら、さっぱり行動を起こさないように見えるのですが。

米村　勇気がないとできないんですよ。

岩渕　人に妬まれても動じないというのは、凄いことですからね。

米村　私が会社を辞めたときに「理想の生活」と思い描いたのは、朝食のあと葉山マリーナでヨットを楽しんで、シャワーを浴びてから食事とお昼寝、そして2時ごろから7時ごろまで湘南リゾートオフィス[1]で仕事 ― と、こんな生活が週のうち半分くらいはできるんじゃないかと思ってたんです。これが私の、都会ではでき

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ない、ささやかなハイライフだったんですが、結局なぜできないかといえば、勇気がない、ということになってしまう。岩渕　勇気が起きない原因というのは？

米村　そういうライフスタイル[2]が実現できる仕掛けを大掛かりに作ろう、なんて思ったからですね。ぼくの事例はともかくとして、日本は、お金持ちであっても楽しむことを許さない社会でしょう。ところが、いまの制度を変えるためには、ものすごいエネルギーが要る。そこまでのヒマがないから、結局楽しむときにはみんな海外に行ってしまう。

松岡　いまは、自分が本当にどうしてもやりたいと思えば、お金はなんとかなる世の中でしょう。なのに、みんな動かないというこの諦めは、いったい何なのだろうか。

鈴木　仲間がいないからじゃないですか。昆虫採集[3]みたいな孤独な趣味ならともかく、ヨットなんてひとりじゃできないでしょう（笑）。お客様を呼んだところで、いつも呼んでばかりじゃ、“なんか変だな”と感じると思うの。呼んだり呼ばれたり、っていうことになれば、日常の社交[4]というライフスタイルとして定着すると思うけど、呼んでばかりじゃバカみたいな気持ちになる。

米村　ぼくの先輩がひと足先に会社を辞めて、「ざまあみろ、ゴルフでもテニスでも空いてる平日にできる」なんて喜んでいたんだけれど、気がつくと相手がいない。そういう点はあるかもしれないね。

岩渕　画一的な休みのパターンも問題ですよね。結局、顰蹙を買っても休みを取ろうという“勇気”の問題なのかなあ。

松岡　勇気っていうのは、つまり“好き”かどうかなんだよ。僕は軽井沢[5]が好きだから行くんだし、音楽だって“好きだ”“やりたい”と思うからであってね。

鈴木　情熱が怨嗟[6]を乗り越える（笑）。

米村　ぼくの前にいた職場は、去年の夏から完全自己裁量労働制[7]をはじめたんですが、聞いてみると、大半はやっぱり昼間会社に来ているんですね。

岩渕　日本人は自己管理ができないんですよ。

米村　そういう問題じゃなくて、他人に自分がちゃんとやっていることを見てもらわないと、安心できないんです。

鈴木　会社にいる、っていうことが重要だったりするんです。仕事は成績で評価するといいながら。

米村　これはサラリーマンだけじゃなくて水野さんみたいな社長[8]も同じですよ（笑）。

松岡　人間の不安というのは、人から“評価[9]されない”ということだと思う。評価の場というのは、普通の人は会社だよね。家族の評価はなくなっちゃったから。ぼくなんかの場合も、会社じゃまったく評価されないけれど（笑）、友人は“あいつはおもしろい”といってくれるから、精神的に楽だよね。やりたい、と思うところには一生懸命行くし。

水野　やっぱり、評価されたいというのは本能なんだろうね。

岩渕　評価されたい、っていう気持ち、私にはわからないなあ。私はいまだかつて、他人に評価されたいと思ったことがない。

松岡　他人じゃなくて、自分自身の問題なんですよ。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

岩渕　それだったら会社に行く必要ないんじゃない？

水野　評価してくれる人間が、普通の人にとっては会社の人しかいない。

岩野　会社は経済的基盤[10]でもあるし。

岩渕　うーん、何をするにしても、経済的基盤がないとできない、という現実はあるわね。でも、実はそんなにがんじがらめではなくて、テニスやゴルフにしても、道具を揃えなければ始められない、とか、やろうという欲望の前に“様式”が立ちはだかる[11]のが、日本的な特徴でしょ？　日本の音楽は、ピアノを売ったりハイファイ・セットを売るためのものだ、というのが私の持論だけれど、趣味のスポーツにしても、全部経済活動と結び付いちゃってるわけね。結局、戦後の経済活動[12]がこんなふうにしてしまったんだと思うんだけど。

松岡　戦前の伝統[13]から“プッツン”しちゃったからね。何が楽しいか、という、親が子に伝える生活の伝統みたいなものがなくなっちゃった。

岩野　生活を楽しもうという情熱そのものがまったくない、っていう人ばかりになってしまったことが、もっと大きな問題じゃありませんか？

鈴木　そうですよね。あまりの情熱のなさに唖然とする。

岩渕　それはなぜなんだろうか？

鈴木　知らないんじゃないかしら、楽しい世界があるってことを。

岩渕　楽しむこと自体が“怨嗟”の対象になってしまっている。いつから日本人はこうなってしまったんだろうか？

松岡　とにかく他人を引き摺り下ろそうとするからね。他人の不幸が最大の楽しみになっている。

岩渕　ジャーナリズム[14]が際たるもの。ホームコンサート[15]をやっている人も、最大の懸念は「クラシック[16]なんかやって、変なウチ」と近所からいわれることでしょ。その人達を集団で排斥することで、その他の人々が結束する、みたいな。

鈴木　日本人の社会はすごく西洋化[17]したでしょう。だから、音楽にしても、どうしても西洋化した部分から生活の楽しみを摂取する傾向が強いじゃないですか。すると、「お高く止まってるわね、クラシックなんて」なんていわれちゃう。

■　優秀な人は会社では偉くなれない

米村　大正時代[18]、鎌倉[19]に住んだ文化人や財界人が集まって、鎌倉同人会[20]というのをつくったんです。できてすぐに関東大震災があって、鎌倉の再建にすごい力をふるいました。いわゆるボランティア[21]組織ですが、ある時期に大衆化[22]していくと、とたんに活性化しなくなってしまい、いまでは名前だけの存在になってしまった。この栄枯盛衰をみていると、社会的にも経済的にも力のある人たちが、社会に貢献しようという意欲を持っていた時代が、大正時代にはあったんですね。ところが、昭和[23]に入って、とくに戦後以降、そうした経済力のある人が、地域に対してまったく関心を持たなくなってしまった。自分のことし

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

か考えない。経済的には戦前と負けず劣らず豊かなのに、前者の人たちのほうが明らかにゆとりがあります。

水野　昔は、お金の使い方というか、例えば田園調布[24]のような町を開発[25]するとしても、自分の理想や生き方のベースになるものを作ろう、という志[26]がもう少しあった。ある意味では、趣味と仕事が一致していたというか……。

松岡　というより、かつては理想を持つ人と持たない人がはっきり分かれていた。いま我々がしているような議論をする“エリート[27]”、つまり大学を出たような立派な人はほんのひと握りで、ほとんどは関係ない人だった。ところがいまは、みんなが関係あるようなつもりになっているけれど、実は誰も関係ない（笑）。

米村　ただ、ヒアリングに招いた新日本フィルの毛利さん[28]の話を聞いて感じたのだけれど、ある種の大衆社会[22]になっているからこそ、家庭でサロン・コンサートができるわけであって、“大衆イコール無責任”という時代からは変わってきているのいではないですか。以前は大衆、すなわち有象無象だといわれた人たちが、多少歪んだり、スケールは小さいという問題はあるけれども、自意識を持って能動的に動き始める基盤ができつつある、というのが、現状ではないですか。問題は、基盤はできているが彼らに具体的な経験がない、あるいは社会的な経験がない、ということでしょう。

松岡　そこをどう評価するか、だと思うんです。ある意味では大衆が育っているけれど、本当の意味での民主主義[29]における“自己責任[29]”が育っているかどうか、私はちょっと懐疑的なんですよ。最近は、大蔵大臣までが「銀行は倒産してもいい」と言い出して、みんなも「それは当然だ」なんて言ってるけど、いままでは、政府には預金者や投資家[30]を守る義務がある、ということで制度が成り立っていた。「私たちが保護するから、みなさんはそのなかでやってください」ということですね。もしこの枠組みを壊すのであれば、アメリカのように、「皆さん自己責任でやってください。その代わり、管理のためにお預かりしていた税金[31]はお返しします」ってなるのならいいけれど、税金も返さない、権力[32]も握ったままで倒産してもいいよ、なんて、そんなバカなことをいうのは、基本的なことがわかってない証拠ですよ。これじゃあ、社会としてはグチャグチャになってしまう。

岩渕　そういう基本的なことがわかる人が、社会のなかにあまり存在しないとしたら、それこそ恐ろしいことですよね。

■　組織的にエリートを育てた国・アメリカ

水野　そういう感覚をいちばん喪失しているのは、マスコミ[33]なんじゃないかな。新聞なんか読んでも、いったい何考えてるのかと思っちゃう。

米村　つまり、かつてはエリートであったはずの人たちのモラル[34]が問われているんです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

岩渕　ただ、エリートがエリートたる上で必要な体面をすべてはぎ取った上で、なおかつ責任を取れというのは、酷ですね。岩崎家[35]なんかみても、あれは悲惨です。日本という国と政府とその他の人々は、寄ってたかってエリートと呼ばれる人々の体面をあれだけ奪ったのだから、それで責任を取れ、というならば、こんな国滅びてしまえ、といいたいですよね。結局、日本は社会に対する責任を取れる人が、すでに存在しない社会になってしまったのですよ。官僚[36]が責任を取るわけがないし。

松岡　ハイライフとは何かを考える上で避けて通れないのは、エリートの問題ですね。

岩渕　ヨーロッパの国々には、ひとつの国としての文化は滅びないという印象が強い。それは、弊害も多々あるにせよ、体面を損なわない程度のものを残したエリートが責任を取っているからです。いくら日本には皇室[37]があるから、といっても、日本は一切そういう部分のない国になってしまいましたね。

米村　アメリカはどうなんでしょう？

岩渕　アメリカが面白いのは、あの国は他の国々と同列に論じられないというか、やはりあれだけの面積を持っている国はヨーロッパと単純な比較はできないんですね。ヨーロッパ的なエリート社会やかつての日本の貴族社会[38]は、エリートの権益を他者に与えないことによって成り立っていましたが、アメリカの場合は、建国[39]のときからエリートをいかに組織的に増やすか、ということに力を注いできた。しかも、生まれや家柄[40]とはまったく別の意味でのエリート、つまり“責任をとる人”という部分だけでエリートを作ったんです。米村　戦後の日本は、そのどちらにもいかなかったですよね。

鈴木　アメリカのエリートというのは、具体的にいうと、慈善[41]をやったりとか…？

岩渕　というより、彼らの持つ“国を守るためには本当に命を捨てる”という感じ、つまり、国というものがある理想の上に成り立っている[42]、という理念は、住めば絶対に分かりますよ。

米村　そういうものがないと、確かにアメリカはまとまらないですね。

岩渕　そう、まさに理論の通りに作られた国なんですよ。ルーズベルトは「この国家は、史上最大の実験である」と言ってるんだけど、民主主義[43]という理念を実践して、その実験のプロセスにあるがアメリカというわけなの。なぜ人々がその理念を信じたかは不思議でもあるんだけど、少なくともアメリカでエリートが“責任を取る”というのは、戦争があれば民主主義のために闘うことだし、税金を納めることもそう。だから、脱税は重罪です。もちろんそのなかで教育の“格差”はあって、マイノリティー[44]の問題は常に存在するんだけど、注意すべきなのは、マイノリティーは絶えず流動していて、固定した一定のグループではない、ということね。つまり、新しく入ってきた人たちがマイノリティーなの。下層になる人たちというのがどんどん出てきて、全体はボトムアップしている。だから、三代経てばまともな教育が受けられるところまで行く。

米村　日本の場合不幸だったのは、戦後の占領軍による民主化[45]は日本の特殊性[46]を充分に理解しないで行なったために、上層の封建的な権力の破壊[47]ばかりに重

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

点を置いて、これはある意味で成功したんだけれど、大衆の“モラル”みたいなものについては、当たり前のものとして、あまり配慮しなかったことですね。

松岡　終戦直後は、大衆に割合モラルがあったのかもしれないけれどね。それと、特に問題なのは、占領軍が考えたデモクラシーのレベルと、アメリカのエリートのそれとは、ずいぶん違っていた、ということですよ。

岩野　朝比奈隆氏[47]によると、大阪のＮＨＫ付の兵隊[48]には、日本に来てはじめてオーケストラを聞いた、っていう連中がいたそうですよ。

岩渕　いちばん最初に進駐してきた人たちはある程度レベルの高い人だったけれど、あとから来たグループは問題があった、と聞いたことがある。まあ、我々はほかの文化人のように、すべて進駐軍のせいにしても始まらないけれど（笑）。

松岡　ちょっと議論をまとめると、米村さんがいうように、大衆がある程度育ってきて、それをどう“責任ある大衆”に育てていくか、そのシステムは果たして提示し得るのか、ということが課題としてあるわけですね。

米村　これまでは政権が安定して、古いタイプの意思決定システム[49]が守られてきたから、官僚もそれなりにやることができた。でも、このままでは仕事ができなくなるのは明らかです。地方分権[50]とか、大衆が権利と同時に自己責任や義務についても認識しながら地域社会の運営に関わるような動きが本当に始まるのは、これからなんですよ。これは誰も経験していませんから、誰も教えてくれないなかで、みんなが手探りでやっていかなければならない。

■　個体差を認めない“平等社会”の弊害

岩渕　アメリカに長く住んでいると、近代世界すなわちアメリカ[51]だ、みたいな考えになって、世の中はすべてこういうものだと思ってしまう。ところが日本に戻ってくると、「ゲッ、世の中にはこんな国があるのか」ってびっくりする（笑）。日本はいろんな意味でひどく不愉快なわけですよ。だから帰国当初は、アメリカの軍隊のように、食べ物にしても何にしても、アメリカからすべて持ち込まないと暮らせないようになってしまう。

それが、イタリア[52]に行ってはじめて“アメリカの食べ物がない！”っていう状態になって、これには信じられないほど驚いた。日本もひどいと思ったけれど、それどころじゃない。イタリアってアメリカの食べ物は高いし、銀行へ行けば３時間も待たされるし、有名人の子どもじゃなければ就職だってできないし、腹の探り合いと根回しの世界だし、それでいて誰ひとり文句を言わないわけでしょう。その驚きを抱えてイギリス[53]へ行ったら、今度は代々肉屋の息子は肉屋以上には絶対になれない、なんていう人たちを初めて見て、それに比べたら日本はなんていい国だろうか、と思ってしまった。つまり、ヨーロッパに暮らした最大の収穫は、アメリカがいかに特殊な国か、ということを知ったことですね。ヨーロッパに住んだら、日本の非合理性に文句なんかいえませんよ。「イタリアはアフリ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

カにそっくりだ」と、ケニアに住んでいた友人が言うくらいでした。
ただし、イタリアにもイギリスにも確かにエリートはいるのね。イタリアの大学進学率[54]は2％弱で、代々お金のある人以外は一切行けない。奨学金なんてないんですよ。それと、本が高い！　ちょっと買うとすぐ10万円くらいいってしまう。印刷部数も少ないし、本を買う層がいないんですよ。ところがアメリカでは、どんな人でも奨学金[55]がもらえて、しかも非常に高度な教育をするんですね。

米村　日本は誰でも行けるけど、水準は低い。

岩渕　ヨーロッパ型のエリートはちょっと複雑で、みんな2、3ヵ国語できるし、こういう人が本を買ったり音楽を聞いたりしている。彼らが文化を担っているのは事実だけど……。

米村　だから、毛利さんのようなホームコンサートは、まさに日本的ですね。ご本人は謙遜しておっしゃっていたけれど、別にヨーロッパのような大邸宅でなくてもできる、というのは、ある意味では素晴らしいことであって、これをいい部分として伸ばすことができるといいですね。

岩渕　潜在的にはそういうことができる社会である、というのは評価していいのだけれど、にもかかわらず、そんなことはできないと思い込んでいるというのが問題ですよ。

鈴木　自宅で音楽会なんて、思いもつかない、っていうのが正直なところではないかしら。

米村　日本人は、考えもつかないことはやらないけれど、できるとわかれば雪崩を打つかもしれない。明治、大正にはピアノ[56]を家で持つ、なんて思いもよらなかったのが、いまでは団地の2ＤＫにもピアノがあるんですから。まあ、これをハイライフというかどうかは問題ですが……。

岩野　日本でピアノが売れたのは昭和40年代で、いまは東南アジアが中古ピアノブームだそうです。

松岡　つまり、完全に“モノ”になっちゃったわけでしょう。家電製品と同じレベルの。いま、欲しいモノが見えなくなっちゃったというのは、やっとまともな時代に入った、という証拠かもしれないけど、ただ、日本は絶対的な人の数が多いんだね、ヨーロッパの国なんかと比べて。だから、こういう議論をする人というのは極めて限られていて、一方で大量消費[57]に走るような大衆というのはずーっと離れたところにたくさんいて、双方のあいだには、相当大きな落差があるんだと思う。この差はなかなか埋まらないものであって、それについてはもう少し考えなくちゃいけないね。

岩渕　差があったらあったで、その差を無理に埋める必要はないのに、日本人はすぐにそれを埋めたがる。それが非常に不愉快ですね。

一同　そうそう。

松岡　そこがひとつの議論の争点ですよ。埋めるべきか、埋めないべきかというのは。

岩渕　差異を認めない社会、というのがソーシャル・プレッシャーとしてあるでしょう。

米村　しかも、それを“上下の差”と読み替えちゃう。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

岩渕　これって、本来は個体差[58]なんですよね。

岩野　音楽が嫌いな人にホームコンサートを押し付けるつもりは、まったくありませんからね。

米村　それが、音楽が好きな人は高級だ、っていう話になって、上下関係で差別化[58]しようとする。

松岡　音楽教育というものが技術偏重[59]で、音楽が持っている文化的な文脈のなかでとらえようという広がりがないから、音楽は音楽、絵は絵と切り離して考えちゃう。ひとりの人がいろんなことを話せないというか、音楽なら音楽、テニスならテニスと、そのことしか話せないから、我々みたいにいろんなことに気が散っている人種は、友達をいちいち分けなきゃいけない（笑）。外国なら、同じ階層[60]なら同じような趣味を持っていて、どんな話でもできるわけですよ。インドなんかでも、上流階級の人は当たり前のようになんでも話せるけれど、下にいけば郵便屋さんなら郵便のことだけしか話せない。

岩渕　アメリカには貴族はいないけれど、同じグループであれば多岐にわたる趣味でつながっていますよね。

松岡　大蔵省のある局長のところに、アメリカの財務省の同じクラスの人が来日して話をしたら、仕事をしているうちはよかったんだけれど、パーティやオフになると全然共通の話題がなくて、呆れたそうですよ。仕方ないから、それ以後はもっと下のクラスの人間、つまり経済の話しかできないクラスを派遣するようになった（笑）。旧制高校[61]のように、国際社会の相手に合わせなきゃいけないから幅広い教養[62]が必要だ、という謙虚さがなくなって、日本がいちばんだと思ってるんだからね。まあ、これくらい単細胞な人間を集めれば、ある程度のところに集中できるんだから、生産効率[63]が上がるに決まってるわけですよ。

米村　日本の場合は、ランクが上だからそれなりの教養を持っているか、というとそうではなくて、逆に、みんなダメかというと、教養人が会社では窓際族[64]になっていたりするから、余計外から見るとわかりづらいようになっている。

岩渕　日本でとても悪いと思うのは、“文化に興味を持った人は経営者[65]として最低である”といった見方をするでしょう。確かにそういう例は過去にあったわけだけど、実際それは文化にうつつを抜かしたから会社を潰したわけではないはずで、にもかかわらず世の中がそう指弾した、ということは、人々はそういう形で攻撃することを望んでいたわけね。突き詰めていうと、戦後のエリート教育というのは社会主義化[66]してしまったわけでしょう。社会の潜在的なドライブ、つまりアンダーカレントが、エリートを潰してしまおうという方向にあって、直接的にはいわなくても、戦後50年[67]にわたる刷り込みになって、人々のあいだにこういう形で現れてくる。鈴木　無教養な木端役人が、日々子どもたちを義務教育[68]しているんだものねぇ。

岩渕　日教組[69]なんて、際たるものよね。彼らが文化をこうしている感じがある。

米村　まあ、本来はエリートしか就けないような職業やポストに、木端役人がいるという“平等主義[70]”の代償なんですね。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

岩渕　結局、ほかの国では文化や芸術に手を出すのは超一流の経営者なのに、日本の場合は、安宅産業をはじめ不幸なケースが続いたわけね。でも、安宅にしても文化に手を出したから潰れたわけじゃない。経営者としての能力の問題を、文化のせいにすり替えている。

水野　経営的にも能力があって、文化的にも水準が高いとなると、「こんちくしょう！」と怨嗟の対象になりますよ。

岩渕　そのあたりが妙なところで、アメリカなら賞賛されますよ。

岩野　だから、この“怨嗟の構造”は進駐軍のせいではない。

米村　彼らが当然と思う基盤が、日本にはなかったんですよ。

岩渕　戦国時代の日本には、“怨嗟の構造”なんかなかったんだから、これは国民的資質[71]っていうわけじゃないはずなんだけど。

■　自分の時間を大切にする人は増えているが……

鈴木　ところで、関西と関東の地域差みたいなものはあるんでしょうか。関西の金持ちは関東よりスケールが大きくて、ハイライフというか、社交界のようなものがあるように見えるのだけれど……。

松岡　もちろん東京にもそういう世界はあるにはあるんだけど、これはちょっとハイライフとは違って、みんな外からわからないようにこっそりやってる。

岩野　ほんとうならば、都市ごとの差異というのは上下関係ではなかったはずなのに、東京がいちばん、というヒエラルキーができてしまったためではないでしょうか。日本の地方都市の衰退ぶりは、ひどいものですよ。

岩渕　社交界[72]でいえば、昔は個人の資格でそういうところに参加したのに、いまは“○○会社の社長になったから”顔を出す。これって逆ですよね。ファンド・レイジング[73]の集いなんかが下品になるのは、こういう人たちが集まるからですよ。

松岡　だから、参加するのはその地位についているあいだだけ。

鈴木　下町の商店主なんか、いまの人はだめだけど、先代はすごい趣味人[74]だった、っていうところが多いですよ。

米村　地方都市でもおなじでしょうね。それなりの地位にいる人は、趣味人だった。

鈴木　その世代の人たちは、楽しみに対して貪欲だったと思うの。

松岡　いまの人は、何事も楽しいとは思わないんだろうね。楽しいと思えば何かやるもの。

岩渕　というより、楽しい人を見るだけで怨嗟の対象にしてしまう。

水野　でも、だんだん増えてるんじゃないかな。東大の法学部を出てもあえて地方公務員になって、自分の時間を大切にしよう、なんて人が。

岩野　それは確かに増えているけど、危惧しているのは、そういう人たちが社会に対する責任を放棄してしまって、自分の世界に入り込んでいるんじゃないか、ってい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

うことなんです。みんながそうなってしまう可能性が強い。

岩渕　それは組織的なエリート教育をしていないからですよ。

岩野　だから、個が充実する前にこの国は滅びてしまうんじゃないか、と。

水野　だけど、みんながみんな“個の確立[75]”なんてできるだろうか。結局、どこの階層がそうなるか、ということだと思うんだけど。

米村　ハイライフ研究所としては、そのあたりをはっきりさせなければいけないと思う。

岩渕　それ以上に、果たしてこうした世の中の流れをコントロールすべきなのか、滅びゆく日本[76]をほんとうに救うべきなのか、という根本的な疑問もある。一時は才能のある人がみんな海外に流出してしまったけれど、最近は日本で仕事をする人が増えてきてるのね。つまり、彼らにとっては、それが責任を取るっていうことで、私も日本にいるだけで充分責任を果たしていると思う（笑）。よその国でも食べられるのに、無理して日本にいる必要ないんだから。

松岡　玉村豊男[77]さんのように、回りからいろいろ言われるかもしれないけれど、自ら理想のライフスタイルを実践して手本を見せる、というのもひとつの方法だと思う。自分がこれはと思う生活を回りの人が見て、ああいいな、と思って真似する人が出てくれば、というのが彼の考えなんですね。

岩渕　ただ、氏の微妙なところは、ライフスタイルそのものが事業になってしまうかもしれない、というところですよね。庶民は、あれを見たらそうとしか思いませんよ。

鈴木　マスコミなんか、特にね。ああいう暮らし方ができるっていうことは、ほとんどの人が知らなかったわけだから、そういう意味では啓蒙活動[78]になっているんですけど。

米村　マスコミがその代表だけれど、感性[79]を持たない人が権力を握ってしまった、という問題がある。

鈴木　『家庭画報』や『クラッシイ』[80]みたいな女性誌には、あるハイライフの姿が具現化して載っている一方で、『アサヒ芸能』や『週刊現代』[81]みたいな雑誌は、ああいう暮らしをクソミソに書いてますよね。それを、同じ家庭のお母さんとお父さんが読んでいるんですからね。

岩渕　それも、日本の特徴かもしれない。

岩野　こうして議論してみると、“ハイライフとは何か”という問いは、“日本はこれでいいのか”という根源的な問いかけに等しいことがわかります。つまり、豊かで多様なライフスタイルを創造してきたのは、洋の東西を問わず社会的な責任を持った「エリート」たちであり、その一方で、戦後50年のあいだに日本を覆い尽くした“平等主義”は、彼らの存在を否定することで精神的な満足を得てきたわけです。私たちは、戦前に開花した“山の手文化”というもののなかに、エリートが築いた文化の一形態を見出だすべく研究を続けてきたわけですが、ホームコンサートの実践を通じてライフスタイルの提案を続けるだけでなく、日本の大衆が辿ってきた道程を検証することで、ハイライフという言葉が内包する根本的な問題を考え続けていきたいと思います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

註釈

1)「湘南リゾートオフィス」

神奈川県三浦郡葉山町にある。本来の人間は、職（仕事）、住（生活）、遊が一体で、自己の実現に向けて生きるべき社会的動物である、という理念に基づいてつくられている。リゾートオフィスの恵まれた自然環境の中で創造的な仕事が出来る。天気がよければヨットに乗り、潮がよければ魚を釣り、すると猛然と仕事への意欲が沸いてくる。ヘミングウエイがそうだった。

2)「ライフスタイル」

誰にもライフスタイルはあるが、ここでは、自分の夢の生活に一歩でも近づくために、日常に特別に配慮した生活をいう。「小原庄助さん、朝寝、朝酒、朝湯が大好きで…」これを典型的なライフスタイルという。

3)「昆虫採集」

いまでも渋谷の宮益坂を登っていくと、青山通りに出たところに「志賀昆虫店」がある。
この店で展翅板を買って、三角紙から「キベリタテハ」をとりだして、４０ワットの電球の下でピンセットで丁寧に羽を広げる。蝶の鱗翅が鈍く光る――。昆虫採集のプロセスのうち、前半は皆で捕虫網を振り回すが、後半の過程は孤独な作業になる。

4)「社交」「社交界」

鹿鳴館から始まったような日本の「社交界」は、いまも霞が関に行くと元華族が集まって「日の名残り」を楽しんでいる。だれそれの「お宅」にお呼ばれすると、ハイカラな神戸の缶入りのゴーフルを携えてお訪ねする。そのときは訪ねる人も、迎える人たちも、ちょっとおしゃれをしてという、「応接間」の時代。

5)「軽井沢」

既にリゾート博物館。不動産屋と観光客が外国人、文化人を追い出した。いまやリゾートライフをエンジョイ出来ない二世、三世財界人が広い別荘を所有している。バブル成金の成れの果てと見通しの無い地元民の開発で、やがては「信州の東村山」となって首都圏に埋没する運命。

6)「怨嗟」

現代の「ハイライフ」を語る上で重要なキーワードのひとつ。誤った平等主義が「怨嗟」をひきおこす。何不自由無く暮らしていても、他人が自分より良い生活をしていると思い込むと、不安と不満にかられ怨嗟の感情が首を出す。やがて”怨嗟同盟”を作って、スケープ・ゴートになった者を闇にまみれて刺す。「怨嗟」が発散されずに蓄積されるとテロになり、個人的なものが組織的になると、やがては戦争になる。

7)「完全自己裁量労働制」「自己管理」

ある古代ギリシャの奴隷が主人から自由を与えられたので、あわててスケジュール管理のコンピュータ・ソフトを買ったという笑い話があったかどうかわからないが、現代の多くの人が、自己管理の経験がない。人生のほとんどを、意識しているかどうかはともかくとして、他人や外からの制約で管理されている。この外的制約から開放されると何をしてよいかわからず、ひどい場合には神経症になる。いまの日本人に自己管理技術はない。ほとんど退化している。

8)「水野さんみたいな社長」

山の手文化研究会のメンバー、水野統夫氏のこと。氏は友人たちに、「湘南リゾートオフィスの推進者でありながら、設計事務所の社長として”社員をいかに喰わせるか”に汲々として腐

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

心している」と揶揄される毎日だそうである。

9)「評価」

ここで言う評価は世間一般、社会的評価を指すのではない。「自分が他の人と区別出来ること」をいう。クローン人間社会であれば誰も評価されない。そこで人々は自分の存在を確かめようとして、自分が目立つように何かしないではいられなくなる。日本の平等主義はどこをどう間違えたのか、教育過程でクローン人間をつくることに励んでいる。従って、自分を見失わないようにする防衛本能から評価を求めようとする。しかし、日本の教育の仕組みの中には、決められた成績の評価システムしかない。この評価にあぶれる人たちが多いので「いじめ」など様々な問題がおきる。

10)「経済的基盤」

日本の全就業人口に占めるサラリーマンの割合は、３０年前はおよそ５割だったのに、現在では８割を超えている。これは、恐るべき数字といわねばならない。このように経済的基盤が会社に移行して、農家と自営業者が激減した日本社会から、「地域」や「家庭」といった概念が消え去ったのは、当然の帰結であった。しかも一般的に言って、会社は経済的基盤のみならず、評価の場でもある。

11)「欲望の前に”様式”が立ちはだかる」

西洋的なライフスタイルの伝統や伝承がないために、それをモノやマニュアルの力でカバーしようとするのがその原因。

12)「戦後の経済活動」

良いものを、安く、大量につくることが、企業、市民の双方にとって幸福だった時代は、確かに存在した。しかし、中産階級が膨張した時点で、それは方向転換を図るべきだったのである。

13)「伝統」

福田恆存は、明治維新で西洋の近代精神を学んだ日本の知識階級は、うかつにも「欧米イコール近代、日本イコール封建」という単純な観念にとらわれてしまった、と指摘している。新しい人間観、価値観、道徳観が一気に流れ込んできた明治維新の総括が済まないままに敗戦を迎えた知識階級は、その時点で再び同じ過ち ――すなわち「伝統」の否定―― を繰り返したわけである。

14)「ジャーナリズム」

どんなささいな出来事を伝えるにせよ、一度は人間の思考回路を通過する以上、バイアスがかかるのはジャーナリズムの宿命である。問題はそのバイアスが、大多数の受け手が肯定する方向だけに向かってしまうことである。しかも、そのほうが本質を見抜くよりも、はるかに楽なのだ。

15)「ホームコンサート」

なぜ、日本の家庭では「生の音楽を楽しむ」というライフスタイルが根付かなかったのか、という問題を考察するのが、わが研究会の主題である。そんなのは当たり前だ、といって片づけないでほしい。戦前の「山の手中産階級」には、今上天皇のご一家のように家族が楽器を分担して合奏を楽しんだり、ロシアから亡命した楽人がサロンで演奏する、といった光景が確かに存在した。戦後の民主化は、なぜこうしたライフスタイルまで根こそぎ否定したのか。そこに、“一億総中産階級”の弱点がある。

16)「クラシック」

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ピアノが大衆化したのは、ピアノが家具だったからであって、日本人がクラシック音楽を愛好したからではない。困ったことに、最近ではアマチュア・オーケストラも同じような傾向、つまり音楽愛好家の集団ではなく、楽器愛好家の集団に変わりつつある。だから、アマ・オケで演奏していながら、まったくコンサートへ行かない、という人は意外に多い。ましてや、家やサロンでコンサートを開こう、などといった発想はなかなか生まれない。

17)「西洋化」

西洋への劣等感を持つ一方で伝統を捨て去ってしまった結果、西洋的な生活を具現している人々は、怨差の対象となるわけである。

18)「大正時代」

昭和の時代が長くて、日本の歴史として考えるよりは、第一次世界大戦をはさんだ時期として、世界史の中で考える方が楽になりつつある。結局、この時代は西洋文化受容がやっとのことで、徐々に西洋的ハイライフがわかりかけてきたところだった。一方で次の戦争の予感があり、そのはざまで文化人が活躍した。

19)「鎌倉」

東京から1時間の距離にある、文化人や財界人が住んだ町。その昔、小林秀雄は酔って横須賀線で帰宅すると、かならず電車の連結部で放尿したという。いまではそんなお行儀の悪い人はいないが、果たして当時より民度があがったかどうかは不明である。

20)「鎌倉同人会」

大正3年、鎌倉に在住していた陸奥広吉（元ベルギー特命全権大使）、大島久満次（神奈川県知事）、勝美正成（医師）、黒田清輝等10名が発起人となって設立した、まちづくりの市民組織。同人会は松並木保護や史跡の保護など史跡保存活動、鎌倉駅改修や郵便局舎建設など公共施設整備推進、道路清掃や野犬狩り、街路等設置、公衆便所設置など、多彩な活動を推進したり、資金援助を行なった。

同人会は大正10年には社団法人となって活動をさらに拡大、大正12年の関東大震災に際しては寄附金を集めると共に、名古屋まで医薬品を買い付けに行き軍艦で持ち帰ったり、国宝級の文化財を散逸させないために鎌倉国宝館建設を進めるなど、目覚ましい活動をした。

21)「ボランティア」

最近になって急にはやりだした。これに巣くう学者や、官僚まで出てきている。日本でも宗教活動の中では昔から、極く日常の奉仕活動として行われてきた。

組織でもなく、制度でもない、ことさら良いことをすることでもない。社会との結び付きを維持しながら自主的に活動することである。

22)「大衆化」「大衆社会」

階級なき社会、誰でも参加でき、やりたいことが出来る社会。反面、誰もが大衆の一員としてしか認識されない。

個人が飲み込まれると思うか、疎外されたと思う社会。

「大衆車」、「大衆食堂」、「大衆小説」。未だに大衆社会を未来に導く政治手法は見い出されていない。大衆化された政治家や官僚は、哲学者や社会学者が鋭く指摘している問題点を読み下す能力すらない。もっとも学者そのものが、大衆社会以前の時代の遺物なのかも知れない。

23)「昭和」

昭和が終わると、この時代が物凄いスピードで飛去っていく。いまや、かすかに尾灯が見えるに過ぎない。戦前、戦後をかかえながらも、日本人が日本人であった時代。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

24）「田園調布」

多摩川に近い大田区の北西に位置する、都内有数の高級住宅地。職住を分離して田園の緑に包まれた住宅街を造出しようというイギリスの「田園都市構想」に触発された実業家・渋沢栄一が、大正半ばから開発を開始した。もともとは、山手線の内側にある池田山や島津山のような高級住宅地とは違い、あくまで一般サラリーマンを対象にした住宅地である。当初は「他の迷惑になるような建物は建てない、障壁は瀟洒なること、建築敷地は宅地の半分以下」などの内規があり、美しい町並みを保っていたが、１９７０年前後を境にして住民の交代、宅地の細分化が進み、いまでは単なる住みにくい町になりつつある。

25）「開発」

人口圧力によって人間が地球を食い尽くすのはいつか。

「地球の寿命あと○○○年」── おそらく３桁以内なのではないか。地球が自己保存本能で猛烈に反撃し始めているような気もするが、どちらにしても、人類の希望の開発は宇宙にしかない。

26）「志」

いま、日本人にもっとも欠けているもの。渋谷から東横線に乗って、田園調布の西口と日吉の西口を較べながら散歩するとよい。駅前から同じように放射状の道が延びながら、志の有無ではっきりと町の姿が変わってしまうのだ。

27）「エリート」

エリート社会を全く認めない大衆社会主義ならいざしらず、現実に権限を行使する政治家、官僚を認めている社会である。彼らは少なくとも形式的にはエリートである。エリートは他人に対して責任をとる人間を言う。本来、政治家、官僚等は他人に影響力を行使する機能、すなわち権限を持っている以上、責任をとるのは当然である。階級としてのエリートを非難するのは自由だが、政治家、官僚等の社会機構を認めている以上、エリートそのものの意味を否定すると、責任は総ての国民にかかってくる。

28）「新日本フィルの毛利さん」

当研究会にゲスト・スピーカーとしてお越しいただいた、新日本フィルハーモニー交響楽団のコントラバス奏者・毛利恭三さんは、自宅を開放してのコンサートを、数十回以上も行なっている。仲間の音楽家に声をかけて、「やりたい曲だけをやる」代わりに、「ギャラは払える範囲内でできる限り多く」。演奏会の日には普段使っている部屋を家族総出で片づけて、奥様の手料理を聴衆にふるまう、という幸福な例。

29）「民主主義」「自己責任」

いまは誰も思いださないらしいが、近代の「民主主義」は「封建主義」があってこそ存在する言葉で、元からあったものではなく、人々が勝ち取ったものである。

また、ギリシャ時代のデモクラシーは、アリストクラシーのベスト・マンによる政治によるリスクを避け、ベター・マンの集まりで政治をやっていこうとした。しかし、ギリシャ時代の「デモ」は「衆愚」ではなかった。責任を取る市民であった。

責任を取らない人々が集まって政治をすることを「民主主義」とは言わない。

30）「預金者」「投資家」

いずれも他人に自分の資産を委ねることに相違はない。基本的には相手を信用するかどうかは自分の責任である。但し、われわれが税金を払って雇っている官僚が「預金者保護」、「投資家保護」を口にする以上、自己責任の原則は官僚責任に移る。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

31）「税金」

源泉徴収されることに抵抗がない人は、民主主義国家に暮らすに価しない。申告納税が国民の権利である。国が国民に対して、ゆめゆめ「納税義務を果たせ」などと言うべきではない。納税は自分自身が自分たちの社会を守り、創っていくための神聖な義務である。

意図的な脱税などは国家反逆罪と言っていい。もちろん、官僚による税金の無駄使いも同罪である。

ちなみに、アメリカではこうした意識が国民のあいだに徹底している。

32）「権力」

いまの日本人は権力の意味を知らない。平和な社会であったための幸運で例外的な期間を生きてきたからである。これまで権力はせいぜい金権として行使される程度であった。これから不安定な時代を迎えるとしたら、権力の意味を知る叡知を持たないものに、権力を渡してはならない。権力の大きさは責任の重さに比例する。

33）「マスコミ」

現場の記者は皆若く、じっくり物を考える時間がない。しかし、新聞もテレビも、毎日ニュースを送り続けなければならないから、未消化な情報が氾濫する。加えて、“客観報道”なる旗印を掲げているが、果たして何に対して客観なのか。つまりそれは、絶対的な価値観や倫理観のない、相対的な客観主義なのである。その結果、報道の視点は常に揺れ動き、しばしば自家中毒を起こす。

34）「モラル」

社会に対する「感謝」と「責任」を基本とした行動規範のこと。ワイロを渡してつかまった人が、よく「会社のためにやったのに」とうそぶくが、これは、会社は社会ではない、という原則さえわかっていない幼稚な人間の言うことである。

35）「岩崎家」

三菱財閥の当主、初代・岩崎弥太郎、二代目の弟・弥之助は徐々に東京に地歩を築き、三代目・久弥の時に、湯島にコンドル設計の本邸を構えた。久弥の代には東京に三カ所、地方に六カ所の家屋敷を所有。しかし、その暮らしぶりは質素だったという。そのほか住宅地である駒込旧大和村の開発、東洋文庫の設立など、文化的・社会的に貢献する事業も行なっている。

36）「官僚」

ひとりの農林官僚の双肩に重い責任がのしかかっていた。日本人が飢え死にしないよう食糧を確保するには、どうすればよいか。全国の田圃や畑を調査するために、進駐軍の将校を連れて飲まず食わずで全国を歩き回り、ＧＨＱと呼ばれた総司令部に日参して輸送を頼む。家に帰ることなど考える暇もなかった。しかし日本の総ての人たちの願いの声が聞こえていた。いま、その声は遠い。

37）「皇室」

日本一強固で、日本一脆弱な家族。ちなみに、敗戦時に必死で守ろうとした「国体」とは、単に皇室の地位や生命だけではなく、日本の文化そのものを意味していた。

38）「貴族社会」

貴族のよって立つ基盤は「土地」である。土地を持つ人の数は限られ、世襲されるから、「家柄」という観念とオーバーラップするようになる。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

39）「建国」

通常、国というものは、民族が集合することによって造られる。だが、それを“理念”によって成し遂げようとした壮大な実験が、アメリカ合衆国とソビエト連邦であった。

40）「家柄」

「貴族社会」の項を参照。

41）「慈善」

チャリティ。これも自分の良心に対する義務。常に弱者に対する気持ちを忘れずに。

42）「国というものがある理想の上に成り立っている」

アメリカ合衆国は「契約による新しい国家形態を築こう」という市民有志の理念の上につくられた人工的な国家であり、１７７６年の独立宣言には啓蒙思想の影響が強く見られる。

43）「民主主義」

単にす総ての市民が参加するというだけでなく、各個人の自由意思と自由競争を保証することを重視する考え方。

44）「マイノリティー」

本当は総ての人が、自分の名前を持ったマイノリティーなのだが、その壮烈な孤独に耐えられず、マジョリティーへマジョリティーへと向かっていく。

45）「戦後の占領軍による民主化」「封建的な権力の破壊」

日本を戦争に駆り立てたものが、封建主義的社会体制だというアメリカの人類学者等の研究に基づいて、進駐してきたアメリカ軍は、天皇制を除く身分制度をはじめ、戦前からの社会制度の多くを解体した。そして教育制度を中心に、アメリカの一般レベルで行なわれている社会制度の普及につとめた。この民主化が完全に定着するまで占領が続けば、これほどの経済大国にならないかわりに、ある種の理想社会が出現したかも知れない。

ただし、戦時体制で強大な権力を手にした官僚制に対して、占領軍はさほど問題意識をもっていなかったらしい。いまにして思えば、これは片手落ちであった。

46）「日本の特殊性」

あるようでないもの。日本の特殊性という言葉は、都合の悪いときの口実に使われている。どうせ、極東の島国であらゆる国々の影響に晒され、その時々で強い国の顔色を伺わざるを得なかったお陰で、なんとか国を保ってきたカメレオン国家なのだから、国の特殊性にこだわらず、日本人一人ひとりが個々に特殊性を持つ、したたかな国でありたいものだ。

47）「朝比奈隆氏」

１９０８年生まれ、世界最高齢の現役指揮者。旧制東京高等学校から京都帝国大学に進み、サラリーマン生活を送ったのちに音楽の世界へ入るという、日本の音楽家としてはきわめて特異な経歴の持ち主。終戦後、大阪フィルハーモニー交響楽団を結成し、以来四十数年にわたり音楽監督の地位にあるが、そうした彼の活動を支えてきたのは、旧制高校、京大時代の友人たちであった。そして、氏の壮大な演奏の根底にあるのは、人間に対する信頼感と、よき時代の教養主義である。ドイツ人よりもドイツ的な演奏を聞くと、音楽の本質を見抜く力は、幅広い教養と人間性に依るところが大きいことを、痛感させられる。

48）「大阪のＮＨＫ付の兵隊」

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

占領当時、ＮＨＫの各放送局にはＧＨＱから情報将校が配属されていた。

49）「意思決定システム」

ヒラの社員が課長を飛ばして部長のところに決済を仰ぎにいった。これは「バイパス」といって、厳に戒めるべきことなのである。

50）「地方分権」

日本中が賛成しているようだが、もし地方の首長が愚か者であれば、現在の中央集権では考えられないほど住民が苦しむことになる。水戸黄門でも来て悪代官を懲らしめてくれるというのだろうか。それともウイリアム・テルが立ち上がるというのだろうか。

51）「近代世界すなわちアメリカ」

世界を旅すると、マクドナルドとホリディ・インがあるかどうかが、近代的な都市文化圏と僻地の境界線であることが実感できる。

52）「イタリア」

当研究会の責任者（我々は座長と呼ぶ）である岩渕潤子氏の著書『イタリアを丸焼き！』は、イタリアを賞賛する書籍が多いなかで、イタリアの前近代性を徹底的に暴露した快著（怪著？）として、高い評価を受けている。

53）「イギリス」

イギリスもアメリカも「民主主義」の国である。だが、イギリスのそれは、「封建社会」の上に成り立っている。それに嫌気がさして、“家出”した人々でつくった国がアメリカである。日本は封建主義が存在した国なのだから、アメリカだけを見て民主主義を理解しようとすると、とんでもない間違いをおかすことになる。

54）「大学進学率」

日本の大学進学率はおよそ４０％。昭和３０年には１０％だったが、サービスや品質の向上をおろそかにしてもこれだけ成長できた産業は、ほかにあるまい。

55）「奨学金」

世界でもっとも影響力の大きな奨学金は、「ローズ・スカラーシップ」である。１９０３年に、大英帝国の富豪セシル・ローズの遺産によって創設されたこの奨学金は、世界１８カ国に住む１９歳から２５歳の青年にオックスフォード大学で学ばせようというもので、奨学金を受けた者同士のつながりはきわめて強い。アメリカ出身の元ローズ・スカラーズで構成されている「エクスクルーシブ・クラブ」は、エリート中のエリートが集まるアメリカ上流社会の縮図、といわれる。

56）「ピアノ」

日本最古のピアノは、1828年にシーボルトが山口県萩市の熊谷家に贈ったピアノといわれている。日本におけるピアノの歴史が上流家庭からはじまったというのは、興味深い事実である。

57）「大量消費」

モノがあると豊かに感じるというのは何故であろう。諸国放浪で草を褥に、星空を屋根にいただいている方が贅沢なのではないか。大量消費によって人々は慢性の貧困に陥っているのに、そのことがわからず、他人と同じものを買わなければならない、という強迫観念にさいなまれる。大衆消費社会の悲劇は終わらない。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

58）「個体差」「差別化」

「差別」と裏腹に「特長」がある。差別がなくなると特長もなくなる。日本では、あるグループが差別されているという。しかし、日本人も世界中で差別されている。相対的なものと絶対的なものがある。人間が猿から進化してきたとするならば、猿を加えて差別を徹底的に相対化すべきであろうか。

はり人間は集団ではなく個人で考えるべきであろう。「個体差」、つまり総ての人は違っていることの認識こそ、猿から人間を差別出来るのではないだろうか。

59）「技術偏重」

子どもが親、特に母親の愛玩動物化した頃より、お稽古事としてピアノかヴァイオリンを習うようになった。子ども、親、先生あるいは音楽教室の三者には、「技術」以外共通の評価基準がない。もっとも「技術偏重」だろうが、大量に生徒が育てば、なかには音楽性豊かな子どもも出ることは出るのだが。

60）「階層」

社会階層が奇妙なくらい存在しない日本では、人間関係がある意味では淡泊、ある意味では味わいがなくなっている。人と話す場合の共通の話題は、極めて大衆的なもの、マスコミで話題になっていることに限られる。教養の基盤が同じ人と出逢うことは、まず至難の技である。人類にとって、少なくとも文化的な観点から言えば、階層なき社会は豊かな社会にはなりそうもない。

61）「旧制高校」

別掲松岡論文参照。

62）「教養」

大学の「教養過程軽視、専門科目重視」が、高齢化社会問題を増幅した原因のひとつである。定年退職した大卒者が教養豊かな人間であれば、自分がやりたいことを幅広く選択することが可能である。教養がない専門馬鹿は、色褪せた専門技術を引きずってなにもすることがない。教養の意味は、教養科目になっている個々のテーマが重要であるのではなく、人間が営々と築いてきた文化を継承することに意味があるのである。人間は部品ではなく総体である。文化は総体としての人間の活動を表わしているのである。教養を身に付けることを疎かにすると、人間は限りなく貧しくなる。

63）「生産効率」

生産活動の推進こそ社会の価値として教え込むと、よそ見をすることなく生産に励む人間が大量につくられる。これを有能な人材として評価して働かせると、とてつもなく生産効率があがる。これが、現在までの日本を支えてきた。これまでのことを悪く言うことは出来ないが、たとえ「効率」の面からだけでも、「消費効率」「利用効率」など多岐にわたる重層的な経済を構築しなければならない。

64）「窓際族」

企業にとって必要ないと判断された人たちのこと。プライドの高い人や、会社以外に基盤のない人にとっては辛いものだが、最近の若者の多くは”理想的なライフスタイル”と考えている。

65）「経営者」

最近は、一般の人からも尊敬されるような経営者は皆無である。企業のなかのことだけで精いっぱいで、社会全体を考える余裕がなくなったからだろうか。いや、それよりも、経営者としての「責任」を自覚しないまま、社内の秩序にしたがって出世してきた人が大半だからではな

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

いか。こういう人たちは、困ったことに、社会に対する関心そのものがないのである。

66）「社会主義」

社会主義にとって幸福だったのは、マスメディアがまだ発達していない時期にプロパガンダが可能だったことである。そして数十年後、人々が共有するようになった情報がベルリンの壁を破ったが、我が国においては、情報そのものに社会主義のバイアスがかかる時代がいまだに続いている。

67）「戦後５０年」

ここまでは、臭いモノにフタをして、思考を停止したまま、なんとか乗り越えることができた。だが、考える力を失った代償派あまりに大きい。次の節目は「２１世紀」だが、そこまでに考える力を回復させておかないと、とんでもないことになるような気がする。

68）「義務教育」

６・３制の幼い９年間が何を意味するのか。基礎的なことを叩き込まれ、読めるようになり、書けるようになる。友情、初恋などあらゆる喜びと悲しみの試練を受ける時期でもある。

美しい社会科の先生は、１年間かかってパール・バックの『大地』を読んでくれた。ハンサムな理科の先生はテナー・サックスを吹いて聴かせてくれた。数十年経って意味をもってくるのは、このような授業でもある。

69）「日教組」

教師の生きがいを子どもの輝く瞳から、お金の輝きに変えた。教師を“天職”から“サラリーマン”の仕事に変えた。

70）「平等主義」

平等は入り口であって出口ではない。

71）「国民的資質」

本当は「日本人とは」「アメリカ人とは」と言えるものはない。どちらの国民にもよい資質をもった人もいれば、悪いのもいる。ただ、怨嗟の気持を押さえられず、他人の足を引っぱる習性がついた日本人が多くなった。これでは日本人が固有にもっている資質ではないかと思いたくもなる。平等が当たり前と教育されたせいであろう。日本の社会に対する適応性がない人は海外に行く。足を引っ張られた日本人も、アメリカでは元気になる。

72）「社交界」

前掲。

73）「ファンド・レイジング」

ある目的のためにお金を集めることをいう。大統領立候補のための選挙費用を集めるパーティから、障害者のための車椅子を買う費用を作るためのチャリティ・コンサートなど、さまざまなものがある。日本のお金集めは、集めるほうも、集められるほうもスマートさに欠け、後味が悪いものが多い。

74）「趣味人」

いまの時代は、教養を深める機会が滅多にない。だが、子どもの頃に始めた切手集めや鉄道趣味が、社会に対するさまざまな関心を生み、結果として教養の幅となっていくことが往々にしてある。

75）「個の確立」

別掲水野論文参照。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

76）「滅びゆく日本」

過去の歴史をひもとくと、一国がその絶頂を維持できるのは、たかだか２０年のことだという。ローマ帝国しかり、大英帝国しかり、そしてソビエト連邦しかり。その観点で日本を見ると、高度成長期がまさに日本の絶頂だったことがわかる。バブル崩壊後の不況は、決して一時的なものではない。まして、それを経済的な観点のみから見ようとするのは、大きな誤りである。

77）「玉村豊男」

エッセイスト。日本リゾートオフィス・クラブ会長。ライフスタイルについて、長野での自らの実践を書いている。最近は自分の畑の野菜、花等を描いて画家としても活躍している。

78）「啓蒙活動」

英語のenlightenment が文字通りと言える。或いはinformativeも近いニュアンスをもっているが、大衆社会では本 来お互いに啓蒙的になるべきなのにもかかわらず、誰もがこの責任を果たしていないように思える。そのために、民度が下がり、社会の質が低下している。

79）「感性」

単に「感性」というより「感受性」と言っておいたほうがいい。他人の心情を思いやる能力である。

80）「家庭画報」「クラッシイ」

「家庭画報」（世界文化社）は、家庭の主婦向けに料理、旅行、ファッションなど、日常生活の充実を提案した記事を展開。「クラッシイ」（光文社）はファッションを主眼とした、20代の女性を対象にした女性誌。どちらも海外ブランド、一流レストランなどが満載され、日本にはない仮想の社交界を想定しているような雰囲気が誌面から漂ってくる。

81）「週刊現代」「アサヒ芸能」

「週刊現代」は講談社発行、部数70万部。昨年からヘアヌードで部数を延ばし「週刊ポスト」と週刊誌売り上げトップを争う。「アサヒ芸能」は徳間書店発行、部数40万部。風俗関係の記事に定評があり、極道筋の読者も多い。一般的なサラリーマンが電車のなかで読んでいて、良識を疑われない限界が「週刊現代」、疑われてしまうのが「アサヒ芸能」といったところか。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ホームコンサート活動報告

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

９４年度　ホームコンサート活動報告

これは、９４年度に『山の手文化／ホームコンサート』研究会がケーススタディとして行った三回のホームコンサートについて、それぞれ企画段階から事後のアンケートまでを、まとめたものである。そしてまずは企画の第一段階であった会場探しについて、活動記録をもとに記載する。

◆会場探し◆　研究会としては、今後コンサートを定期的に開催できるよう、まずは、できるだけ多くの会場を候補会場として確保しておく必要があり、今年度前半の活動としては会場探しが中心となった。コンサート会場としての条件はできるだけ限定せず、機会があるごとに幅広く見てまわった。

２月８日／「湘南楽友会」という会が、大磯を中心に地域の人々と共に、さまざまな形のコンサートを自主的な活動として行っている、という話があった。そこで湘南楽友会の理事である森氏に会って話を聞く。当研究会の活動主旨を説明し、二度に渡って大磯町周辺を案内してもらった。その際、大磯にあった元三井家の別荘であった建物（現在さくら銀行所管）がコンサートの会場候補としてあがる。しかしこの建物については、現在のところ使用許可が下りず、コンサートの開催は不可能であった。

２月２３日／逗子にある明治期の西洋建築の家が、現在売りに出されており、この家主の方から買い手がつくまでなら、コンサート会場として使ってもらっても良いという話があった。メンバー数人で現地まで視察に行き、建物内を見せていただいた結果、一階部分でコンサートを行うとすれば、柱などをはさみながらも約二十名前後のホームコンサートが可能と思われた。但し、ピアノなどの大きな楽器を運び入れるのが少々困難であり、それ以外の楽器のプログラムを考える必要がある。また二階はすべて和室であり、この部分をコンサート会場として使用するならば、音響、雰囲気を考慮したプログラムで一風変わったホームコンサートが行えるのではないかと思われた。

３月１０日／研究員の紹介により吉武由子氏というソプラノ歌手の方が、これまでにも自宅で定期的にホームコンサートを行っているという話があった。研究会として、その実情についてのヒアリング調査を兼ねた、会場視察に行く。
コンサート会場として使用しているＴ字型の細長いフローリングの室内には、グランドピアノが一台。その奥に台所があり、そこから飲み物、軽食等のサービスが可能。これまで吉武氏が行っているホームコンサートには、ご家族の知り合いの方などを中心に約四十名程が集まり、以降継続して参加される方が多いとのこと。プログラムは日本の曲を中心に、正味40分程度で終了。コンサートの後は通常、立食形式でお茶と軽食をとりながら歓談という構成で行っている。話が進むうちに、今後研究会がホー

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ムコンサートを行う際、この吉武邸も会場として使用させてもらうことになった。

３月１９日／今後行う一般住宅街でのコンサートの際、近隣へは一体どれくらいの騒音、迷惑がかかるのかということをチェックするため、ミニコンサートを企画。研究会の代表者である岩渕氏の千葉県にある別荘において、アップライトピアノ、ヴァイオリン、ファゴットでコンサートを行う。ここでは、隣との距離が４、５ｍ程あり、ピアノの激しい音以外はほとんど影響がないと思われた。この日の朝、隣の方へは一応ことわりの挨拶をしておき、その際、よろしければ聴きにきて下さいと声をかけておいたところ、他の近所の方々と一緒に来て下さった。これらのことからも、一般住宅街でホームコンサートを行う場合は、近所の方もできるだけお誘いし、一緒に参加してもらえるのが一番望ましいだろうと思われた。

４月１３日／葉山にある旧東伏見宮別邸が、明治期に建てられた西洋建築として著名なものであり、現在イエズス孝女会修道院の研究施設として、一般に開放されているということから、第一回目の再現コンサートの会場候補として急浮上。（吉武由子＆トリオ・ソリスト・ウラジオストック concert 開催目的参照）
まず修道院の方へ事前に連絡を取り、研究会のメンバー四名で視察に行った。現在この建物の管理者である、イエズス孝女会のシスターに建物内を案内してもらう。一階にはグランドピアノを常備した広間があり、その隣に暖炉やソファー、椅子、テーブル等の調度品を置いた居間。この二つの部屋の奥には大きな台所があった。二階にはベッドを備えた洋室、そして和室が二部屋あり、これらは広いテラスのような廊下で繋がっている。この二階を演奏者のための楽屋として使うことができれば、コンサート会場として申し分のない構造。ここでコンサートを行う場合には会場費とピアノの使用料が必要となるが、基本的に後は自由。但し場所柄、すべてを午後８時までには終了させてほしいというのが唯一の条件であった。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

Home Concert vol.1／94.7.3／葉山　旧東伏見宮別邸
吉武由子＆トリオ・ソリスツ・ウラジオストク　Concert

企画段階

◆開催目的◆　山の手文化研究会では、今後ホームコンサートのあり方を模索する前に、これまで日本で行われてきたホームコンサートについて検証しておく必要があると考えた。日本が文明開化により、近代国家として生まれ変わったとされる明治から現在に至るまで、日本ではどのような形のホームコンサートが行われてきたのか。それは、当時のライフスタイルにどう組み込まれてきていたのか。どのような場所で、どのような演奏が行われていたのか。そしてそこで繰り広げられたであろう人々の交流について。これらを端的にでも踏まえた上で、研究会として行ってゆくホームコンサートのあり方を考えようということになった。

そこでまず、これまで日本で行われてきたホームコンサート（ｻﾛﾝｺﾝｻｰﾄ等を含む）について、会場となった場所その建築様式、演奏形式、演奏者などについて８パターンに類別。（【表１】参照）

この中から、まず戦前の日本におけるホームコンサートの象徴的なものの一例として“別荘で行われたホームコンサート〔Ａ－②〕”を取り上げ、当時を再現するようなコンサートを企画することにした。

【旧東伏見宮別邸　外観】

◆会場◆　第一回目の会場としては、そのコンサートの形態により、できれば東京近郊にある西洋建築で、約百名前後は収容可能な場所を対象として、会場探しを行った。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

【表１：日本に於けるコンサートの系譜】

	年　代	会　場	建築様式	演奏形式	演奏者
A－①	明治～戦前	自宅	西洋館	室内楽	家族・友人・プロ
	ライフスタイル	特定の階級が「西洋文化」を完全輸入の一環としてライフスタイルに組み込む。日常の生活にこうした文化は不可欠であった。			
A－②	明治～戦前	別荘	木造西洋別荘＋和風庵	室内楽	家族・友人・招待客・プロ
	ライフスタイル	特定の階級のライフスタイルであった避暑、避寒、長期滞在の中で必要不可欠なアクセントとして日常化			
B	明治～戦前	日比谷公会堂		全ジャンル	内外の一流プロ
C	戦後～昭和60年	自宅	2DK, 2LDK 3DK, 3LDK	ピアノ単独 ヴァイオリン単独	子供
D—①	戦後～現在	自宅	全様式	全ジャンル	オーディオ
D－②	戦後～現在	ホール	多目的 ホール・音楽ホール	全ジャンル	プロ
E－①	平成～現在	自宅	3DK, 3LDK	室内楽	家族・友人
	ライフスタイル	稽古事から脱皮した人達が自分達で楽しむ。こうした人達にとって日常のライフスタイルに組み込まれる			
E－②	平成～将来	自宅	新様式 インテリア重視	室内楽、他 新形式	家族・友人 ＋プロ
	ライフスタイル	ようやく生活と文化が不可欠となり、日常のライフスタイルの一環としてホームコンサートが定着する			

◆開催日時／演奏者／プログラム内容◆　会場探しを行っていた際、研究員より紹介のあったソプラノ歌手の吉武由子氏が、６月２６日～７月７日の間、ロシアより来日されるトリオ・ソリスツ・ウラジオストクの方々とコンサートを行う予定になっていたことから、このトリオの来日期間中、一回のコンサートをハイライフ研究所の主催で行えないだろうかという話が持ち上がった。そこで研究会としては、“再現コンサート”での演奏を吉武由子とトリオ・ソリスツ・ウラジオストクの共演という形で依頼するにした。
開催日時についてはトリオ・ソリスツ・ウラジオストクの来日期間中で、その時まだコンサート予定のなかった７月３日（日）を第一候補日として、会場となる旧東伏見宮別邸の管理者のイエズス孝女会の方へ希望日を伝え、了解を得る。

演奏曲目については、演奏者に研究会としての主旨を理解してもらった上、演奏者同士の話合いで決めてもらった。また今回のプログラムとしては、ただ単に“コンサートを開く”ということだけではなく、前述の通り“西洋館の別荘とホームコンサート”という研究活動の一環としての要素を持たせるため、以下のような内容のレクチャー時間を設け、構成することにした。

① この旧東伏見宮別邸および西洋館について
② ロシア音楽と当時の日本の上流社会との関係
③ この東伏見宮別邸での生活

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

その後、それぞれのレクチャー担当者について検討した結果、①については研究員の一人である水野統夫氏、②については岩野裕一氏がそれぞれ担当することになった。③については適当な人が見つからなかったため、今回は取り止めることにした。

◆聴衆◆　サロンコンサートの再現という主旨から今回は全員を招待とし、原則的には夫婦単位で来ていただくことにする。人選については、会場の葉山周辺の有識者を中心に、今後研究会が行うホームコンサートに対し協力が得られそうな人、研究会の活動をより広く告知してもらえそうな人、を対象に研究員の推挙によってリストを作成。招待枠には演奏者本人からの招待、およびハイライフ研究所関係者のための枠を四、五名分ずつを確保しておく。このリストをもとに検討を重ね、さらなる人数調整を行った。

準備段階

調律師に依頼。調律は当日リハーサル前に行うことになるため、会場までの地図と当日のスケジュールについて連絡。演奏者である吉武由子氏へは当初、水野氏を通して連絡をとっていたが、途中からは事務局から直接連絡をするようにし、プログラム掲載用のプロフィール、写真等を送ってもらう。トリオ・ソリスツ・ウラジオストクについては、今回の来日がＪＬＭを窓口にした招聘であることから、スケジュール、謝礼等についても、すべてこのＪＬＭの事務局の方へ連絡、交渉をした。また当日ロシア語の通訳の人を一人依頼しておいた。

◆招待状・プログラム作成◆　今回はサロンコンサートの再現という主旨から、招待状やプログラムは一通り以下のように作成した。（＊資料参照）

【ａ．招待状】（案内文、時間場所、出演者、プログラム、会場プロフィール、地図）

ホームコンサート研究会からの簡単な招待文、開催日時、時間、場所、出演者、プログラム、そして会場プロフィールと地図を刷り込んだ、二ツ折りのカード形式のものを印刷業者に発注し作成。

【ｂ．返信用はがき】（出欠確認、同伴者氏名、駐車場の要不要）

招待状とともに送付するものとして作成。出欠、同伴者氏名、当日車で来場する人の数を確認するための欄を設けた。

【ｃ．当日用プログラム】（スケジュール、プログラム、演奏者プロフィール、曲目解説、座長挨拶文、ハイライフ研究所概要）

当日二つのレクチャーで始まるコンサート全体のプログラム、スケジュール、演奏者のプロフィールと当日演奏予定の曲目解説。またコンサート当日、渡英中のために参加でき

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ない岩渕氏の研究会代表としての挨拶文、そして最後にハイライフ研究所の概要を掲載した。

【d．参照資料】（1.旧東伏見宮別邸の建築　2.白系ロシア人と東アジアのオーケストラ）

レクチャー用に2種類を作成。一つは、「旧東伏見宮別邸（現イエズス孝女会修道院研究施設）の建築」で、水野氏の建物に関するレクチャー時に参照してもらうためのもの。館内を見学する際、参考になるようにと建物の平面図も掲載。もう一つは「白系ロシア人と東アジアのオーケストラ」という岩野氏のレクチャーに関するレジメ。

◆案内方法◆　招待客へは、それぞれ推薦した研究員が個々に担当者として、まず事前に連絡をしておき、改めて招待状を送り、返信用のハガキにて出欠を確認するという方法をとった。

◆会場準備◆　まず当日使用可能な場所を、楽屋、控室、受付、荷物置場などと割り振り、それぞれ設備、備品を確認しておく。水屋に於いては特に細かく備品について確認をしておき、足りない物については事務局の方で手配。また、今回は会場にクーラーがなく、代わりに扇風機を使用することになったため、使用可能なコンセントの数や位置を確認し、延長コードの準備をした。楽屋については演奏者の着替えのために鏡の有無、ハンガーといった備品を確認。会場内については、イスの数、照明の位置、譜面台の確認、飾花を置く場所について。また今回の会場は建物内は土足禁止であったため、スリッパの数や下足置場についても調べておいた。

《準備・手配したもの》

スタッフ・演奏者の昼食／スタッフの名札／受付用招待客リスト／
譜面台／台所用品／おしぼり／延長コード／虫よけ用ノーマット／
文具類／飲物／菓子／飾花／花束／

◆飲物・菓子・花◆　今回はティータイムにおける人々の交流を重視し、時間を３０分間予定。その際には紅茶とクッキーなどの焼菓子を数種類、用意することにした。しかし、今回は招待客が大勢であるということと、会場が東京から離れており、また会場近くに評判の良い菓子屋があったことから、菓子についてはその近くの店に前もって注文しておいたものを当日使用することにした。紅茶に関しては、会場に大きな水屋があることと、会場に備付けであった五十組近くのティーカップが使用可能であったことから、ティータイム直前に入れて出せるよう準備をする。花についても菓子同様、会場周辺の店に注文をしておき、当日運び入れてもらうことにした。コンサート会場に飾るメインの花については、大きな花瓶持ってきて飾りつけてもらい、終了後に花瓶だけを引き取りに来てもらうよう手配した。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

《飲物・菓子》
紅茶（Hotで予定→急遽Iceに変更）
焼菓子　8種類

《花》
会場用　盛花（大1　小3）
演奏者への花束　4

◆当日スケジュール・役割分担◆　まず当日の大まかなスケジュールを作成。役割分担やタイムスケジュールについてはミーティング時に検討後、合わせて記載し、事前にスタッフや関係者に配布した。

◆カメラ・ビデオ◆　記録用のビデオ、カメラをそれぞれ一名ずつ専任の人に依頼する。演奏中フラッシュおよび撮影音が邪魔をしないよう、写真撮影に関してはティータイムを中心に一日を通したスナップ写真を撮影してもらい、ビデオについては、レクチャー、演奏時を中心に依頼した。

《 7/3　演奏会当日スケジュール＆係分担　》

	コンサート会場	スタッフ
11:50		スタッフ会場入り
12:00	ピアノ調律	・会場セッティング（椅子並べほか） ・２Ｆ掃除　楽屋準備
13:00	演奏者会場入り	・受付準備 ・花、菓子搬入
13:30	リハーサル	・茶菓接待の準備（ティーセット等）
14:00	↓	
15:00	↓	
	（再度ピアノ調律）	
15:45	開　場	・会場外誘導（人・車） ・受付（当日プログラム、レクチャー資料配布）
16:00	館内見学 〔担当：水野氏〕	
16:30	レクチャー 〔担当：岩野氏〕 演奏準備	
16:50	コンサート 1.　ハイドン 2.　入野 3.　アレンスキー	・茶菓準備
18:10	ティータイム	
18:30	コンサート 4.　ショスタコーヴィチ （アンコール）	・片付け
19:00	演奏終了	・車手配 ・会場片付け
19:45	後片付け終了、会場退出	

［係分担］
接遇：松岡、伊藤
受付：米村、鈴木
誘導：岩野、水野

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◆開場前準備◆　会場到着後、まずシスターから建物の鍵を借りて会場内の扉、窓をすべて開けてまわる。室内は、しばらく使用していなかったためか湿度が異常なほど高く、ピアノの調律に予想以上の時間がかかった。スタッフはまず、会場に置かれていた備品で今回使用しないものをすべて一室に移動させ、まとめて置いておく。それから会場に椅子を並べて会場作り。演奏者が会場へ到着し、スタッフと一緒に昼食をとった。
当初ティータイムには熱い紅茶とクッキーなどの焼菓子を出す予定であったが、この日は朝から気温が急激に上がり、また会場にはクーラーの設備がなかったため、急遽予定を変更し、飲物にはアイスティーやジュースなどの冷たい物を出すことにした。そのため使用する予定だったティーセットの代わりに紙コップや氷などを買いに行き準備。
またリハーサルの途中、この日の猛暑のためかピアノ奏者の人が頭痛を訴え、急遽薬を買いに行くというハプニングもあった。

◆開場◆　開場時間20分前位から招待客が来場し始めたため、受付を開始。準備しておいた招待客リストをチェックしながら、当日プログラムやレクチャー資料を配布。ほぼ招待客が揃ったころ時間どおりに、最初のプログラムであった水野氏の案内による建物内見学が行われた。今回の招待客の中にいた数名の地元の人からは、これまでにも旧東伏見宮別邸には何度か来ているが、このような話が聞けたのは今回が初めて、という感想も聞かれた。

【水野氏ﾚｸﾁｬｰ　・館内見学】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

建物内を一階、二階と見て回った後、一階のコンサート会場に戻り、ここで座長代理の鈴木氏が挨拶。そして岩野氏による「白系ロシア人と東アジアのオーケストラ」に関するレクチャーが約２０分行われた。この間演奏者の方々には二階楽屋にて待機してもらい、時間がきて用意が整ったところで開演。

【岩野氏ﾚｸﾁｬｰ 】

コンサート前半のトリオ・ソリスツ・ウラジオストクの演奏が行われている間に、スタッフ数名は隣の部屋でティータイムの準備を進めた。休憩時間については、企画当初からこの時間における人と人との交流がホームコンサートならではの大切な要素となると考えていたため、スタッフはそれぞれ招待客を多くの人に紹介できるよう、できるだけホスト、ホステス役となるよう努めた。また、このティータイムには演奏者四名にも加わってもらい、招待客と演奏者が交流できるというホームコンサートならではの時間とした。

【ﾄﾘｵ・ｿﾘｽﾂ・ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ演奏】

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

【飲物・菓子準備】

【ティータイム①】

【ティータイム①】

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

後半のコンサートが始まる前には、今回トリオ・ソリスツ・ウラジオストクを日本に招聘したＪＬＭの入野禮子氏、そして現在旧東伏見宮別邸の管理者であるイスズス会のシスター・ルチア氏にそれぞれ一言ずつお話いただいた。後半の演奏には吉武由子氏が加わりショスタコーヴィチの声楽曲、そしてアンコールと続き、コンサートは終了。招待客の人々が会場を出たあと、会場をすべてもとに戻し、建物内の清掃、戸締りをして鍵を返却。

【吉武由子＆トリオ・ソリスツ・ウラジオストク演奏】

事　後

◆反省点◆

・企画として意義のあるものであり“西洋館におけるサロンコンサートの再現”という主旨が参加者によく理解してもらえたという点では大成功であったと思うが、招待客の人選も考えれば、当日のスケジュールに組み込むことは無理でも、当研究会がなぜ、なんのために、この企画をし結果どのようなことを得、どのような活動を続けているのかという研究会そのもののアピールもできるとよかったと思う。

・実際の演奏以外にも、レクチャー・見学等、盛りだくさんの内容だったので、コンサートの部分を内容、時間共、もう少し軽くしてもよかったと思う。

・簡単な薬などを備えた救急箱を準備しておくべきであった。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◆アンケート◆　招待客の方々に当日のスナップ写真とアンケート用紙を送付し、返信用の封筒で返送してもらった。

《質問内容》

♯：今回のコンサート（企画）はいかがでしたでしょうか。全体の印象・構成・内容に関して、ご意見をお聞かせ下さい。

♭：次回に向けて何かアドバイスがございましたらお聞かせ下さい。

［T．K］

♯／山の手文化の研究というコンセプトによる企画として、水野統夫氏の建築文化史的な話は面白かったと思います。また、岩野裕一氏の白系ロシア人と東アジアのオーケストラの話も旧東伏見宮別邸の時代的な背景を彷彿させることになって面白いでした。時代的な雰囲気を現出させることを考えるならばコンサートの曲目も、当時のサロン風なものにし、解説も明治・大正音楽文化史の趣でやるのも一案だったと思います。当日のプログラムは通常のコンサートのもので、サロンコンサートとしては少し重かったようです。

♭／コンサートは小一時間ほどにして、食文化と称して山の手料理の研究会／立食パーティ、美術、文学などの研究会（話のうまい教授、評論家を囲んで）などもよいと思います。

［T．S］

♯／旧東伏見宮別邸での、ミニ・コンサートには前にも数回聞きに行ったことがあり雰囲気としては大変良いと感じています。
今回の曲目の構成は建物の成立や、日露の音楽的な関係にまで及ぶ大変知的なストーリー立てがあって興味深く聴きました。

♭／企画そのものには大変楽しませて頂いたのですが、ハイライフ、現代の、あるいは将来のライフスタイルにとってのハイライフの意味、位置づけ、内容、「山の手」と銘うった研究会とハイライフの関係、クラシック音楽のホームコンサートというスタイルとハイライフの関係など今一つピンときません。そこを実験をしながら模索する試みではないかとは思うのですが、やはり論理的な枠組みも示して頂けると有難いのです。

［T．K］

♯／私は葉山に住んで居りますので、近くであのような素晴らしい音楽を聞かせていただく事が出来、感激いたしました。ピアノ、チェロ、バイオリン、歌と舞台の高い所から流れる音と全く音色が違うのにびっくりいたしました。“響き”大変素晴らしかったです。お茶会も優雅な感じで大変良かったと思います。演奏者とお話することが出来ましたら、もっと楽しかったでしょう。次回を期待して居ります。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

［E．S］

♯／いつも呼び屋によって企画されている日本の商品化された音楽会には、あきあきしていましたところ、久しぶりに遠い昔、幼時がしのばれるような心のこもった家庭的なコンサートに接し、うれしさで一杯です。クーラーのなかった頃の夏の暑さまで思いだされ、しみじみとしたなつかしさと安らぎでみち足りました。またウラジオストックのメンバーの演奏はすばらしく目がさめるようでした。普通の会場では聞けない親しさとやさしさがありました。殊にアレンスキーのピアノ三重奏は、私ははじめて聞きましたが、古きよきロシア宮廷や貴族たちの雰囲気があふれていて、夢幻の思いに浸りました。

♭／トリオ・ソリスツ・ウラジオストクの演奏は今後も何回も聞きたいです。今回は夏でしたが、秋にもまた冬にもやってください。殊に冬、外は雪が降っているとき、暖炉に薪を燃やしながら、またアレンスキーが聞きたいです。場所はまた旧東伏見宮別邸でもいいし、ほかに古くてよい建物があればそこで。一般的なコンサート会場はごめんです。

ハイライフ研究所については初めて知りましたが、すばらしいですね。ほかにどのようなことをされているのですか。今後の御発展を心から祈っています。

［H．H］

♯／今回の日本の西洋音楽のルーツ紹介は大変興味深いものでした。帝政ロシアの極東進出に日本がどう対応したのかについてはいろいろ本を読んでおりましたが、音楽が両国を結びつけたことについては知りませんでした。地元ですので、旧東伏見宮別邸でのサロンコンサートは経験ずみですが、今回も良かったですよ。

♭／取りあげたテーマについての著作が有れば紹介して貰いたい。（事前に調べておくのは結構大変とは思いますが）

最初に音楽を楽しみ、後半は例えばワインでおしゃべり、というのも良いのではないでしょうか。

［K．K］

♯／過日は初めてお招きにあずかりありがとうございました。まるで優雅なロシアの貴族になった様な気分で夏の一夕を過ごしました。演奏者の方々にはお気の毒だったけれど、暑さは気になりませんでした。

６０年以上前の庶民の別荘族だった者としては、貴族の別荘を拝見するチャンスを与えて下さったことに感謝申し上げます。

［E．T］

♯／先日は素敵なコンサートに招いて頂きありがとうございました。久しぶりのお休みを海のそばでゆっくりと異空間で過ごさせて頂きました。室内楽の音はなんとも気持ち良く、うとうとと扇風機のなつかしい風もうれしく、贅沢な時間

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

を持つことができました。Ice tea もとてもおいしく、スタッフの方がみなさん誠実そうで、アットホームでありながら、こちらは勝手にしていていいような自由な空間で、本当に伺って良かった！と友達と帰り道、盛りあがりました。

♭／私は専門的なことは、よくわかりません。でも気持ちのいいもの、音や空気や感触は命の洗濯として大切にしています。大きな会場のコンサートはそれなりのパワーがありますが、空気を直に感じられるホームコンサートはからだにダイレクトで、ヒーリング効果大！とよくわかりました。バイオリンはいい。クラシックもっと聞いてみようと、いろいろ発見があったのも嬉しかったです。あまり触れる機会の少ない、民族楽器のようなものも聞きたい。演奏家の方とコミュニケーションをとればよかったとちょっと残念。
又、楽しい企画を期待して居ります。

［M. S］

♯／ステキな企画だと思いました。特にウラジオストクのトリオの演奏がすばらしかった。

♭／研究のあり方としては、自主企画も良いけれど、常態として行われているホームコンサートを一定期間、取材することも大切と思います。場合によっては、これらの所と共同企画でも良いと思う。要は有料であることだ大切だと思います。

1994年７月３日（日）
吉武由子＆ﾄﾘｵ・ｿﾘｽﾂ・ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ Concert
旧東伏見宮別邸　於

招待客	３４名
演奏者	４名
通訳	１名
ﾋﾟｱﾉ調律師	１名
スタッフ	１３名
参加者　計	５３名

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

資　料 *****

【招待状・返信用ハガキ】

【a．招待状】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ご招待状

――ホームコンサートへのお誘い――

7月3日(日)

午後4時

於

旧東伏見宮別邸

（現イエズス孝女会修道院研修施設）

財団法人 ハイライフ研究所
RESEARCH INSTITUTE FOR HI-LIFE

山の手文化研究会［ホームコンサートプロジェクト］
〒104 東京都中央区銀座1-8-14 TEL.(03)3563-8686／FAX.(03)3561-1588

会場プロフィール

旧東伏見宮別邸（現イエズス孝女会修道院研修施設）

大正3年、皇族ゆえの外国通として知られた東伏見宮依仁親王の別荘として建てられた。震災前の現存する洋風建築の中で最大の規模を誇り、葉山にあった皇族の別荘の中で唯一現存するもの。設計も宮内省の手になるものと思われ、わが国の近代建築をリードしてきた明治宮廷洋風建築の栄光を受け継いでいる。2階建てだが、通常の住宅に比べてこぶる背が高く、ゆったりとした余裕のある空間が特徴。昭和30年頃から1エズス孝女会修道院の研修施設となり、63年の改修工事で見事に蘇った。白一色の外壁をもつ清楚で気品の漂った住宅建築である。

交通のご案内

〒240-01 神奈川県三浦郡葉山町堀内1968

＊京浜急行線逗子駅から5分のクルーザー約10分

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

【a．招待状（外面）】

ホームコンサートのある生活。

明治の頃から"山の手"と呼ばれたところには、当時の文化的生活のシンボルとされる豊かなライフスタイルがありました。
21世紀に向かう今日、"真に豊かな生活とは何か"が問われています。
私たちは、"山の手"にみられたライフスタイルの一つ――邸内でのホームコンサートや別荘暮らしにおける社交など――を、
見つめなおすことで、新たなライフスタイルの提案へつなげようと考えています。
～大ホールで聴く音楽から、家庭で聴く音楽へ～これからは、日常のもっと身近なところで生の音楽に親しみ、
そこでの人と人とのつながりを楽しむことが望まれるのではないでしょうか。
今回は、大正3年に建てられた西洋館の一つ「旧東伏見宮別邸」に
大正から昭和にかけて、日本の音楽界に多くの影響を与えたロシアからの音楽家を迎えホームコンサートを再現いたします。
西洋館における夏の夕暮れのひととき、どうぞこのユニークな試みをお楽しみください。
心よりお待ち申し上げております。

（財）ハイライフ研究所　山の手文化研究会〔ホームコンサートプロジェクト〕

・とき
94年7月3日(日) 午後4時
（午後6時45分終演予定）

・ところ
〒240-01　神奈川県三浦郡葉山町堀内1968
旧東伏見宮別邸（現イエズス孝女会修道院研修施設）
当日連絡先：0468-75-3622〈臨時〉

・交通
横須賀線逗子駅からタクシー約10分
（詳細は裏面の地図をご参照ください）

・出演
トリオ・ソリスツ・ウラジオストク
ヴァイオリン：フェリックス・カリマン
ピアノ：タチアナ・ルトゥコーワ
チェロ：ウラジミール・オメリャンスキー
（共演）ソプラノ：吉武由子

・プログラム
16：00頃　旧東伏見宮別邸館内見学〈ご希望の方のみ〉
（講師：水野統夫研究員）

＊　＊　＊

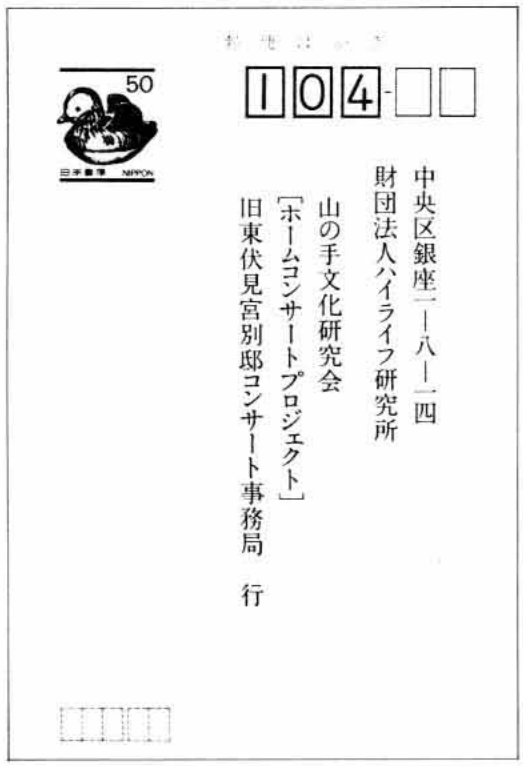
16：30　レクチャー
「白系ロシア人と東アジアのオーケストラ」
（講師：岩野裕一研究員）

17：00　コンサート
1 ハイドン／ピアノ・トリオ No.19
2 入野義朗／3つのピアノ曲
3 アントン・アレンスキー／ピアノ・トリオ No.1
〈休憩・ティータイム〉
4 ショスタコーヴィチ／A.ブロークの7つの詩
（声楽・器楽組曲）

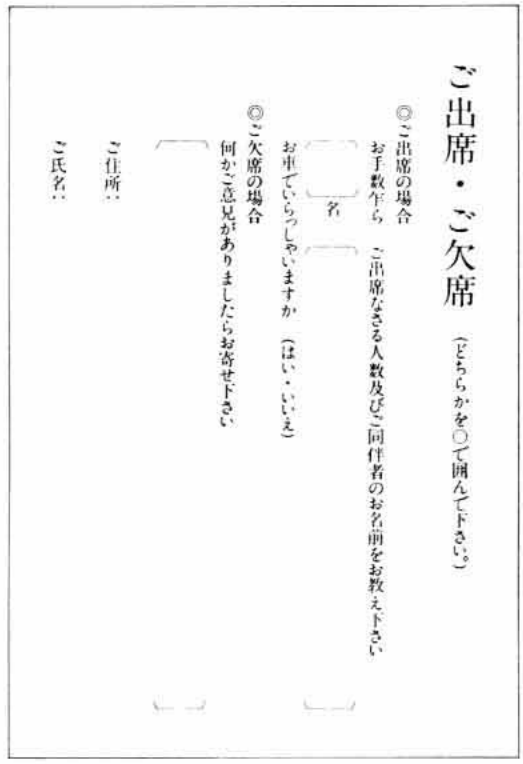
◎ご出欠は同封の葉書にて6月22日頃までにお知らせください。
◎駐車場スペースに限りがありますので、お車でお越しの方は、返信にその旨お書き添えいただければ幸いです。

【a．招待状（内面）】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

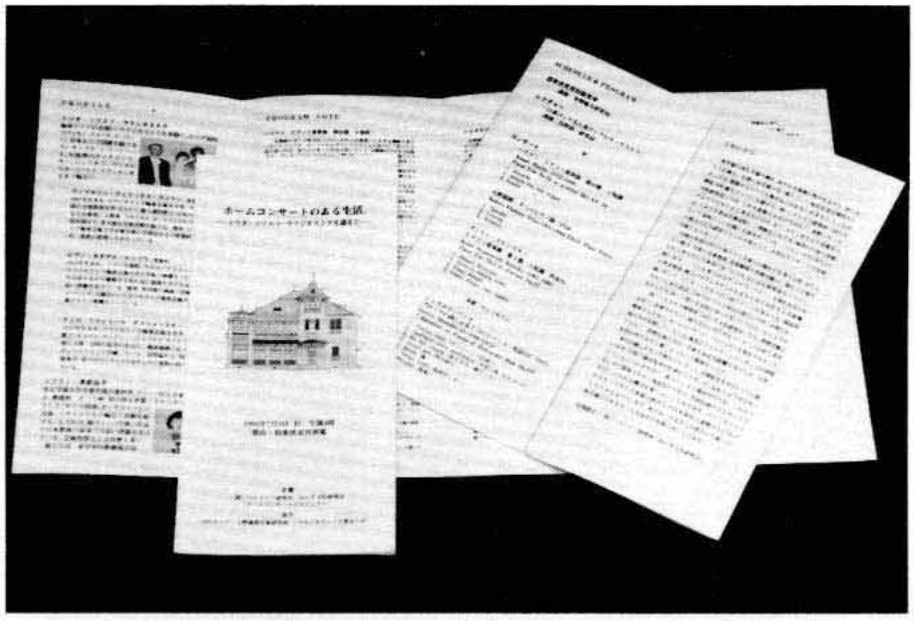


【b．返信用はがき（表）】



【b．返信用はがき（裏）】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

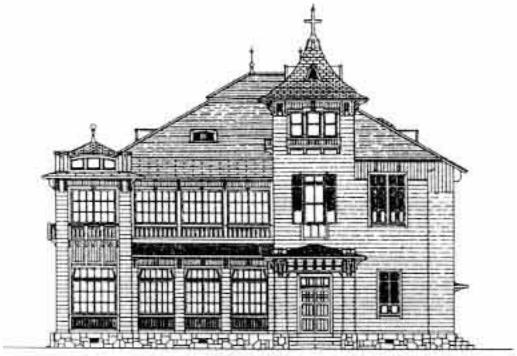


【c．当日用プログラム】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ホームコンサートのある生活。

——トリオ・ソリスツ・ウラジオストクを迎えて——



1994年7月3日（日）午後4時
葉山・旧東伏見宮別邸

主催
（財）ハイライフ研究所／山の手文化研究会
［ホームコンサートプロジェクト］

協力
JMLセミナー入野義朗音楽研究所・「ウラジオストク交流友の会」

SCHEDULE & PROGRAM

旧東伏見宮別邸見学
（講師：水野統夫研究員）

レクチャー
「白系ロシア人と東アジアのオーケストラ」
（講師：岩野裕一研究員）

＊

コンサート

ハイドン　ピアノ三重奏曲　第33番　ト短調
Joseph Haydn (1732-1809)
Piano Trio No.33 in g-minor Hov.XV-19

Ⅰ. Andante
Ⅱ. Adagio ma non troppo
Ⅲ. Presto

入野義朗　3つのピアノ曲（1958）
Yoshiro Vladimir Irino (1921-1980) Three Piano Pieces

Ⅰ. Toccata
Ⅱ. Chorale
Ⅲ. Scherzo

アントン・アレンスキー
ピアノ三重奏曲　第1番　ニ短調　作品32
Anton Stepanovich Arensky (1861-1906)
Piano Trio No.1 in d-minor Op.32

Ⅰ. Allegro Moderato
Ⅱ. Scherzo, Allegro molto
Ⅲ. Elegy, Adagio
Ⅳ. Finale, Allegro non troppo

〈休憩・ティータイム〉

ショスタコーヴィチ
ブロークの詩による7つのロマンス　作品127（1967）
Dmitrii Shostakovich (1906-1975)
7 Romances on Poems of Aleksander Blok Op.127

Ⅰ. Pesnya Ofelii（オフェーリアの唄）
Ⅱ. Gamayun, ptitsa veshchaya（予言の鳥-ガマユーン）
Ⅲ. My byli vmeste（私たちは一緒だった）
Ⅳ. Gorod spit（街は眠る）
Ⅴ. Burya（嵐）
Ⅵ. Taniye znaki（秘密のしるし）
Ⅶ. Muzyka（音楽）

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

PROFILE

トリオ・ソリスツ・ウラジオストク

極東ロシアの玄関口・ウラジオストクを本拠に、ロシア国内だけでなく、アメリカ、ヨーロッパ、日本などで活躍を続けるアンサンブル。レパートリーも、お国物のチャイコフスキー、ショスタコーヴィチからモーツァルト、ラヴェルに至るまで幅広い。

ヴァイオリン：フェリックス・カリマン（写真左）

1947年生まれ。ウラジオストク極東芸術大学卒。グネーシン国立音楽教育大学（モスクワ）修士課程終了。67年の全ロシア学生音楽祭に入賞後、リサイタル、オーケストラとの共演、放送出演など、多方面な音楽活動を続ける。現在、ウラジオストク極東芸術大学音楽学部の学部長および弦楽科主任を務め、後進の指導にもあたっている。

ピアノ：タチアナ・ルツコワ（写真中）

1954年生まれ。バクー音楽院（アゼルバイジャン）卒業後、ウラジオストク極東芸術大学大学院で研鑽をつむ。超絶技巧を誇りながら優雅さを失わない演奏スタイルは、内外で高い評価を受けている。独奏、室内楽の両面で活躍し、そのレパートリーも幅広い。ウラジオストク極東芸術大学の室内楽クラスで教鞭をとっている。

チェロ：ウラジミール・オメリャンスキー（写真右）

1946年生まれ。ウラジオストク極東芸術大学卒、同大学院修了。モスクワ、サンクト・ペテルブルグ、サラトフの各音楽祭に入賞。20年の長きにわたり、極東地域における指導的チェリストとして活躍している。詩情溢れる、情緒豊かな演奏は、氏のロマンティックなチェロに独特の持ち味を加えている。

ソプラノ：吉武由子

洗足学園大学音楽学部声楽科卒、ウィーン国立音楽大学に進み、歌曲科、オペラ科、発声科を卒業。リリック・ソプラノとして、オペラ出演、オーケストラとの共演、リサイタルなど幅広く活動を続ける。とりわけ、新ウィーン学派の作品や日本歌曲の演奏では高い評価を受けている。芸術祭賞など受賞歴も多い。二期会会員、東京室内歌劇場会員。

PROGRAM NOTE

ハイドン　ピアノ三重奏曲　第33番　ト短調

“交響曲の父”と呼ばれ、バロックから古典派への大きな飛躍を果たしたハイドンだが、モーツァルトやベートーヴェンと比べていまひとつ影が薄いのは、余りにに多くの作品を残したこと（交響曲だけでも100曲以上）、そして“パパ・ハイドン”と呼ばれる円満温厚な人柄の故だろう（「あなたっていい人ね」といわれる人物には、悲しいことに“熱烈なファン”はいないのである）

だが、一見保守正しいハイドンの音楽の中にある、ユーモアの輝きや辛辣な批判精神、そして人間らしさに気付いたとき、ハイドンの音楽はなにものにも代えがたい魅力を放つ。

1794年にロンドンで出版され、マリア・テレーゼ・エステルハージ夫人に献呈されたこの「第33番」は、3楽章からなる演奏時間12分ほどの佳品。バロックの精神と、古典派の風格が融合し、溢れる歌心が心愉しい。

実は、50曲近くあるハイドンのピアノ三重奏曲の作品番号は混乱しており、ウラジオストクから届いたきょうの演奏曲目には「No. 19」とあったのだが、作品につけられたホーボーケン（学者の名前）番号にしたがって、「第33番 Hob. XV-19」をきょうの演奏曲目と判断した。たとえ何番であっても、ハイドンの響きは、このサロンにふさわしい暖かなものであることには違いないから、もし別の曲が流れてもどうかお許しあれ。

入野義朗　3つのピアノ曲

日本の現代音楽に大きな足跡を残した入野義朗（1921-1980）が生まれたのは、ロシア革命後の混乱が続くウラジオストクだった。きょう、ここに極東ロシアからの演奏家を迎えることができたのは、氏の遺志を継いで、日ロ両国の音楽家交流に尽力している禮子未亡人のお力添えによるものであることをここに記し、心より感謝の意を表したい。

*

さて、東京帝大を卒業後、一時は銀行マンの道を歩んだ入野は、作曲家としてオーケストラ作品、オペラ、室内楽など、その生涯で100曲余りの作品を残している。また、斉藤秀雄らと桐朋学園音楽科の設立に参加し、その運営と教育にあたったほか、日本現代音楽協会、アジア作曲家連盟の要職をつとめるなど、常に新しい音楽の追求と紹介を行なってきた。

1958年に作曲された〈3つのピアノ曲〉は、シェーンベルクが開拓した12音技法を受け継いで書かれた、“現代音楽の古典”ともいうべき作品。

第1曲「トッカータ」　ポリフォニックに躍動的な動きを強調する。
第2曲「コラール」　ゆったりとした運びによる垂直の響きで、余韻の音色的ニュアンスも豊か。
第3曲「スケルツォ」　生き生きとしたリズミックでダイナミックな音楽。

アレンスキー　ピアノ三重奏曲　第1番　ニ短調

1861年生まれのロシアの作曲家・アレンスキーの名は、いまではすっかり忘れられているが、当時は作曲家兼演奏家として広く親しまれていた。

チャイコフスキーの薫陶を受け、ペテルブルグ音楽院でリムスキー・コルサコフに作曲を学んだという経歴は、同世代のグラズノフとほぼ一致した足取りだが、抒情的なメロディや柔らかな音色など、その特徴ある魅力は、歌曲やピアノなどの小品で発揮されたため、大家として名を残すことはできなかった。だが、近年再評価の動きは高まっており、代表作であるこの〈ピアノ三重奏曲第1番〉が演奏される機会も増えている。

アレンスキーはピアノの名手でもあったため、この曲のピアノ・パートには各所に効果的なリズムや音型が配置されている。日本の歴史で見れば、明治維新から日露戦争の間に生きてきたアレンスキーの音楽は、帝政ロシアのよき時代の香りを伝える、ロマンティックなものといえよう。

第1楽章　美しく抒情的なヴァイオリンの第1主題と、チェロの力強い第2主題が展開するソナタ形式の楽章。
第2楽章　アンサンブルの効果を生かした、陽気で少しおどけたスケルツォ。
第3楽章　ピアノが重々しく奏する葬送行進曲のリズムにのって、チェロやヴァイオリンが悲痛な哀歌をうたう。
第4楽章　冒頭に提示されるわずか1小節の主題が、変奏的にフィナーレの盛り上がりを作り上げる。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ショスタコーヴィチ　ブロークの詩による７つのロマンス

20世紀も終わりを告げようとしているいま、「今世紀最大の作曲家は誰か」と問われれば、多くの人がショスタコーヴィチの名前を挙げるに違いない。

共産主義という人類史上まれな"実験国家"のなかで、芸術もまた政治の波に翻弄されたわけだが、困難な時代を生き抜いた晩年のショスタコーヴィチは、人間の生死や思索といった、根源的なテーマに取り組むことになる。その結果、作風は自然と室内楽志向が強まり、なかでも文学に造詣が深かったショスタコーヴィチにとって、歌曲は最良の表現手段だった。

原題に"ソプラノ、ヴァイオリン、チェロとピアノのための声と器楽の組曲"という指定がついたこの曲は、3つの楽器がソプラノの旋律にオブリガート風にからみあい、独特の透徹な世界を作りだしている。

テキストに選ばれた詩を作ったアレクサンドル・ブローク（1880-1921）は、ロシア象徴派を代表する抒情詩人。19世紀末の漠とした不安を表出した青年詩人の神秘的な言葉に、死を前にしたショスタコーヴィチは何を感じたのであろうか…。

第１曲　「オフェーリアの唄」
シェークスピアの『ハムレット』に題材をとった悲歌。チェロが静謐ななかにも悲痛な想いを奏する。

第２曲　「予言の鳥ーガマユーン」
ガマユーンは人間の顔をしたロシアの伝説上の怪鳥。災害や天変地異を予言するといわれ、そうした悲劇の高揚を歌い上げる。

第３曲　「私たちは一緒だった」
ヴァイオリンとソプラノが、過ぎ去った愛への回想を歌う。

第４曲　「街は眠る」
ブローク、ショスタコーヴィチがともに過ごしたペテルブルグの、眠り、夜霧、朝焼け。

第５曲　「嵐」
シェークスピアの『リア王』からヒントを得て書かれた。ヴァイオリンとチェロが嵐を描く。第５曲から第７曲は続けて演奏される。

第６曲　「秘密のしるし」
極限まで切り詰められた最小限の音響のなかで、原型の世界が展開される。

第７曲　「音楽」
音楽を最高の芸術とみなしたブロークの詩に、生命感を宿した音楽がこだまする。

訳詩（ウサミ・ナオキ訳）

Ⅰ.オフェリアの歌

いとしい乙女、
さらばといいつつ、
君は私に　愛を誓った！…
いとわしい国に　赴くにせよ、
その誓いを守りたまえ！…

幸多いデンマークのかなた、
君の行く岸べは霧の中…
大波はいらだち、ざわめいて
断にからい涙を洗う…

涙に全身をうちかためた
いとしい戦士は
戻ることはない…
秋の中に重たく揺れる
銀リボンと黒い羽根…

Ⅱ.予言の鳥ーガマユーン

夕焼けで紫に染めあげられた
果てしない、平らな水面の上に
かの鳥は予言を歌う。
破られた翼をあげる力もなく…
予言されるのは、
きびしいタタールのくびき、
血まみれの処刑の繰りかえし、
予言されるのは地の震え、飢饉、火災、
悪人の勝利、義人の破滅…

古よりの怖れに包まれつつも、
そのうるわしい面は愛に燃え、
血に焼けただれた、その唇は
永遠の真理を響かせる！…

（訳注：タタールのくびき＝13世紀初めから15世紀末までのタタール・モンゴル族によるロシアへの侵攻、支配をいう）

Ⅲ.私たちは一緒だった

私たちは一緒だったのを覚えている…
夜は胸を踊らせ、
ヴァイオリンは歌っていた…
そのころ君は僕のものだった
君は刻一刻と美しさを増していった…
流れの静かなせせらぎを通して
しとやかなほほえみの秘密を通して、
くちづけは唇を求めていた、
弦の響きは心を求めていた…

Ⅳ.街は眠る

霧に包まれて街は眠り、
あちこちにガス燈が煙く…
ネワ川の遠かかなたに
朝焼けの輝きが見える。
その遥かな照りかえしの中に、
その炎の輝きの中に
私にはやりきれぬ日々の
めざめが身をひそめていた…

（訳注：ネワは当時の首都ペテルブルグ（現レニングラード）を流れる）

Ⅴ.嵐「お前たち、哀れな裸の者たちよ」（リア王）

おお、戸外では何とひどく
風が吠え、荒れ狂うことか！
駆けまわる黒雲は雨を注ぎ、
風は息つぎをしては唸る！
恐ろしい夜！　こんな夜には
私は宿なしたちが哀れになり、
同情に追い立てられて行く、
湿った寒気の極衣の中に！…
暗闇と雨嵐と戦うのだ、
受難者たちと運命を同じくして…

おお、戸外では何とひどく
風があえぎ、荒れ狂うことか！

（訳注：当時のリア王役の名優Ｖ．ダルマートフに捧げられた詩）

Ⅵ.秘密のしるし

眠りこける厚い壁に
秘密のしるしが燃えさかる。
金色と赤のけしの花が
夢で私にのしかかる。

夜の洞穴にひそんだ私は
恐ろしい奇蹟を忘れ去る。
晩には、青いキマイラたちが
明るい空の鏡をみつめる。

私が過去の時間に遇けて、
恐怖の眼を閉じれば、
冷え行く本のページには
乙女の黄金色の下げ髪。

頭上に天蓋はすでに低く、
黒い夢は　この胸の中に重たい。
私の定められた終末は間近か、
戦争と大火が目の前なのだ。

（訳注：キマイラは、ギリシャ神話の火を吐く怪蛇）

Ⅶ.音楽

夜、おののきは眠りこみ、
街は闇の中に隠れる。
おお、神の音楽は豊か、
地上に満ちる　妙なる響き！

人生の嵐が何であろう、わがために
君のバラが開き、燃えるならば！

人間の流す涙は何であろう、
夕焼けが赤く燃えさかるならば！

宇宙の聖母よ、とりたまえ、
血と苦難と、そして祈りをとおして
最後の熱情の泡立つ盃を、
あなたのいやしい奴隷から！

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ごあいさつ

水平線に沈む夕陽を眺め、涼やかな海風に吹かれながら、ゆったりと心地よい音楽に耳を傾ける。慌ただしい毎日を送る現代人にとっては、想像するだけでも贅沢なことかもしれません。ところが、創造力旺盛なメンバーを擁する（財）ハイライフ研究所「山の手文化研究会」では、これを想像するだけではなく、実際にやってみようではないかと考えたのです。幸い、ウラジオストク交流友の会、イエズス孝女会修道院にご理解をいただき、海辺の白亜の洋館という素晴らしい会場にも恵まれ、トリオ・ソリスツ・ウラジオストクの皆さんと吉武由子さんをお迎えして、今夕のコンサートが実現可能となりました。

日頃の生活の中での私たちと音楽との関わりを考える時、ほとんどの場合、日本の音楽教育、音楽観賞が消費活動の一環として捉えられてきたという事実に気づかされるのは大変残念なことだと思います。一つでも多くのピアノやヴァイオリンを買わせるための英才教育、新しいステレオや、CDを売るために存在する音楽雑誌。そして、コンサートやオペラへ行くという行為すらも、商品化されてしまう社会。これでは、たとえ毎日の暮らしの中に音楽があったとしても、決して豊かな生活とはいえないのではないでしょうか。

（財）ハイライフ研究所「山の手文化研究会」では、消費活動ではなく、音楽そのものに接することができるコンサートの在り方を模索するために、ホームコンサート・プロジェクトを発足させました。私たちが目指しているのは、様式としてのホームコンサートの再現ではなく、消費行為ではない音楽を身近な距離で受けとめ、日常生活の中で心から楽しもうという精神なのです。

本日お越し下さった皆さんは、きっと、音楽好きな方ばかりだと思います。日頃の満員電車や仕事のことはしばし忘れて、どうぞごゆっくりとおくつろぎ下さい。私はロンドン滞在中のため、このコンサートに参加できずに残念なのですが、次回以後のコンサートでお目にかかれる機会を楽しみにしております。ウラジオストクからやってきた音楽家の皆さんの日本滞在が素晴らしいものとなりますように、また、本日おいで下さった皆さんが楽しい一時を過ごされますことを心からお祈り申し上げます。

岩渕潤子／（財）ハイライフ研究所「山の手文化研究会」

財団法人 ハイライフ研究所
RESEARCH INSTITUTE FOR HI-LIFE

●財団法人ハイライフ研究所は、「21世紀にわれわれは、どのような生活を志向していくべきか」、また、「その実現にむけて積極的に何をしていくべきか」について、生活者の視点から体系的に調査研究し、それを実践的なプログラムとして、提示すべく活動しています。そして、基礎的研究は当然のことながら、研究者による情報発信機能を重視し、アクションプログラムを充実させ、その成果を通して社会に貢献することを目的としています。

●財団法人ハイライフ研究所は事業活動として次のことを計画しています。

21世紀のハイライフに関する研究
人間の価値観とライフスタイルの研究、環境とライフスタイルの研究を3方向（時代・地域・メディア）の視点から研究する。

ハイライフモデル調査の展開
日本に於けるユニークなライフスタイルを有している地域の人々の生活を調査し、ハイライフ研究の基本的なデータとする。

ハイライフ研究機関誌の発行
「21世紀のハイライフに関する研究」によって明らかにされた研究成果を、機関誌で発表する。

ハイライフシンポジウムの開催
「ハイライフの研究」から産み出された成果を広く社会に発表する。

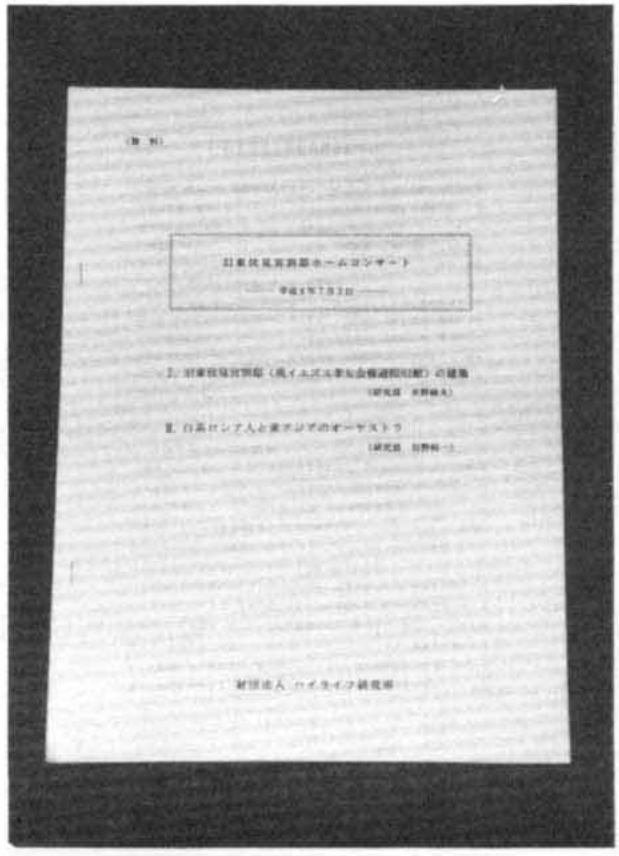
オープンカレッジの開催
望ましいライフスタイルの在り方を中心テーマとし、社会人に向け広くディスカッション・教育・学習の場を提供する。

●設立／平成5年5月12日、主務官庁／経済企画庁

山の手文化研究会
研究員：岩渕潤子（座長）　伊藤 恵　犬飼素子　岩野裕一
　　鈴木伸子　松岡温彦　水野統夫　米村洋一
事務局：野中正美　市川昭彦　海江田真未子

〒104 東京都中央区銀座1－8－14
TEL.(03)3563-8686／FAX.(03)3561-1588

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp



【d．レクチャー資料（表紙）】

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

（資　料）

旧東伏見宮別邸ホームコンサート

―― 平成6年7月3日 ――

Ⅰ. 旧東伏見宮別邸（現イエズス孝女会修道院旧館）の建築

（研究員　水野統夫）

Ⅱ. 白系ロシア人と東アジアのオーケストラ

（研究員　岩野裕一）

財団法人 ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

I. 旧東伏見宮別邸の建築について

かつての葉山には、御用邸の他にも皇族の別荘は多かったが、旧東伏見宮別邸は、その中で唯一現存するものである。しかも、関東大震災前の稀少な遺構であり、現存する洋風別荘建築では最大規模のものである。

神奈川県教育委員会により、昭和57年度から60年度の４年間に調査が行なわれたうえで、昭和63年度に改修工事が施され、みごとに蘇った。以下、その際の「神奈川県近代洋風建築調査報告書」をもとに解説する。

なお、明治から大正初期の宮廷洋風建築（別荘も含めて）がベースとなって、洋風外観・和洋折衷の住宅が生まれ、役人・軍人・会社員・学者・文化人等による山の手の生活が始まったとされている。ちなみに目白文化村は大正11年、田園調布は大正13年に分譲が開始されている。夏の避暑地での生活やホームコンサート（例えば、目白文化村の宮本邸）等の文化も引継がれていくなかで、山の手文化が成熟していったと思われる。

1.　湘南の旧洋風別荘建築

鎌倉、葉山、藤沢、茅ヶ崎、大磯等の湘南地方は、明治以後わが国第一の別荘地であったと言ってよい。そこには明治20年代[(1)]から当時の貴顕紳士達の別荘建築が次々と建てられた。たとえば鎌倉においては、明治末期に別荘建築の数は800以上にも及び、これは同時期の鎌倉の全戸数2400余戸の三分の一にも及んでいる[(2)]。また、昭和９年の葉山の常住家屋が1567戸であるのに対し、別荘は487戸であり[(3)]、ここでも別荘が全住戸の四分の一近くになっていることがわかる。

これらの別荘建築の多くは、伝統的な和風の建物であったが、一部を洋風にしたものもあり、また、全く洋風で建てられたものもあった。洋風の建物は数こそ少なかったが、その規模・質においては別荘建築の最上等の部分に属した。その典型的なスタイルは木造二階建てで、外壁はハーフティンバー（木造の構造を外壁にあらわした構法）か下見板張り、屋根はスレートもしくは瓦で葺いたかなり急勾配の切妻といったものである。また、その急勾配の屋根の小屋裏を物置き風にして一部三

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

階建てとするものも多い。総じて、別荘建築の故かピクチュアレスクな外観をもっている。

さて、湘南地方の洋風別荘建築のわが国近代住宅史上に占める位置であるが、一部の大規模住宅には比肩し得ないまでも、よく意を用いてつくられた中規模住宅の重要な遺構群であることは間違いない。わが国の別荘建築、あるいは神奈川県の近代住宅建築としての重要性は言わずもがなである。ただ、残念なことに、大半の建物が関東大震災で倒壊してしまった。震災前の別荘建築で現存するものは、鎌倉の伊藤邸、古我邸、葉山のイエズス孝女会修道院旧館、大磯の伊藤邸など僅かである。しかも現存するものの震災後相当な修築・改造の行われているものも多い。また、従来通りの別荘、あるいは別邸として今日も用いられている建物は皆無である。すなわち、それらはあるいは常住の住宅として、あるいは、企業・団体の保養所・寮・会館などに用いられて今日に至っている。震災後、大正末から昭和初めにかけて建てられた別荘建築も同様な運命を辿っている。つまり多くは居住者を幾度か変えているから、その度に単なる補修ではない改変をいくらか受けていることになる。

とは言え、湘南地方に現存するこれらの住宅建築は、別荘建築としてはもちろん、わが国近代住宅建築史上から言っても重要な遺構群であり、特筆すべき遺構も何棟か存在する。

ところで、別荘建築とはいっても常住の住宅と特段に違うわけではなく、住宅建築と全く同じ設備を備え、同じ平面をもっている。ただ常住の住宅、すなわち本邸よりも規模が小さいだけであるが、江戸時代の大名の下屋敷と同じく、庭園に意を用い、周囲の自然との融和を計っている。もちろん、湘南地方には当初から常住の住宅として建てられたものも現存するが、当初別荘として建てられたものの方が概ね規模が大きい。これは当然のことながら、それぞれの施主の社会的地位と財力の格段の差違によるものである。その旧別荘建築の平面形式であるが、いまの所、以下のようなことが言えるのではないかと考えている。すなわち一部に必ず和室をもつこと、そして廊下の左右でサーヴィス部、すなわち厨房・使用人室・便所などと、居室・応接室とを分けていることである。要するに「中廊下型」[(4)]のプランが多いと言える。

さて、実例であるが、まず震災前のものとして、鎌倉の長谷子供会館（明治41年）、鎌倉の伊藤邸（明治42年頃）、葉山のイエズス孝女会修道院旧館（大正3

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

年）、鎌倉の古我邸（大正５年）、大磯の伊藤邸（大正初期？）、逗子の石渡邸（大正７年）があげられる。

つぎに震災以後のもので主だったものを地域ごとにあげておこう。鎌倉では旧華頂博信侯爵邸（昭和４年）、鎌倉近代文学館（昭和11年）、浜口邸（大正13年）、戸塚邸（？）、大磯では三井銀行大磯寮（昭和８年）、村田邸（昭和２年）、大磯アカデミーハウス別館（昭和11年）、葉山では加地邸（昭和２年）、鬼原邸（？）、鹿島建設研修センター（昭和12年）、藤沢では渡辺邸（昭和３年）、旧近藤邸（大正14年）、逗子では本多邸（昭和13年）などがあげらる。これらは今日では、一時代の住文化を示す貴重な遺産と言わねばならない。

（注）

(1) 明治20年の東海道線開通、同22年の横須賀線開通を契機とする。

(2) 大橋良平編「現在の鎌倉」（通友社、明治45年）12頁および45頁。

(3) 「葉山町郷土史」（高梨炳編、葉山町、昭和50年）93頁。

(4) 木村徳国「日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する研究」北大工学部研究報告№18，19，20，21（昭和33年５月、７月、12月、同34年５月）参照。このすぐれた研究は、しかし平面形式の背後にある住宅観を強調するあまり、平面形式そのものを素朴に見ないという瑕瑾を有している。したがって「中廊下なき中廊下型」という奇妙な呼称も生じて来る。また「中廊下型」から「居間中心型」への移行もきわめて微妙で、湘南の旧別荘建築には「居間中心型」と呼ぶべきかと思われるものも多い。今後の検討課題である。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

2. 旧東伏見宮別邸について

旧名称：東伏見宮別邸

建設年：大正３年

設計・施工：宮内省か

構　造：木造２階建て、３階塔屋付き、石造布基礎、洋小屋組

規　模：床面積１階264.99㎡、２階263.30㎡、３階塔屋13.25㎡、計541.54㎡

仕　上：屋根、石綿スレート葺き、一部銅板葺き、外壁、ドイツ下見板張り。

１）沿革

東伏見依仁親王（1867～1922）の別邸として大正３年に竣工した。『葉山郷土誌』は「大正３年２月上旬東伏見宮御別邸建設」と記し[5]、『依仁親王』は大正３年『親王並に妃は12月28日此度葉山の里樹陰深き処に新築成りたる御別邸に赴かれ」と記し[6]ている。現在、イエズス孝女会修道院に残されている数点の地籍図および宮内庁書陵部蔵の「皇族財産録」によれば、大正２年11月から大正５年３月にかけて敷地買い上げが行われているから、『葉山郷土誌』の記述は竣工を示すものではなく、竣工は大正３年の終り頃であろう。その後も土地の買い増し、交換があったようだが、昭和７年の時点で宅地のみで2602坪、畑、山林も含めて8665坪の広大な敷地に建築面積304㎡の二階建て洋館、建築面積約136㎡の和風二階建て、建築面積174㎡の和風平家が建ち、それぞれ廊下でつながれていた。他に数棟の付属家、温室、それに広い庭園内の要所には四阿が建てられていた。（図１）

さて、その後の変遷である。依仁親王は大正11年に亡くなったが、周子妃はその後21年間これを守られたと言うから、戦前まではあまり変化はなかったものと考えられ、震災についても、倒壊はなかったと考えてよいであろう[7]。戦後、恐らく接収されたものと思われるが詳かにしない。そして昭和27年、横浜カトリック司教会が神父等の別荘として買い取り、昭和30年頃イエズス孝女会修道院に譲渡されたという。また、付属家の一棟は、昭和31年４月、日本赤十字本部に下げ渡され[8]、職員保養寮として用いられていたが、昭和41年４月に売却されている。先述の主だった建

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

物は、少なくとも昭和42年３月までは無事[9]で、二階建て洋館と和風二階家は修道院に、和風平家は付属幼稚園に用いられていた。しかし、その後、和風２棟は共に取り壊される。そして昭和50年、敷地内に鉄筋コンクリート造三階建ての新館と付属の幼稚園が新築され、さらにその後、洋館の北端部の二室分とそれに接するかつての和風二階家とのつなぎの廊下の部分が取り壊され、昭和52年頃に屋根の葺き替えが行われて今日に至っている。現在は修道院の信徒達の研修・交歓の場として用いられている。なお、現在イエズス孝女会修道院の敷地は、東伏見宮別邸の敷地のざっと30分の１程度であり、他の部分はほとんどすべて他人の住宅地となっている。

２）建築的特徴

当初はさらに２棟の和風建物が建っていたから、先述の昭和50年の一部取り壊しがなければ、延床面積1000㎡を越える第一級の別荘建築であった。しかも和・洋館を別棟とする明治期の大規模邸宅の型をとどめて[10]おり、わが国を代表する別荘建築[11]であった。以下、現存部分について記そう。（図２～５）

旧東伏見宮別邸は総二階建てで、南面に三階に相当する塔屋をもつが、二階建ての住宅としては非常に背が高く、棟までおよそ13.4m、３階の塔屋頂部までだと約15.3mに達する。この建物の外観の特徴は、まず、そのすらりとした丈の高さ、それに端正なドイツ下見の外壁にある。石積みの高い基礎、平滑な壁面、鎧戸付きの上げ下げ窓、寄棟の大屋根、これらはこの建物に一種の風格を与えている。屋根は現在は石綿スレート葺きであるが、当初は天然スレートと銅板の併用であったものと思われる。そして暖炉の煙突が棟から突き出していたであろう。

この建物は南側[12]にポーチを設ける。このポーチは建物の規模に比して異様に奥行があり、また高く、随所に施された幾何学的装飾と相まって格式を感じさせる。とは言っても、重厚ではなく実に典雅である。ポーチの高い天井は吹き寄せの格天井。玄関は石張りの土間で、この玄関と同じレヴェルの石張りの土間が西へ行き、さらに北へ折れて続く。現在この土間は北へ折れてから中途で止まっているが、当初は北端まで土間であった。実にゆったりとしたヴェランダである。ヴェランダに面する内壁が外壁と全く同じ処理をされているが、要するにこのヴェランダに外部的な雰囲気を強めるためであろう。このヴェランダの外壁には当初から引き違いの窓が入っており、吹き放しではない。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

したがって、今日見る外壁は、先述の北側の二室取り壊しに伴ってやや粗雑な下見板が張られた北側壁以外は当初のままである。すなわち北、東、それに南の東半分の各面は鎧戸付きの上げ下げ窓の開いたドイツ下見の平滑なファサード、そして南の西半分と西の各面は、華麗な手摺り子をもつバラスレードに引き違い窓、それに高窓という開放的で賑やかなファサードということになる。

次に内部意匠であるが、ここでもまたその第一の特徴はゆったりとした間取りと天井の高さにある。床は玄関、ヴェランダのレヴェルより十数センチ高く、寄せ木張り、壁・天井は漆喰塗りもしくはクロス張りである。玄関を軸にその西側に応接室と食堂の二室、東側にサーヴィス空間を配している。食堂の奇妙な二本の柱は、先述のようにヴェランダを区切っていた壁の跡に立てられており、アコーデオンドアももちろん後補のものである。また、さらに北側に厨房があったが、その基礎石が残されており、食堂の北側壁にも厨房と連絡するドアの痕跡がある。

二階には和室が二室ある。そのうちの一つは15畳敷きの広々とした部屋であり、床・棚・付書院を備えている。真壁、欄間、蟻壁つきで格天井、長押には槍掛の金具までついており、全く書院のようである。井桁に組んだ木製の天井照明器具が奇妙な調子を加えているが、一階と同じく天井も高く、格調高い和室である。二階の改造は、取り壊された北端部の部屋の上部にあったバルコニーと連絡路がなくなったことと、塔屋への階段室に間仕切りが加えられたことのみである。

以上のようにこの建物は、北端部の取り壊しを除けば改造が少なく、家具・調度もよく残されており、総体として雰囲気がよく保たれていて極めて貴重である。なお、照明器具や金具等のあちこちに付されている三ツ割菊の家紋は小松宮家のものであり、東伏見宮のものではないが、その理由はよくわからない。[13]

（注）

(5) 『葉山郷土誌』（福田勝之発行、昭和５年）「宮家御別邸」の項。

(6) 『依仁親王』（東伏見宮蔵版、昭和２年）405頁。

(7) ただし大正３年の建築にしてはデザインが新しすぎるきらいがないでもない。現在、イエズス孝女会修道院所蔵の平面図も創建当初のものであることの確かな事実はない。

(8) これは、現在のイエズス孝女会修道院の敷地の南側で道路との間の部分にあっ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

た。木造の和風平家だったという。

(9) 藤木工務店が幼稚園の増築を担当した時の昭和42年3月7日付の図面があり、それには主だった建物がすべて描かれている。

(10) コンドル（英国人）の有栖川宮邸（明治17年）は、純洋風であるが、北白川宮邸（明治17年）は2階に和室がとり入れられ、岩崎家深川別邸（明治22年）から和館が別棟として、つくられるようになった。

(11) 設計は宮内省の手になると思われ、明治宮廷建築の栄光を受け継いでいる。
明治宮廷建築は、日本政府の招聘により、工部大学校（東京大学工学部の前身）教授として来日したコンドル（英国人）によりスタートしたが、（例えば、有栖川宮邸等）明治末から大正初期にかけて、その第1回生である片山東熊により花を開いた。
片山東熊が宮内省内匠頭（タクミノカミ）として明治37年から大正4年末まで在職したが、その間、宮内省内匠寮は多彩な人材を養し、赤坂離宮を始めとする多くの宮廷建築を設計した（伏見邸、山県公爵邸、北白川邸等多数）。旧東伏見宮別邸も、それらの人材によるものと思われるが確かではない。

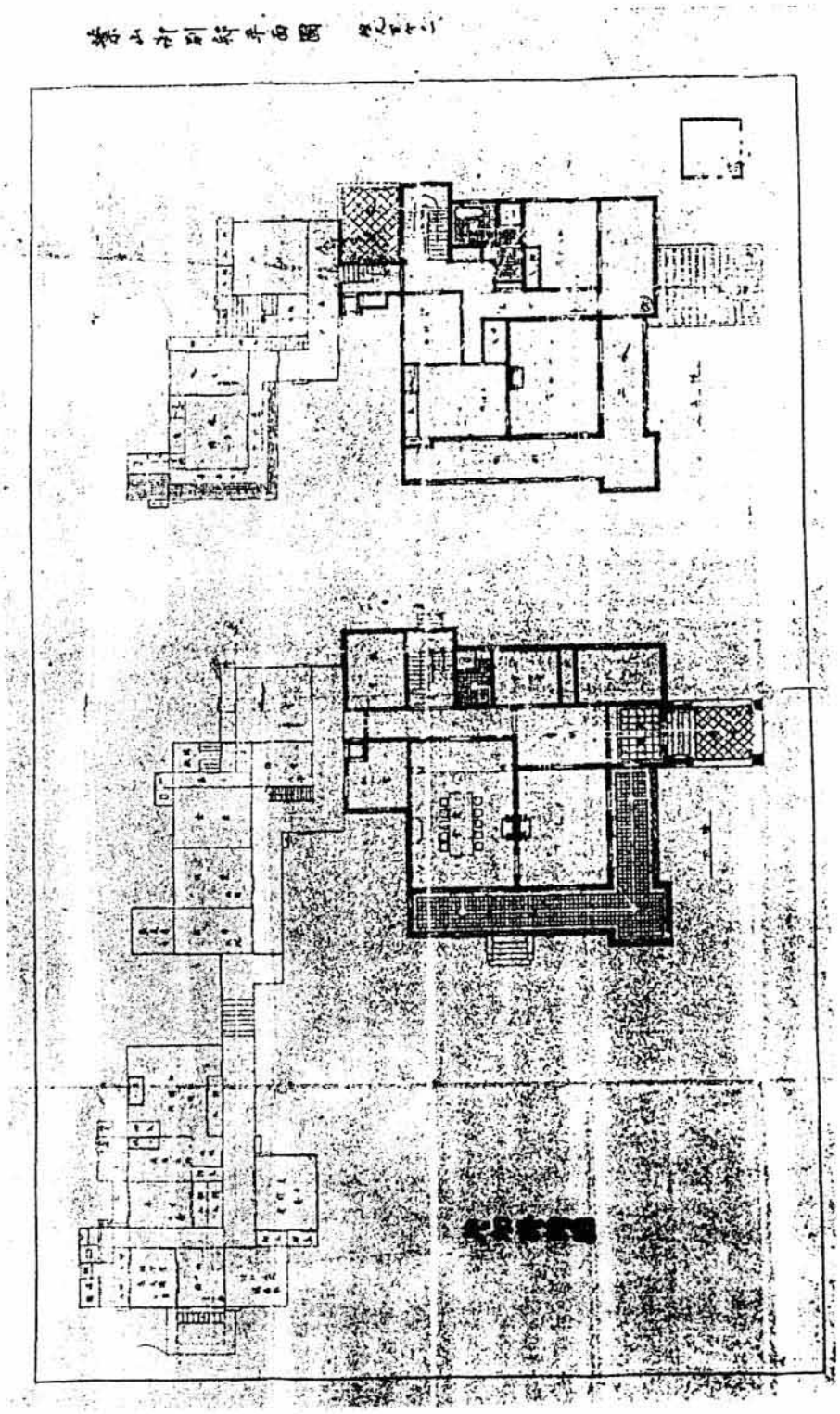
(12) 正確には西南側だが、便宜のため、これ以前も以後もこれを南として記述している。

(13) 依仁親王が東伏見宮を称したのは明治36年1月。それに先立つ明治18年に小松宮彰仁親王の養子となっている。彰仁親王は明治3年に一度東伏見宮を称し、同15年に小松宮と改称している。このように複雑であるが、この建物の建設時は依仁親王は東伏見宮であり、疑問が残る。

（水 野 統 夫）

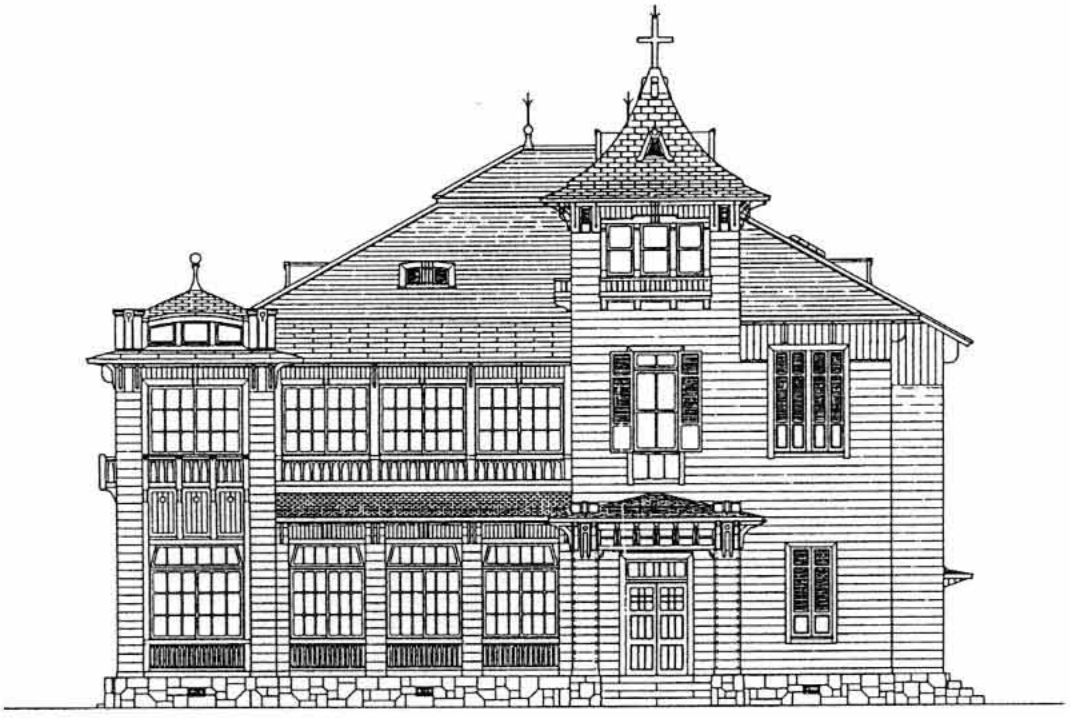
©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

図－1　旧平面図



©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

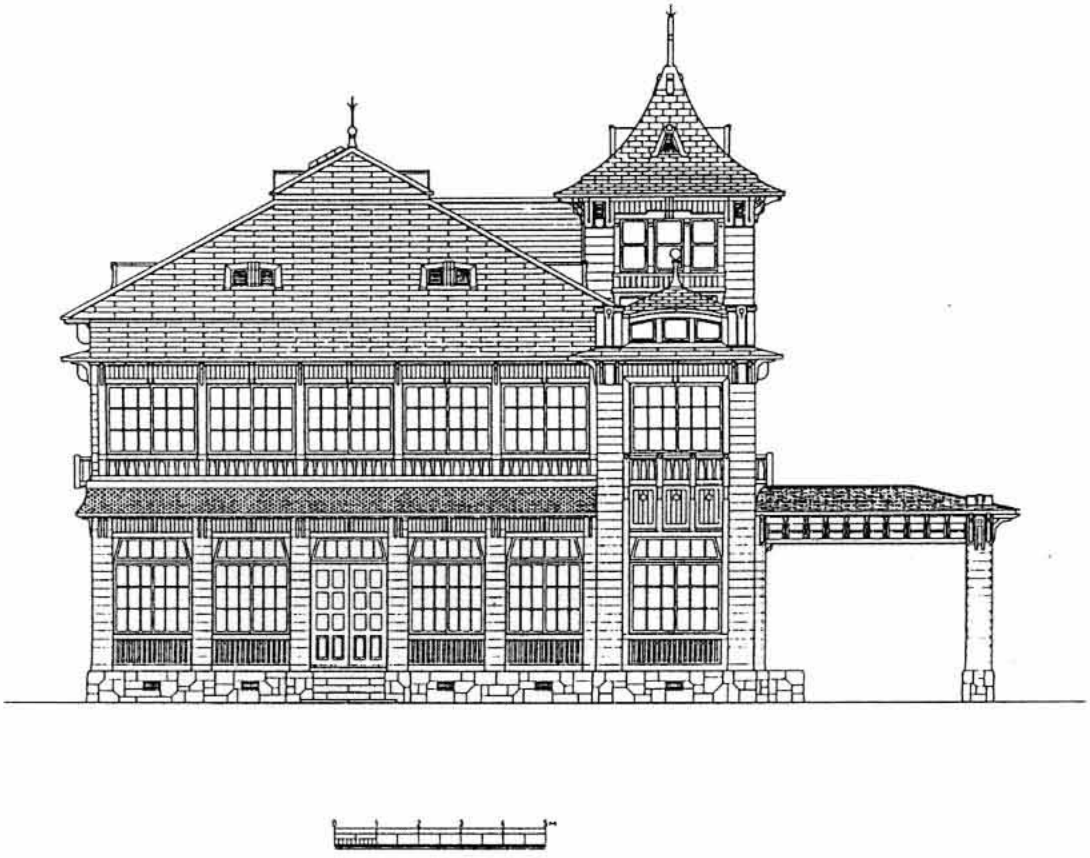
図－2　現状南立面図



イエズス孝女会修道院旧館
南立面図

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

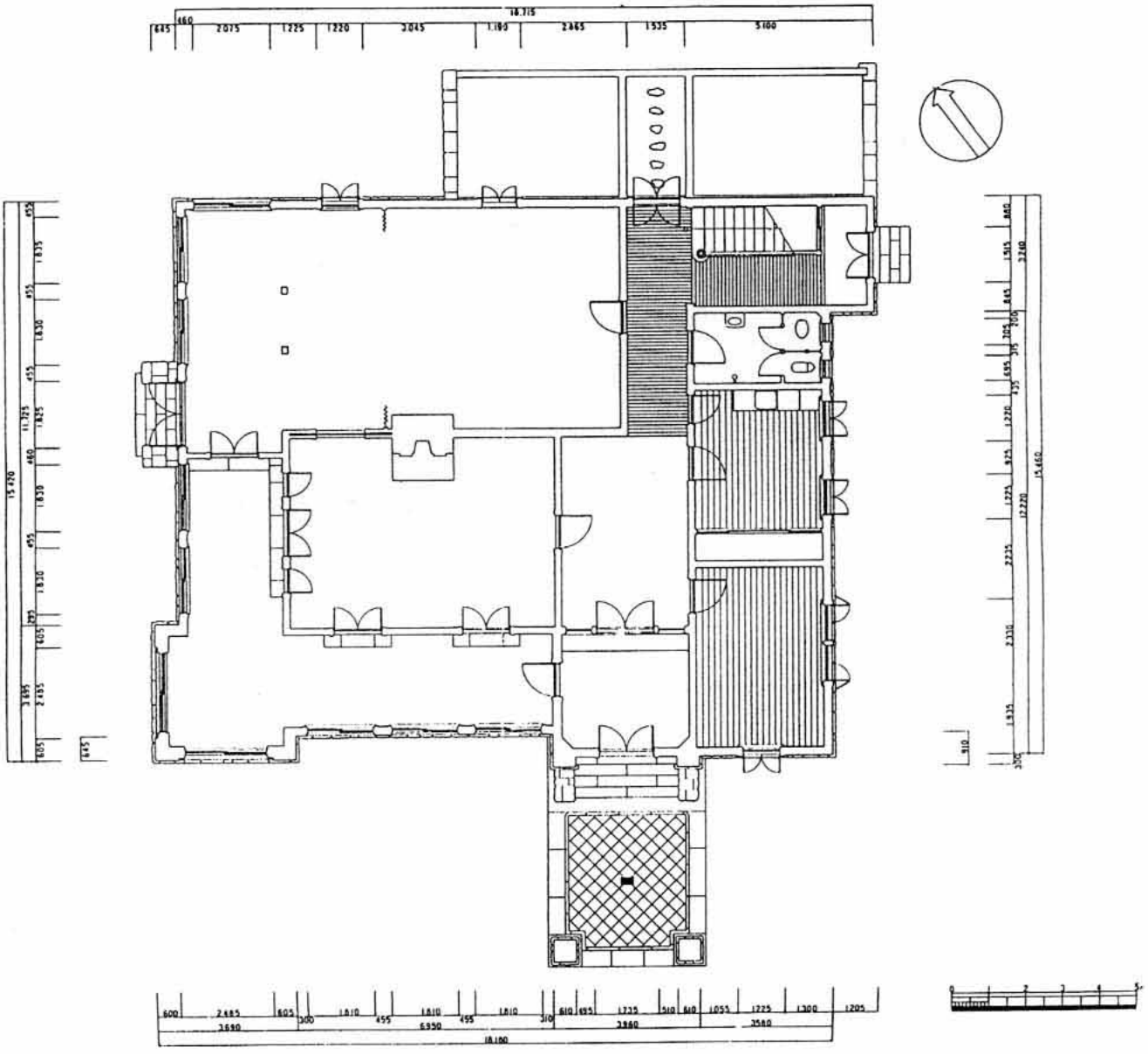
図－3　現状西立面図



イエズス孝女会修道院旧館
西立面図

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

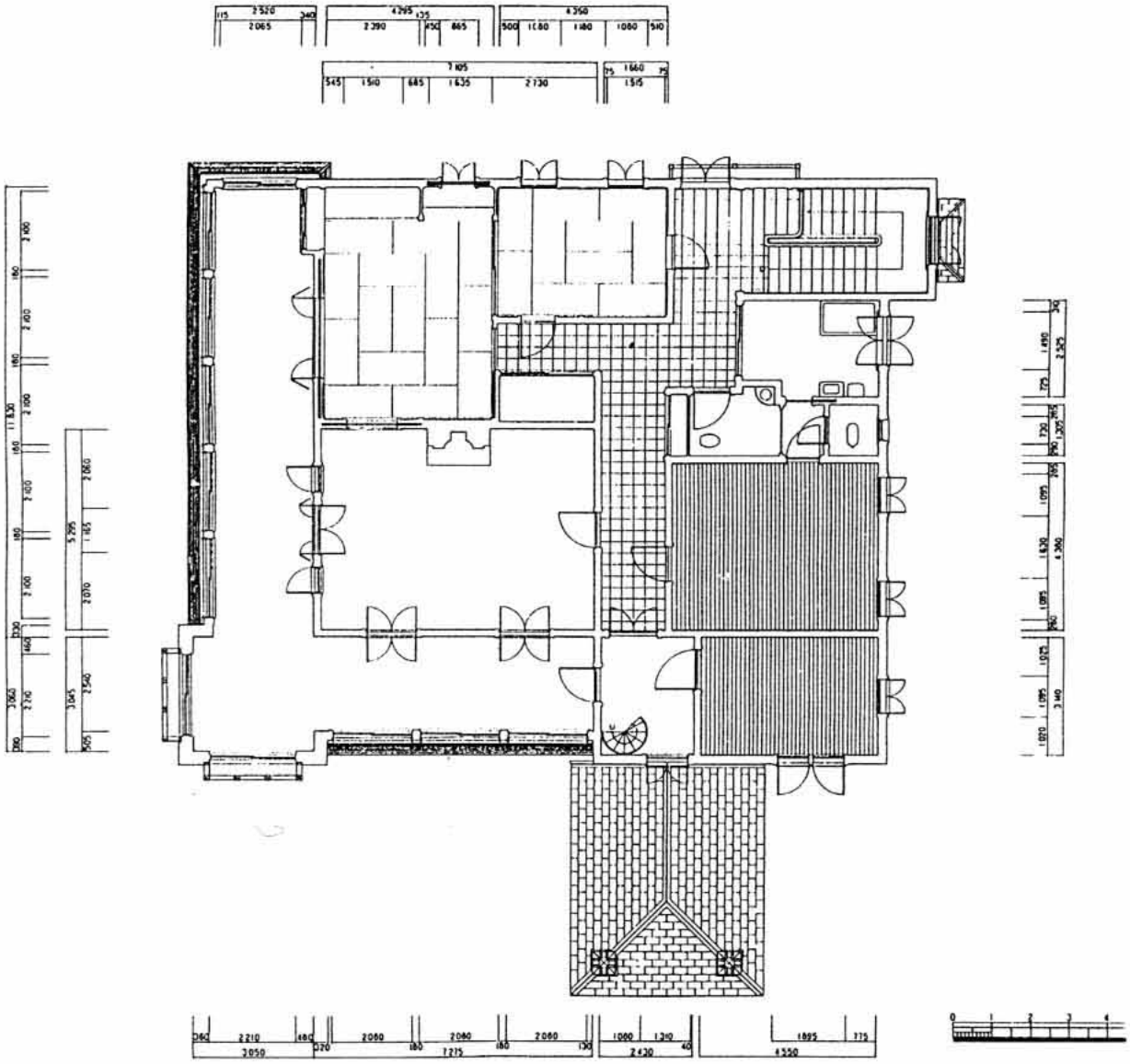
図－4　現状平面図（1階）



イエズス孝女会修道院旧館
1階平面図

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

図－5　現状平面図（2階）



イエズス孝女会修道院旧館
2階平面図

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

Ⅱ. 白系ロシア人と東アジアにおけるオーケストラ

1．白系露人とは？→１９１７年の革命を逃れて亡命したロシア人

［「赤色」革命に対して「白系」］

↓

＜シベリア鉄道～東清鉄道経由＞

↓

ハルビン、上海へ避難

↓

（日本、アメリカなどへ亡命）

2．“東洋のモスコー”ハルビン→1898　ロシアが中国領内に東清鉄道建設（1902開通）

↓

鉄道建設の拠点、ウラジオ方面と大連方面の分岐点

松花江沿いの純ロシア風の人工都市が『ハルビン』

↓

帝政ロシア全盛期の香りを伝える

ロシア正教会、ホテル、コンサートホール……

↓

『東洋の地でもっとも勝れたる楽団』東清鉄道交響楽団

3．白系露人がもたらした“ハイライフ”→食文化

（大正～昭和初期）　　→音楽文化

4．ハルビンから来日した音楽家→「日露交驩交響管弦楽演奏会」（大正１４年）

↓

エマニュエル・メッテル（指揮）→京大交響楽団

ヨゼフ・ケーニヒ（コンサートマスター）→新響

ニコライ・シフェルブラッド（同）→新響

↓

日本のオーケストラの基礎を築く

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

5．東アジアにおけるオーケストラの成立

［第一段階］植民地時代　　西洋民族の“ショーウィンド”として
［第二段階］日本進出期　　大東亜共栄圏の文化国策の一環として
［第三段階］1946～　　アジア解放後の各国を代表する存在として

1904（明治37）．2　日露戦争（～05.9）
1908（明治41）．4　ハルビンに東清鉄道交響楽団結成（中国）
ほぼ同時期　上海工部局管弦楽団結成
1914（大正 3）．7　第一次世界大戦（～18.11）
1917（大正 6）．3.10 ロシア革命
1925（大正14）．4　日露交驩交響管弦楽演奏会（日本）
1926（大正15）.10　新交響楽団結成、現・ＮＨＫ交響楽団の基礎が確立（日本）
1932（昭和７）．3　満洲国建国
1936（昭和11）．4　哈爾濱交響楽団再建（満洲国）
1937（昭和12）.12　新京交響楽団結成（満洲国）
1941（昭和16）.12　太平洋戦争（～45.8）
1942（昭和17）．6　上海交響楽団改組（中国）
1942（昭和17）．8　香港交響楽団結成（香港）
1942（昭和17）．8　新比律濱交響楽団結成（フィリピン）
1945（昭和20）．8　ポツダム宣言受諾

1946　ソウル交響楽団結成（韓国）←林元植
1949頃　朝鮮国立交響楽団（北朝鮮）←白高山
1950　中国中央楽団、中国鉄路文工団結成（中国）

6．ハルビンをはじめとする白系露人の再評価を

（岩野裕一）

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

Home Concert vol.2／94.11.27／世田谷代田　ｷﾞｬﾗﾘｰ 4GATS
伊藤恵（P）＆久保田　巧（V）　Concert

企画段階

◆開催目的／演奏者／開催日◆　研究会として７月３日に行ったコンサートは、明治期に別荘で行われたホームコンサートを検証するために行ったマーケティングコンサートであったが、今後、研究会が提案するホームコンサートは“身近な場所で、身近な距離から、音楽の楽しさを実感してもらえるようなコンサート”というコンセプトで行う。会場、演奏、形態等を固定化せずに、あらゆる形式のコンサートを試みてゆく。この研究会として行う提案型のコンサートの初回には、まず当研究会のメンバーでもあるピアニストの伊藤恵氏に演奏を依頼して行うことにしていた。そうしたところ伊藤氏より、それならばヴァイオリニストの久保田巧氏との共演で行いたい、という話があり、初回はヴァイオリンとピアノで親しみやすいプログラムにすることにした。

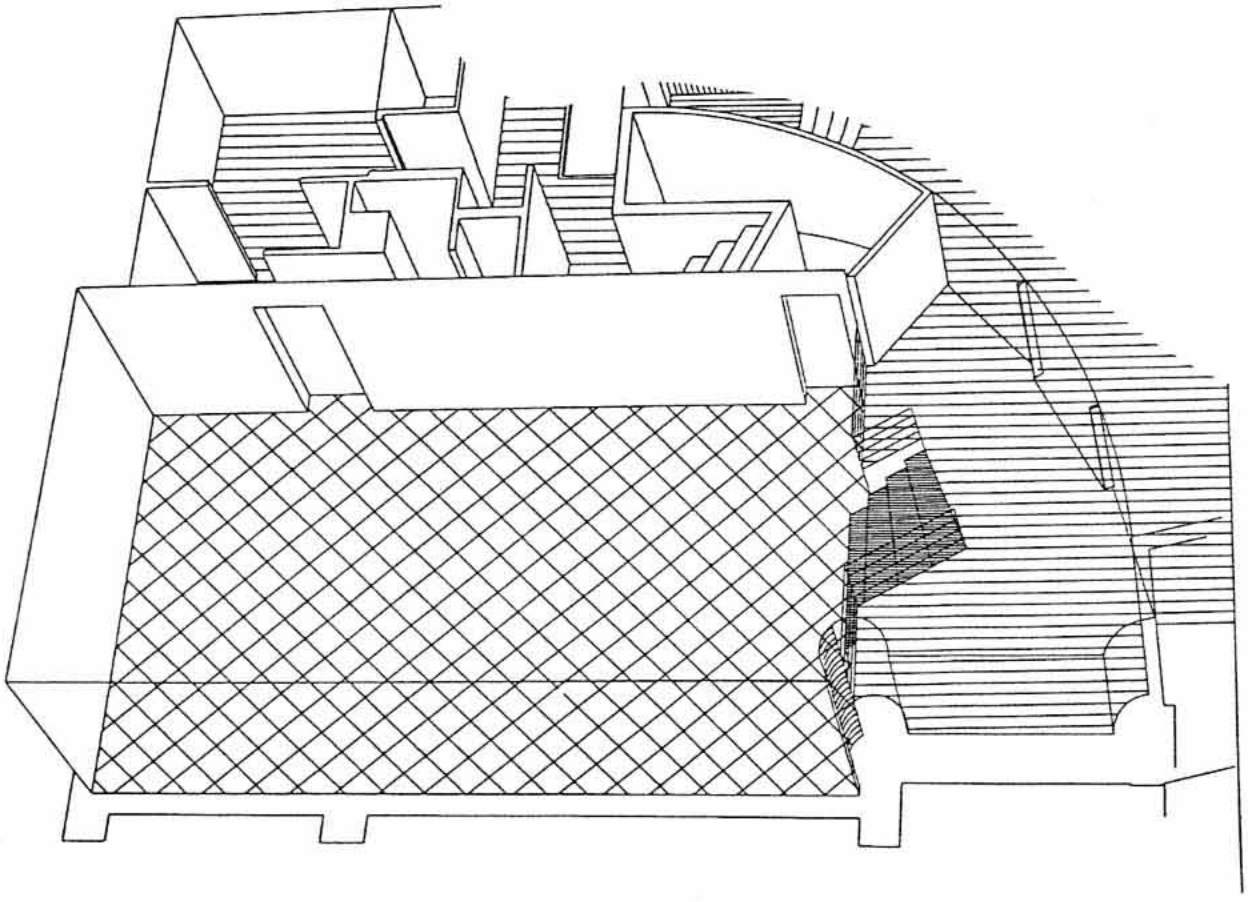
開催日時については、まず研究会の座長である岩渕氏がイギリスより帰国する８月以降で、準備期間も考慮した場合、早くても秋頃ということになり、その頃の伊藤恵氏および久保田巧氏のスケジュールから１１月２７日（日）に決定。

◆会場◆　研究会のメンバーの友人にあたる方で、以前から当研究会の活動に対しご理解いただいていたＨ氏より、渋谷に建築中であるＨ家の新邸を第一回目のコンサート会場候補との話がもちあがり、それならばとＨ邸での開催について検討を開始。実際コンサートを開催するにはＨ氏の奥様の了解も得ておかなければならないとして、９月３日に行った研究会にはＨ夫妻にも同席していただき、コンサートの企画内容について説明した。その際、新邸建築の進み具合や予想収容人数などを、Ｈ夫妻より聞く。また新邸にはピアノの備付けがないということから、ピアノについては業者から一日借りだすことにした。
こうしてＨ邸の完成を待って、１１月１７日にピアノの貸出を依頼したベーゼンドルファーの佐藤氏とともに会場の下見を行った。そうしたところ建物の構造上、室内へのピアノの搬入が極めて難しいということが判明。急遽、次回に予定していたホームコンサートの会場候補であったギャラリー４ＧＡＴＳのオーナーである植松氏に連絡。事情を話し、１１月１７日の使用についてもお願いをした。
このギャラリー4 ＧＡＴＳは、９５年４月に画廊としてオープンする予定の場所で、その４月のオープンまでの間ならば、いつでもコンサート会場として使って良いということになっており、オープン後も定期的に使わせていただく予定になっていた。
そこで急遽この日、１１月１７日の使用についての依頼と共に会場の下見。会場となる場所は一つの大きな直方体の空間になっており、天井がかなり高い造り。三方の壁面には、絵画などの作品が掛けて飾れるように、スチール板が張りめぐらされていた。奥行きは１０ｍ近くあるが、それに比べて左右の壁面どうしが近いため、音はかなり反響する。１２

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

月２５日に予定しているコーラス等には問題ないかもしれないが、次回１１月２７日の室内楽コンサートには、壁に吸音材になるようなものを下げておく必要があるだろうということになった。
楽屋には、今後事務室になるという奥の一部屋を使わせていただくことにした。となりには簡単な流し台の設備があり、簡単な飲食の準備も可能。また会場となる空間には倉庫があり、当日はここをクロークとして使うことにした。

―― 会場見取り図 ――



©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◆聴衆◆　会場の広さから約五十名前後の収容は可能と考え、今回も全員招待制にした。まずは会場提供者である植松氏の枠を十名分。そして当初会場を提供してもらうことになっていたH夫妻の招待枠を五名分。演奏者の二人の招待枠をそれぞれ二名分ずつ予定した後に、今回は今後コンサートの会場を提供して下さる予定の方々に、コンサートの雰囲気などを知っていただけるようにと優先的に招待することにした。それ以外には、知り合いの広報関係者やメンバー周辺の方々を招待ということになった。

準備段階

◆楽器の手配／演奏者への連絡◆　ピアノについては伊藤氏の紹介によって、今回はベーゼンドルファーから借りることになった。ベーゼンドルファー社の担当者である、佐藤さんには会場の下見に同行してもらい、ピアノのサイズについて適切なものを手配してもらうことができた。当日のスケジュールについては搬入、搬出の時間、そして調律にかかる時間を演奏開始時間から逆算する形で調整し、佐藤氏に了解を取った。

演奏者への連絡については、伊藤氏が研究会のメンバーであることから直接やりとりをすることができ、久保田氏へは伊藤氏から連絡してもらうことが多かった。

◆案内・当日プログラム等◆　今回は招待状のようなものは作らず、簡単な案内だけをつくることになっていたが、直前に会場が変更になるといった事情も重なり、チラシには案内文なども掲載せず、演奏者の名前と演奏曲目、日時、開始時間そして会場までの地図のみの簡単なお知らせを作成し、関係者に配布または郵送した。

◆会場準備◆

○キルト作品（吸音材）―― 会場内の三方の壁には、スチール製の板が張りめぐらされており、室内楽のコンサートを行う際は何か吸音材になる物が必要であるだろうということになった。まず考え出された案は、暗幕を借りてくること。もしくは卸問屋から布地を買ってきて、それを会場の壁に張りめぐらすといった方法だったが、いずれにしてもかなりの出費がかさむだろうと思われた。そうするうちに研究所の関係者であるS氏より、知り合いに大きなキルト作品を作っている人がいるので、その作品を借りて会場の壁に飾る、というのはどうだろうかという方法が提案された。早速そのキルト作品の借出しが可能かどうかについて尋ねてもらったところ、前もって三点の作品を貸してもらえることになったため、宅急便にて送ってもらう。

○会場イス・テーブル ―― コンサート時に客席として使用するための折りたたみ椅子、そしてティータイムの時、軽食を並べる用のテーブルと白布を業者より借りる。テーブルに関しては、クロークで台としても使用するため多めに手配。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

○花 —— 会場に飾る大きめの盛花を一つ、会場を提供して下さった植松氏への花束を一つずつ注文しておく。

○その他 —— ワイン、コーヒー紅茶類を準備するための器具類、おしぼり、会場内に置くゴミ箱、文具雑貨類、などは前もって準備し、前日までに宅急便にて会場へ送り届けておく。

◆飲食物・花◆ 人々の交流時間となるティータイムには、ケータリングサービスを利用してサンドイッチやカナッペのような軽い軽食を準備することにした。飲み物にはワインとコーヒー、紅茶などのソフトドリンクを研究会側で準備。

◆当日スケジュール・役割分担◆ 今回使用できる会場は、一つの大きな空間一箇所であることから、演奏の合間にティータイムをはさんだ場合、その空間を確保しておくための余裕がないということから途中のティータイムは不可能。このためティータイムは演奏が行われる前に設けることになった。そこでまず開場を１５時半に設定し、前後のスケジュールを組んでいった。片付けも、演奏中にかかった場合片付ける時の音が演奏の邪魔をする恐れがあるため、片付けも演奏前にすべて終了させ、テーブルなどを片づけたりイスを並べたりするのは演奏の直前にスタッフ全員で行うことにした。
役割分担については、今回のコンサートは７月に行ったコンサートとは異なり、招待客も少人数で、どなたもいずれかのメンバーと顔見知りであることから、特に係という形で仕事を細分化する必要はないだろうということになった。事前の準備に関しては事務局で行い、当日はメンバー全員で臨機応変に対応することとした。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

《 11/27　演奏会当日スケジュール 》

	＝ ｺﾝｻｰﾄ会場 ＝	＝＝ ｽﾀｯﾌ ＝＝
9:45		事務局会場入り
10:00	ピアノ搬入	（⇦　事務局が立ちあう）
	〃　調律	
12:30	演奏者会場入り	
	ピアノ調律終了	
	レンタル品搬入	
13:00	リハーサル開始	
14:00	ケータリング準備	スタッフ会場入り
		会場設営、飾付け
15:00	リハーサル終了	
		ティータイム準備
15:30	開場	
	ティータイム	
	演奏者　顔見せ（10min）	
16:20	片付け	会場作り
16:45	コンサート	
	1.	楽屋　片付け
	2.	
	休憩（10～15min）	
	コンサート	
	3.	
	4.	
	5.	
	6.	
	7.	
18:30	演奏終了	
		会場清掃
19:00	ピアノ搬出	
	レンタル品搬出	
	後片付け終了	
	完全退出	

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

コンサート当日

◆開場前準備◆　まず最初に事務局の立ち会いのもとグランドピアノが搬入され、すぐに調律が始まる。この間に演奏者の二人が到着。男性スタッフが数人集まったところで、借り出したキルト作品３点を会場の壁面に取り付ける。キルトを掛ける場所については、リハーサルをしている時、演奏者に相談しながら適切な場所に固定する。実際に、当初懸念していた反響音については、この３点のキルト作品によってかなり軽減された。
ケータリングサービスによる軽食の準備は店の人にある程度まかせ、飲物の準備、および会場の簡単なセッティングを行った。

【キルト作品①】

【キルト作品②】

【キルト作品③】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

◆開場◆　時間になり徐々に招待客が来場し始め、スタッフは適宜ホスト、ホステス役を務める。来場者の中には会場近隣の方々もいて、ティータイムはさまざまな人が集う和やかな雰囲気であった。ほぼ一通り飲物、食べ物が行き渡り終えた頃、コンサート開演のために折りたたみ椅子を並べ始め、会場作りを行う。コンサートは予定から２０分程遅れて、岩渕座長の挨拶で始まった。前半の演奏の後、１５分の休憩時間をはさんで後半の演奏、そしてアンコールと続いた。コンサート終了時には今回の会場を提供して下さった植松氏に対して、お礼の意味を込めて花束を贈呈。

【ティータイム】

【岩渕氏　挨拶】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

【伊藤恵＆久保田巧　演奏終了】

◆記録◆　①カメラ ―― 準備の段階から開場後、スタッフの提出まで一通り記録としてスナップ写真を撮影してもらった。但し、演奏中についてはフラッシュ、シャッター音が演奏の邪魔とならないように一切撮影しない。
②録音 ―― 演奏に関する記録として今回はＤＡＴ録音機を準備していたが、機械がうまく作動しないため、急遽、録音機能のあるラジオカセットを会場オーナーのＵ氏より借り、通常のカセットテープに録音。

―― 事　後 ――

◆反省点◆

・スケジュールのどこかに時間を作って、演奏者・会場提供者・招待客・研究員が、それぞれの立場でホームコンサートのある生活、ということについて意見を交換できたらよかったとおもう。

・やはり受付を設置して、来場者の把握をしておくべきだった。
プライベートな集まりに近いホームコンサートであったにもかかわらず、今回は知り合いの友達という方も多く、後日アンケートや写真を送付しようとした際、お名前・住所がわからないという状況が起きた。

◆アンケート◆　前回と同様にアンケート用紙を郵送し、返信用封筒にて返送してもらい回収。（質問内容は前回と同様）

［A．Z］
♯／楽しませていただき、ありがとうございました。今後もこの様な形のコンサートが

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

どんどん増えてほしいと思いました。

♭／出演されるアーティストの方々の生の声、たとえば選曲の動機、留学体験記、音楽に対する考え方、等々トークの時間が中間に少々あれば、ホームコンサートの良さがもっと盛りあがる様に思いました。

［N．A］

♯／たいへんアットホームな雰囲気でよかったと思います。構成も無理がなくゆったりと落ち着いていて。内容も私達が日頃耳なれている曲で、好きなものばかりでしたので堪能させていただきました。
音楽ホールでなく、画廊であれだけの音が聞かれれば良いのではないでしょうか。

♭／私のような音楽的知識の乏しい主婦も、気軽にお聞かせ願えるような場を与えていただければ、うれしく思っております。

［M．U］

♯／大変素晴らしい会でした。小じんまりしたアットホームな感じであり、演奏は本物、とても品位のある優雅な一時を過ごさせていただきました。日頃忙しい主婦も文化に飢えているのです。身近でこんな体験をさせていただいたこと感謝しております。
ありがとうございました。

1994年11月27日（日）
伊藤恵＆久保田巧　Concert
ｷﾞｬﾗﾘｰ　４ＧＡＴＳ　於

招待客	約３０名
演奏者	２名
カメラマン	１名
スタッフ	１１名
参加者　計	４４名

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

資　料 *****

【案内チラシ】

山の手研究会 Home Concert Vol. 2 のお知らせ

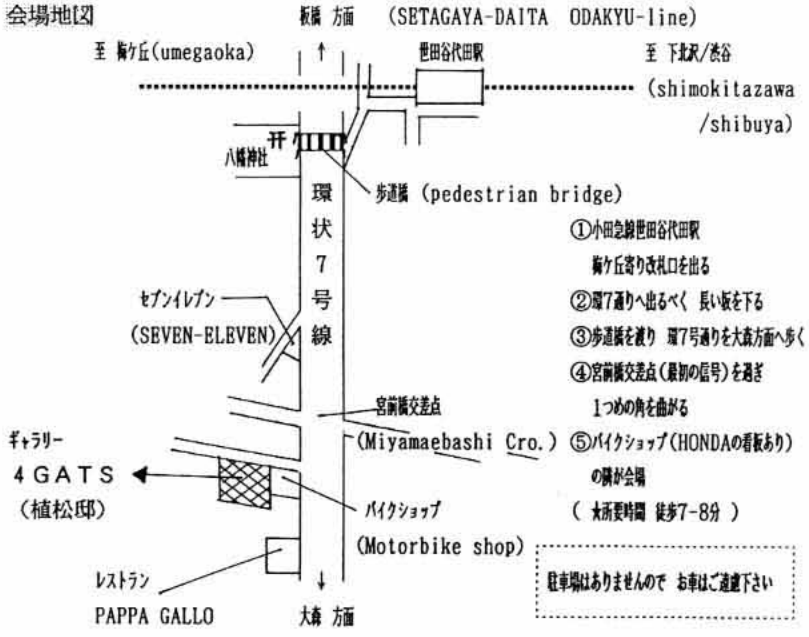
◆日時　１９９４年１１月２７日（日）
　　３：３０ｐｍ　～　TeaTime
　　４：３０ｐｍ　～　Concert　(6:30pm　終了予定)

◆場所　ｷﾞｬﾗﾘｰ　４ＧＡＴＳ　　世田谷区代田３－２５－１３
　　(ｸｱﾄﾛ ｶﾞｯﾂ)　　<TEL> 03-3421-7766（植松邸）

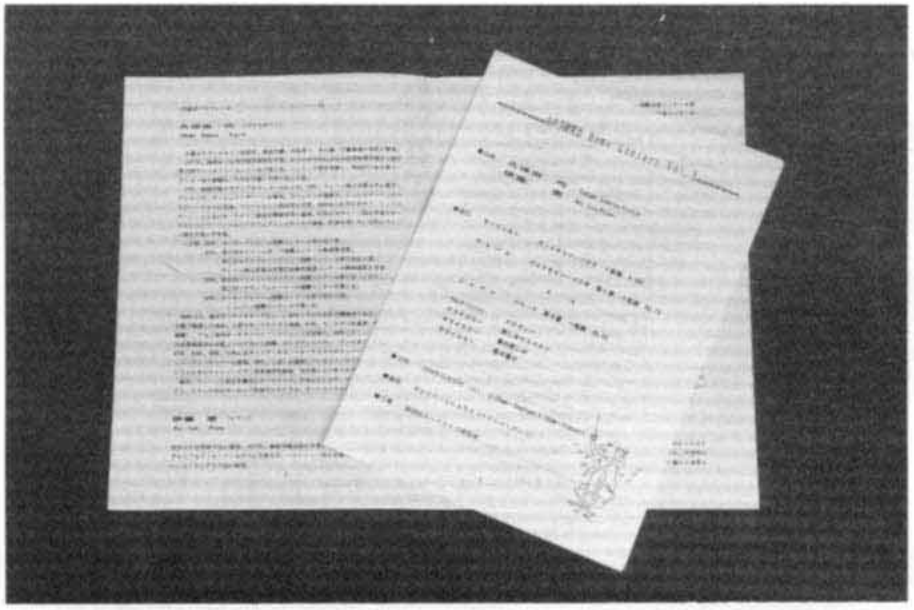
—Program—　伊藤 恵（ﾋﾟｱﾉ）＆ 久保田 巧（ﾊﾞｲｵﾘﾝ）

モーツァルト	ヴァイオリン・ソナタ　ト長調　K.301
フォーレ	ヴァイオリン・ソナタ　第１番　イ長調　Op.13
＊　＊　＊　＊　＊　＊	
ショパン	バラード　第４番　ヘ短調　Op.52
ｸﾞﾙｯｸ＝ｸﾗｲｽﾗｰ	メロディー
クライスラー	美しきロスマリン
クライスラー	愛の悲しみ
クライスラー	愛の喜び

会場地図



©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp



【当日プログラム】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

»»»»»»»»»»»»»山の手研究会 Home Concert Vol. 2»»»»»»»»»»»»

◆出演　久保田　巧　Takumi Kubota, Violin
　　伊藤　恵　Kei Ito, Piano

◆曲目　モーツァルト　ヴァイオリン・ソナタ　ト長調　K. 301

　　フォーレ　ヴァイオリン・ソナタ　第1番　イ長調　Op. 13

＊　＊

　　ショパン　バラード　第4番　ヘ短調　Op. 52

　　ｸﾞﾙｯｸ=ｸﾗｲｽﾗｰ　メロディー
　　クライスラー　美しきロスマリン
　　クライスラー　愛の悲しみ
　　クライスラー　愛の喜び

◆日時　1994年11月27日（日）　3:30pm～TeaTime, 4:30pm～Concert

◆場所　ギャラリー4GATS（クアトロ・ガッツ）

◆主催　財団法人ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

久保田　巧　（ヴァイオリン）
Takumi Kubota　Violin

４歳よりヴァイオリンを始め、福島幸雄、西島英子、外山滋、江藤俊哉の各氏に師事。

1977年、桐朋女子高等学校音楽科を卒業。在学中の76年には日本弦楽指導者協会主催の第４回ヴァイオリン・コンクールで第１位、シェリング賞を受賞し、第45回日本音楽コンクール（毎日新聞社・ＮＨＫ共催）で第２位に入賞。

77年、桐朋学園大学ディプロマ・コースに入学。78年、ウィーン国立音楽大学に留学しヴォルフガング・シュナイダーハンに師事。ルツェルン音楽祭で、シュナイダーハンのマスター・クラスに参加。フラーシャイム財団賞を受賞。80年から81年にかけて、シュナイダーハンとともにオーストリア放送交響楽団等と協演、81年にはウィーン国立音楽大オーケストラとウィーン・ムジークフェライン大ホールで協演、好評を博した。82年にウィーン国立音楽大学卒業。

この間、80年、カール・フレッシュ国際コンクール第６位入賞。

82年、第２回ルイ・シュポーア国際コンクール特別賞受賞。

第１回ロドリフォ・リピツァー国際コンクール第２位に入賞。

ウィーン国立音楽大学第27回海外派遣コンクール特別表彰を受賞。

83年、第２回フリッツ・クライスラー国際コンクール第２位（１位なし）。

第３回ミケランジェロ・アバド国際コンクール第１位。

84年、カール・フレッシュ国際コンクール第３位に入賞。

ミュンヘン国際コンクールで第１位。

84年12月、東京でリサイタル・デビュー。86年１月にＮＨＫ交響楽団と東京、名古屋、大阪で協演したほか、主要なオーケストラと協演。87年、マールボロ音楽祭へ参加（３年連続）。ケルン室内オーケストラのソリストとして北米旅行。88年２月ミュンヘン・フィル定期演奏会に出演（ベルグルント指揮、ストラヴィンスキー：ヴァイオリン協奏曲）。87年、89年、90年、91年にはサイトウ・キネン・オーケストラのメンバーとして、ヨーロッパ・アメリカツアーに参加。88年、しばしば協演しているピアノのアヴォ・クユムジャンらとともにウィーン・ピアノ四重奏団を結成、室内楽にも力を入れている。

現在、ウィーンと東京を拠点にオーストリア、日本はもとより、イタリア、スイス、ドイツ、フランスなどヨーロッパ各国でリサイタル、オーケストラとの協演を行っている。

伊藤　恵　（ピアノ）
Kei Itoh　Piano

幼少より有賀和子氏に師事。1977年、桐朋学園高校を卒業。

ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学、ハノーファー国立音楽大学において、名教師ハンス・ライグラフ氏に師事。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

79年、エピナール国際コンクール第１位。80年、Ｊ．Ｓ．バッハ国際音楽コンクール第２位、クルト・ライマー・コンクール第１位。81年、ロン＝ティボー国際音楽コンクール第３位及び特別賞と数々の国際コンクールに入賞している。

83年、第32回ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ部門で日本人として初の優勝。

ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮バイエルン国立歌劇場管弦楽団と協演、ミュンヘンでのデビューを飾る。

日本では、84年に「若い芽のコンサート」でＮＨＫ交響楽団と協演。大阪フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団のヨーロッパ公演に同行。ブラームス、シューマン、サン＝サーンスの協奏曲を演奏し、各地で絶賛を博した。その後も日本の主要なオーケストラと協演を重ねている。

録音においては、88年５月、デビューＣＤ「シューマニアーナＩ」（フォンテック）を皮切りに、以降もライフワークとして作曲家・シューマンを追いつづけ、これまでに「シューマニアーナＶ」まで発表。その他「ショパン：エチュード作品10、25」、「ブラームス：ピアノ協奏曲第１番」（朝比奈隆指揮／新日本フィル）、「ピアノ通信Ｉ」をリリース。いずれも高い評価を得ている。

90年秋の八ヶ岳高原音楽祭ではリヒテルのプロデュースするモーツァルトのソナタ全曲演奏会に出演。

93年２月、ミュンヘン・シンフォニカーとザルツブルク祝祭大劇場で共演。

同年、第19回日本ショパン協会賞受賞。

その年の10月、キタエンコ指揮フランクフルト放送交響楽団の定期公演に招かれ、また日本ツアーのソリストとして協演。

94年４月には、キタエンコ指揮ベルン交響楽団の定期公演に招かれ高く評価された。

知性と感性の見事なバランスに支えられた強靭なテクニックと構成力あふれる演奏は、正統派ピアニストとして国際的に高い評価を得ている。

プログラム・ノート――――――――――――――◎

秋も深まり、１年でいちばん忙しい時期を迎えるその前に、こうしてゆったりと音楽を楽しめるのは、それだけでも幸せなことだが、久保田巧さんと伊藤恵さんというお二人が演奏してくださるとは、ほんとうに夢のようなことである。音楽に余計な言葉は必要ないのだが、今日の曲目について、ほんの少しだけお付き合いのほどを……。

モーツァルト　　ヴァイオリン・ソナタ　ト長調　K.301

1777年の暮れから翌年にかけて、モーツァルトはマンハイムで、２楽章形式からなるささやかなヴァイオリン・ソナタを４曲書いた。ささやかな、とは言ったものの、内容的には充実したもので、青年モーツァルトの幸福な時代を感じさせる、明るさに満ちた楽想も

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

魅力。
第1楽章　アレグロ・コン・スピリト
第2楽章　アレグロ

フォーレ　　ヴァイオリン・ソナタ　第1番　イ長調　Op.13

フランス音楽の典雅な味わいと香り高さを感じさせてくれる作曲家といえば、フォーレの右に出るものはない。31歳だったフォーレが最初に取り組んだ室内楽作品が、この〈ヴァイオリン・ソナタ第1番〉。通常3楽章形式をとることの多いヴァイオリン・ソナタにあって、この曲は4楽章形式。構成感とメロディックな魅力を合わせ持つこのスタイル、そしてピアノが"伴奏"以上に活躍するあたりは、やがてフランクの名作にも引き継がれることになる。ヴァイオリンの奏でる美しい旋律だけでなく、心憎いピアノの和声進行にも耳を傾けてほしいものだ。
第1楽章　　アレグロ・モルト
第2楽章　　アンダンテ
第3楽章　　アレグロ・ヴィーヴォ
第4楽章　　アレグロ・クワジ・プレスト

ショパン　　バラード　第4番　ヘ短調　Op.52

ピアノだけで演奏されるこの曲は、ショパンの最高傑作、とも称される作品。恵さんも、同じ考えだろうか。
「この素晴らしいバラードについて、私は本が1冊書ける。これはもっとも瞑想的でしかも情緒が充満しているときのショパンである。自己陶酔と圧迫された感情――ほんとうにスラヴ風だ、このはみかみは！――そしてショパンにとってさえ珍しいリリシズム、熱情に溢れたリリシズムが曲の基調である」（音楽学者、ハネカーの言葉）

ｸﾞﾙｯｸ=ｸﾗｲｽﾗｰ　　メロディー
クライスラー　　美しきロスマリン
クライスラー　　愛の悲しみ
クライスラー　　愛の喜び

ウィーン情緒たっぷりのクライスラーの小品は、こうしたホーム・コンサートに相応しい。クライスラー自身がヴァイオリンの名手でもあり、ヴァイオリンを美しく、楽しく聞かせる術を知っていたからこそ、こうした珠玉の作品――しかも、琴線に触れる色気を伴った――は、多くのヴァイオリニストに弾き継がれてきたのだろう。ウィーンで暮らす久保田さんによる、本場の"味付け"も楽しみだ。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

Home Concert vol.3／94.12.25／世田谷代田 ｷﾞｬﾗﾘｰ 4GATS
メサイヤ＆クリスマスキャロルを歌おう　Concert

企画段階

◆開始目的・会場・開催日◆　研究会では、コンサートの形態として通常のコンサートのように演奏者を呼んで人々は聴衆となって演奏を聴く、という受身型のコンサートだけではなく、自らも参加することによって楽しめるコンサートを行おうと考えていた。以前から研究会の代表者である岩渕氏の提案で、クリスマスには是非、みんなでメサイヤとクリスマスキャロルを歌おうという話が持ち上がり、これを参加型コンサートの一つとして行おうとなり、急遽準備に取りかかった。
会場については、研究会の代表者である岩渕氏の関係で、当初から世田谷にオープン予定であったギャラリー４ＧＡＴＳを予定。図らずも急遽、１１月のコンサートの会場となったが、連続して今回の使用もお願いした。
開催日は、やはりできればクリスマスである１２月２５日に行いたい。会場のオーナーであるＵ氏の了解が取れ、２５日で決定した。

◆指揮者・演奏者◆　指揮者については、都内で民間の合唱グループに参加している方から、そのグループの指揮を行っているという窪田氏を紹介してもらい、窪田氏には研究会の活動とこれまでの経緯、今回のコンサートの意図を説明し、当日の指揮を依頼した。
伴奏については、メンバーの紹介によってピアノ及びエレクトーンの奏者である海津氏に依頼。通常メサイヤは、オーケストラでの演奏が多いが、今回はそれをエレクトーンの様々な音色を使って、全てエレクトーン一台で行うことにした。また、今回のソプラノ、アルト、テノール、バス各４パートそれぞれに練習用テープを作成してもらい、参加者が各自練習できるようにした。

準備段階

◆プログラム◆　前述の通り、今回はメサイヤとクリスマスキャロルをみんなで歌うということが目的であったが、それぞれ合唱としてある程度親しみやすい曲を選び、メサイヤは４曲、クリスマスキャロルは１７曲を歌うことにした。

◆参加者・案内◆　参加者については、メンバーを通じて幅広く希望者を募る、という方法を取り、最低各パート十名前後、集めることを目標にした。参加予定者には楽譜と各パートの練習用テープを配付。参加者はこれをもとに各自で練習をするだけで、当日前のパート練習や全員合わせての予行練習は一切行わなかった。これとともに、日時と会場地図を載せた簡単な案内チラシを配付。当日は、各自何か一品ずつの持寄りをしてもらえるよ

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

う、そこには簡単な注意書きを添えた。　（＊資料参照）

◆会場準備◆　○花 —— 会場は前回１１月２７日に使用した際、構造、備品等は確認できていたため事前準備には、ほとんど時間がかからなかった。また、会場内の飾りつけについては、今回はプログラムからして吸音材のようなものは必要がないと考えた。また当日はおそらく参加者全員で会場内が一杯になってしまうだろうと予測されたため、会場内の飾りつけについては、入口付近にポインセチアの鉢を並べるだけにした。

○イス、机、ハンガー類 —— イスや机などについては前回と同様にレンタル業者から借りることにした。また今回は、季節柄コート類を着て来場される方が多いのではないかと予想されたため、クローク用にレンタル業者からハンガー類を一式借りた。

◆飲食物◆　—— 今回は参加者全員に、一品ずつ何か持寄りということをお願いしていたため、取り皿、ハシ、紙ナプキンなどを用意、あとは飲物を前回と同様に準備した。

◆当日スケジュール・役割分担◆

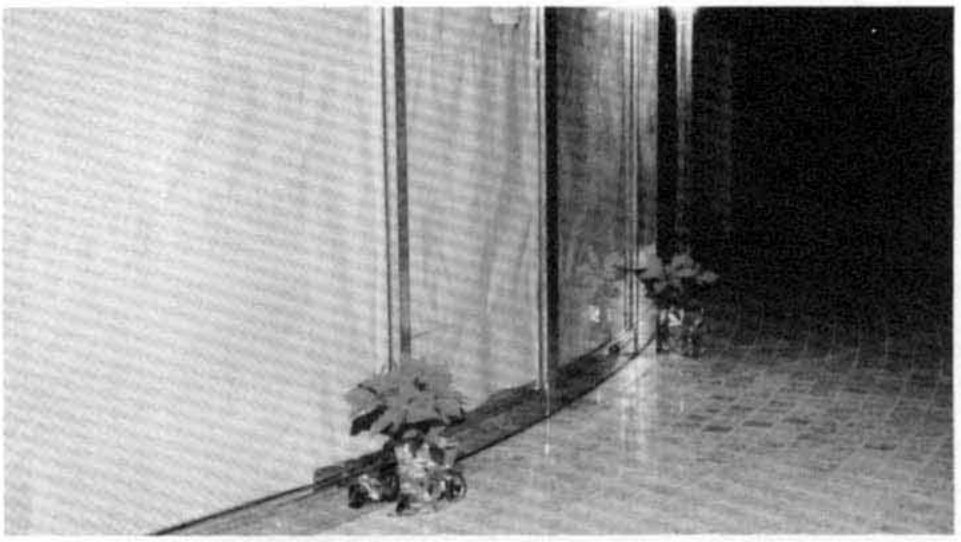
《１１月２５日演奏会当日スケジュール》

	コンサート会場	スタッフ
10:00		スタッフ会場入り
10:30	レンタル品搬入	エレクトーン奏者　〃
11:00	エレクトーン搬入	会場準備
	〃　調整	指揮者会場入り
12:00		打合せ・昼食
13:00	開場／合同練習	クローク対応
14:00		
15:00	コンサート	
16:00	立食パーティー	持寄り品・飲物のセッティング
17:00		
17:30	終了 エレクトーン搬出 レンタル品搬出	片付け
19:00	後片付け終了・完全退出	

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

◆記録◆　①カメラ ―― スナップ写真を、準備、合同練習、本番、立食パーティと一日を通じて撮影。
②録音 ―― 通常の録音機で合同練習の部分と本番部分の合唱を記録として録音。

―― コンサート当日 ――



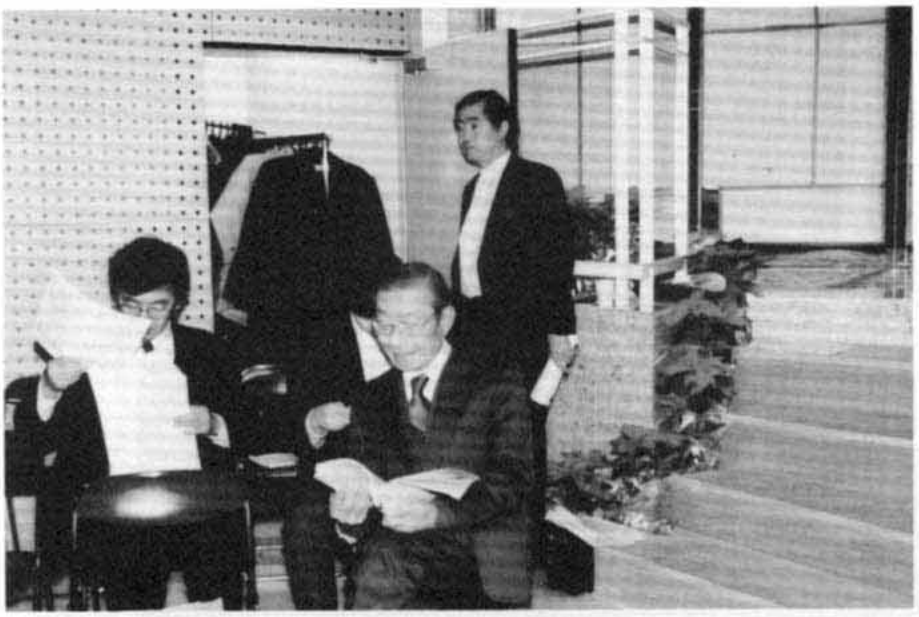
【会場外　ポインセチア】

◆開場前◆　会場にはまず最初にエレクトーンが搬入され、演奏者である海津さんに調整してもらう。レンタル品及び花が運びこまれ、会場でそれぞれ準備する。イスは会場半分に指揮者、エレクトーンと向かいあうような形で並べた。指揮者と伴奏者は当日が初顔合わせであり、簡単な打合せを兼ねてスタッフとともに昼食。

◆開場◆　参加者の方が少しずつ来場し始め、ほぼ時間通りに合同練習を開始。リハーサルと称した練習時間を午後１時から３時と案内したためか、人々の集まり方はまちまちであった。この日の進行はある程度、指揮者の方にまかせたため、前半は丁寧な発声練習で終わり、１５分程度の休憩をはさんで実際に合唱部分の練習を行った。予定では合同練習と本番はいったん区切る形にする予定であったが、予想以上に練習時間が取られ、結局練習はメサイヤだけにとどまり、残り時間もわずかであったため、最後に一回だけ“本番”と称して通しで歌った。

それからは、それぞれが持寄った食べ物を会場中央に設けたテーブルに適当に並べ、立食パーティとなった。パーティーの最中しばらくして、せっかくだからということでクリスマスキャロルを一通りみんなで歌い、コンサートは終了した。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp



【会場　入口内】

【会場内　クローク】

【発声練習】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

【メサイヤ合唱】

【持寄りパーティ①】

【持寄りパーティ②】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

【持寄りパーティ③】

【クリスマスキャロル
合唱①】

【クリスマスキャロル
合唱②】

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

事　後

◆反省点◆

・メサイヤ＆キャロルを歌うには、スペース・時間ともコンパクトすぎた感があった。

・忙しい時期ではあったが、事前に練習日を取りたかった。

・メサイヤの曲数を少なくして、ある程度仕上げたらという実感を得たかった。ポピュラーなキャロルの数を増やしてもよかったと思う。

・会場内のイスが足りなかった。
合唱の時は立ったままで、パーティも立食形式になるので、イスはそれほど必要ないであろうと思われたため、予定人数より若干少ない数のイスを借りた。
ところが実際は、練習時間が予想以上に長くなり、発声に関する丁寧な講義やそれぞれパート別の練習の際に、イスが必要となった。
結局スタッフやスタッフ周辺の者が会場内の階段部分に座ったり、ダンボール箱を代用するとになってしまった。

・クローク札の準備をしておく必要があった。
今回は１１月の時と異なりコート類を着て来場する人が多かったため、クロークで預かる品数が多かった。また、それらには似たようなものが多く、番号札のようなものをつけておかなければ返却の時に持ち主がわからなくなる恐れがあった。今回はそのための準備をしていなかったため、急遽、手書きの札をつくり対応することになった。

◆アンケート◆　アンケート調査については、継続的な調査になるよう前回と同じ内容の項目を設定し、返送してもらった。（質問内容は前回と同様）

［K．M］

♯／思いがけず参加させて頂き、本当に楽しく過ごさせて頂きました。本当に音楽を愛する方々が、こうしてしっかりと準備をされ、集うことは、そうめったにある事ではありません。さまざまな方々とも交流が出来、さらに輪が広がって将来が楽しみです。
今回は歌いたい方が（中には声楽の先生も）大勢いらっしゃいましたので、（発声の講座が長過ぎましたネ）もっともっとたくさん歌を歌い、声楽家のプロの方のソロも聴きたかった、と思いました。それにしても、準備の方は「完ぺき」でしたネ。本当に頭の下がる思いがしました。ありがとうございました。

♭／場所と広さが、今一つ便利な所に見つかるといいですネ。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

［M．N］

♯／行く前は不安でしたが、当日はとても楽しかったです。

♭／歌う時間はもう少し長くてもよいのではと思います。
やっぱりだんだんと歌えるようになった気がしますので、もうちょっとやればもっとうまく歌えたかもしれない、と思っているんですが。

［K．H］

♯／大変楽しく気持ちよく参加させていただきました。合唱の指導の先生も“その気”にさせて下さり、皆の力以上の演奏となったと思います。もっともっと、歌いたかった気がしますが…。スタッフの方々、細かいご配慮ありがとうございました。

♭／言葉の事、パート練習のために、前に１回練習があれば…と思いますが、ぜいたくな事ですかしら。

［K．A］

♯／・もっと歌いたかった。
・ダイナミックなエレクトーン伴奏がとてもよかった。
・手づくりのお料理もたくさん持ち寄られ、楽しい語らいもあって、いい雰囲気が会場にあふれんばかりでしたネ。
・メサイヤとクリスマスキャロルを歌おう会としてパートテープを作って頂き、ご苦労と熱意を感じ入りました。当日歌える方々が多かったので講義を半分に、指揮者にはどんーと声高らかにと、指揮に専念して欲しかった。

♭／クリスマスキャロルの、特に有名な曲はそれなりに歌えますが、言葉の問題は…？
今年も又、楽しみに歌わせて頂けるよう期待してますので、頑張って企画よろしくお願い致します。

1994年12月25日（日）
メサイヤ＆クリスマスキャロルを歌う　Concert
ｷｬﾗﾘｰ　４ＧＡＴＳ　於

参加者	３０名
指揮者	１名
ｴﾚｸﾄｰﾝ伴奏者	１名
ｶﾒﾗﾏﾝ	１名
スタッフ	１３名
計	４６名

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

資　料 ＊＊＊＊＊

【案内チラシ】

山の手研究会 Home Concert vol.3 のお知らせ

◆日時　１９９４年１２月２５日（日）
　１：００ｐｍ　～　集合・リハーサル
　３：００ｐｍ　～　コンサート

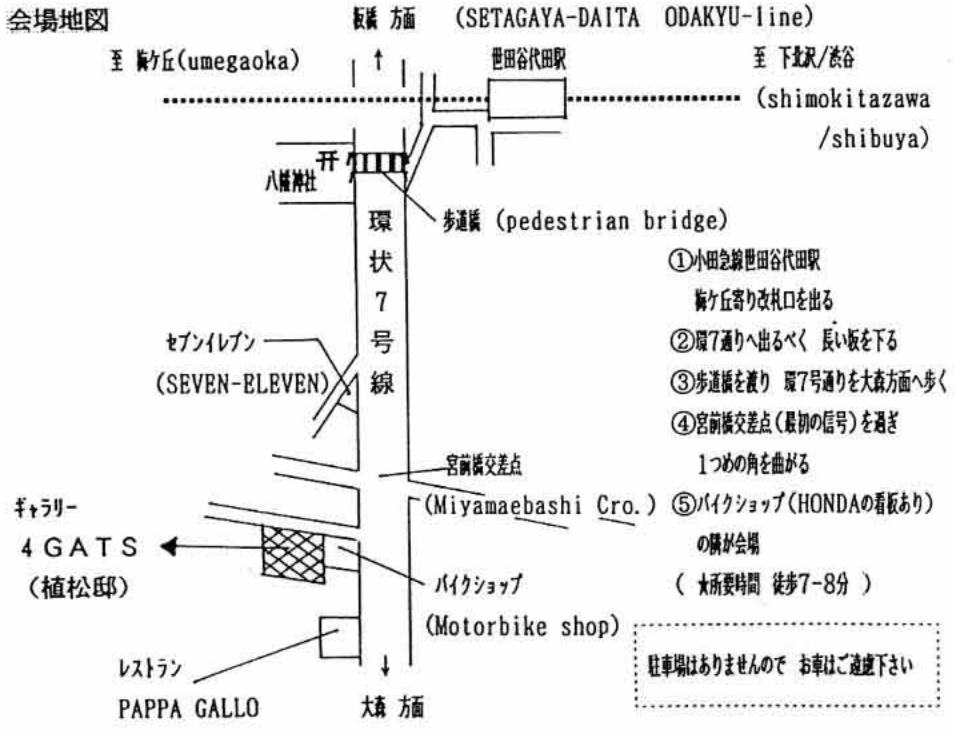
◆会場　ｷﾞｬﾗﾘｰ ４ＧＡＴＳ　世田谷区代田３－２５－１３
　（ｸｱﾄﾛ ｶﾞｯﾂ）　<TEL> 03-3421-7766（植松邸）

★当日は皆様それぞれ、手で食べられるものを何か一品ずつ、
お持ち寄り下さい。（お一人様、４～５名分で結構です）

―Theme―

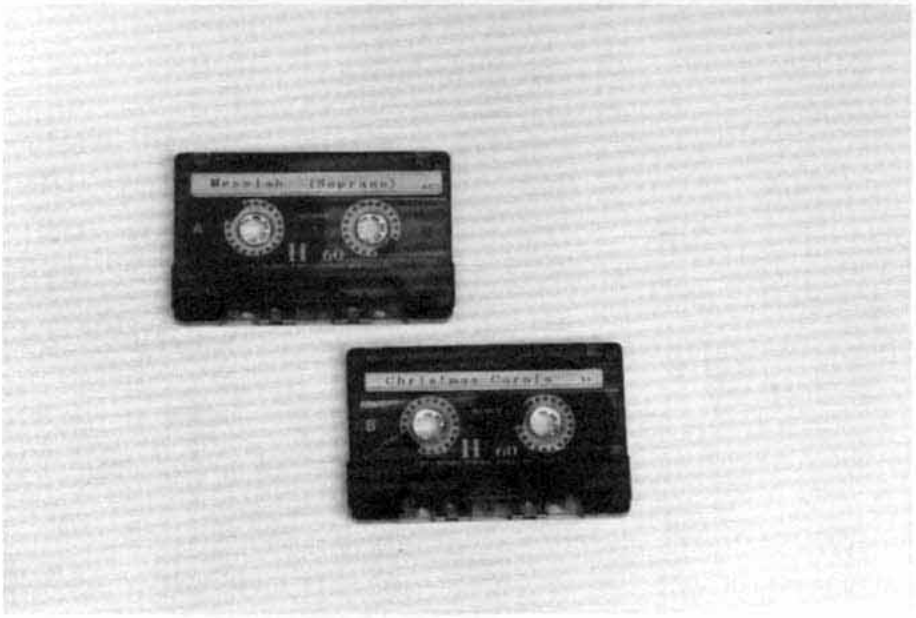
メサイヤ & クリスマスキャロル を みんなで歌おう！

会場地図

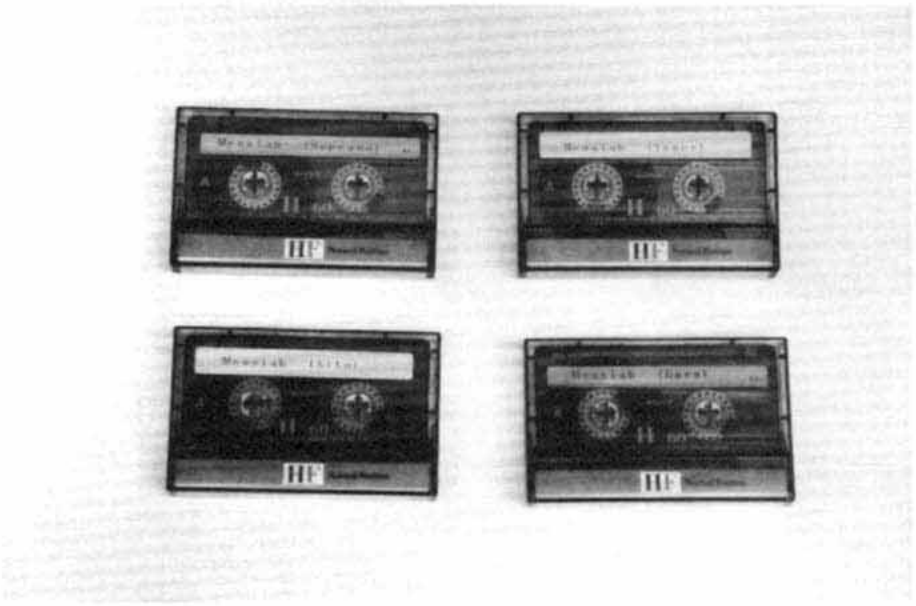


©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

【参加者用配布物】



【練習用カセットテープ
（表・裏）】



【練習用カセットテープ
（各パート）】

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

94年度 活動記録

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

● 会議
○ フィールドワーク
■ 研究会主催　ホームコンサート

●第１回会議 ―――――――――――――――― 1993年12月28日
（ホームコンサート研究）　横浜
　○大磯町の音楽に関する状況報告
　○これからの活動内容について

●第２回会議 ―――――――――――――――― 1994年１月28日
読売広告社別館
　○研究会の方向性について
　○“山の手”に関する自由討論

○湘南学友会　森事務局長へのヒアリング ―――――――― ２月８日
大磯
　○湘南学友会のこれまでの活動について
　○大磯周辺の事前視察

○ＡＴＭアンサンブルコンサート ―――――――――――― ２月14日
水戸芸術館

●第３回会議 ―――――――――――――――― ２月15日
水戸
　○大磯町周辺におけるホームコンサート開催の可能性について
　○今後の活動内容の検討

○吉武邸ヒアリング調査 ―――――――――――――― ３月10日
東五反田　吉武邸
　○吉武邸におけるホームコンサートの実状について

○旧東伏見宮別邸視察 ―――――――――――――― ４月13日
葉山
　○7/3 のコンサート会場視察
　　収容人数、会場内のつくり、使用可能な施設　etc.

●第４回会議 ―――――――――――――――― ５月24日
読売広告社別館
　○旧東伏見宮別邸におけるコンサートについて
　○山の手経験者からのヒアリング調査について

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

○7/3 コンサートの打合せ ―――――――――――――――― 6月27日
読売広告社別館

＜確認事項＞ 当日スケジュール調整　係分担
プログラム＆資料　招待客リスト
アンケートの方法

○伊藤恵ピアノリサイタル ―――――――――――――――― 7月2日
御茶の水　カザルスホール

■＜Home Concert vol.1＞ ―――――――――――――――― 7月3日
吉武由子＆トリオ・ソリスツ・ウラジオストク コンサート　葉山
旧東伏見宮別邸

○吉武由子リサイタル ―――――――――――――――― 7月31日
御茶の水　カザルスホール

●第5回会議 ―――――――――――――――― 9月4日
軽井沢

○11月27日コンサート開催にむけて
○今後の活動方針について

○ＪＣＰＷ公演 ―――――――――――――――― 10月 7.8.9日
天王州アイル　アートスフィア

○11月27日コンサートの打合せ ―――――――――――――――― 10月24日
読売広告社本館

■＜Home Concert vol.2＞ 伊藤恵 ＆ 久保田巧　コンサート ―――― 11月27日
世田谷
4ＧＡＴＳ

○12月25日のコンサートの打合せ ―――――――――――――――― 12月12日
横浜

■＜Home Concert vol.3＞ ―――――――――――――――― 12月25日
“メサイヤ＆クリスマスキャロル”をみんなで歌おうコンサート　世田谷
4ＧＡＴＳ

●第6回会議 ―――――――――――――――― 1995年2月23日
読売広告社別館

○毛利恭三氏ヒアリング
（コントラバス奏者：ビューティフル・サウンド・コーナー主宰）

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

研究会 議事録

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

第１回会議

日　時　／　1993年12月28日（火）　18:00 ～
場　所　／　横浜
出席者　／　岩渕潤子　伊藤恵　犬飼素子　岩野裕一
松岡温彦　水野統夫　米村洋一

■　今後の活動内容について

①財団法人ハイライフ研究所の研究プロジェクト、『山の手文化研究』のうち、ホームコンサート開催メソッドの実践に関する研究グループの名称を“ホームコンサート研究（分科）会”とする

②研究会主催ホームコンサートの実施予定
時期　／　94年秋以降　（９月～12月上旬）
回数　／　メインコンサート　３回
（できれば若手演奏家のコンサートを４～５回行いたい）

③大磯町の音楽愛好団体である“湘南楽友会”によって行われている活動について、調査、ヒアリングを行う。

“湘南学友会”について
90年の湘南地区イベント『ＳＵＲＦ90』の一環として、サロンコンサートを開催。数回の公演に計1000名を募集したところ、人口１万数千人の町にもかかわらず2000通以上の応募があった。これに勢いを得て、町とＮＴＴが資金を提供、町民がボランティアスタッフとなり、『湘南楽友会』を結成。以後サロンコンサートを開催している。
演奏会場としては、主に町立民族資料館集会室（ 100名程度収容可能）を利用する。ピアノを常備せず演奏会ごとにベーゼンドルファー社から借用。
入場料は通常2500円。途中45～50分の休憩をはさみ、茶菓をサービス。終演後は演奏家も参加しても立食パーティーを町内のレストラン（会費別）にて開催。
93年にはプロによる本公演のほか、国府小オーケストラとの合同リハーサルや、大磯プリンスホテルのバンケットホールでの特別公演も行い、町民との交流を深めた。こうしたユニークな音楽活動は演奏家にも好評で、ヨーロッパの演奏家にも口コミで広がりつつある。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

■　ホームコンサートを取りまく現状について

○演奏家にとって通常のコンサートは、聴衆から拍手を受けるだけで、それ以外の接点がない。サロンコンサートはその対極にあるもので、聴衆は少なくても終演後、語り合えるということは大きな喜びである。また、聴衆者同志もコンサートの後に語り合える場があるのはうれしいことで、ホームコンサートの楽しみは、“人間関係を築くこと”にあるといえる。欧米では、コンサートの後の“溜まり場”となる場所があるが、日本では、帰宅事情などから劇場周辺の“門前町”が生まれてこなかった。

○若い演奏家は発表の機会を求めている。横浜・サンハート（旭区）で行った市民オーディションには、 150組の応募が殺到した。そういう人に演奏の場を与えることも有意義ではないか。

○日本人は「自分たちの力で何かを変えられる」と思っていない。その意味でサロンコンサートの実現は単に音楽の問題ではなく、市民の力を試す機会とも考えられる。

○“ハイライフ”とは、経済の面だけではなく、個人にとっての充実を意味するものであり、横一線にならんで、消費することで喜びを得る時代は終わったと考えられる。
戦後日本は、貧しい人が豊かになるのではなく、豊かな人が貧しくなって平準化した社会だった。この構造のなかで、『山の手文化』は散逸の危機にあると同時に、日本からは何事も“超一流”が生まれない一因となっている。このような中で“ハイライフ”とは、個人の選択であると同時に、公共の選択の問題でもある。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

第２回会議

日　時　／　1994年 1月28日（金）　18:30 ～
場　所　／　銀座
出席者　／　岩渕潤子　犬飼素子　岩野裕一　鈴木伸子
松岡温彦　水野統夫　米村洋一

■　山の手研究の方向性について

“山の手”の研究をしようとすると、カバーしなければならない領域は非常に広い。そこで“音楽”という切り口で、山の手のスタイルを研究していくのも一案であろう。
研究会としては、“山の手”という時につきまとう物質的な側面だけではなく、精神的な役割について考察してゆきたい。その際には“山の手”育ちの方を呼んで、実際の生活についてヒアリングをしてゆく。

■　山の手に関するこれまでの研究について

これまでに“下町”に関する記事は多く取り上げられているが、“山の手”が雑誌等にまとまって取り上げられることはなかったといえる。戦前の上流社会の話が二三、山の手関係のものとして、取り上げられたことはあっても、それらが連載されることはなく、いつも立ち消えてしまう。つまり“山の手”について断片的な記録はあっても、それが系統的にまとめられたことはないといってよい。

■　山の手文化の継承、および価値観について

旧山の手イメージのある鎌倉について考えてみても、昔は川端康成に象徴される文化人が多く住んでいたが、現在、鎌倉を象徴するような著名人はいなくなっている。また昔から鎌倉に住んでいた人達も、総入替えされてきており元々の住民はほとんどいない。現在、鎌倉にある文化を守ろうとしているのは、むしろ新興住民の人達である。

また昔の軽井沢では、どのような人に会っても会話ができるようなサロン的な人間関係がしっかりと形勢されていて、話をする状況が多かった。
会話ができるというのは山の手、下町にかかわらず昔はあったが、このような文化は高度経済成長期の社会になったとたん、なくなってしまったのではないだろうか。
日本の場合、都市の住宅制度そのものが、何世代も続けてその土地に住めないようになっている。住宅地を自由に選べなくなってしまったため、経済的には同じでも、文化的な趣味趣向が異なる人達が隣同志に住むようになり、互いに会話もできないという状況が現在であろう。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

本来ならそれぞれが異なった価値、文化基盤を持っていたはずであったにもかかわらず、皆“平等”になってしまったために、自分がどのようなライフスタイルを望んでいるのかもわからなくなってしまった。それゆえに雑誌等に見るものを鵜呑みにしてしまう傾向がある。

■ 山の手地域考

現在の東京における“山の手”の不動産的定義は

第一山の手 ―――― 谷中、本郷、雑司ガ谷
第二山の手 ―――― 目白、戸田、四谷、青山
第三山の手 ―――― 世田谷、田園調布、池並
第四山の手 ―――― 多摩プラーザ、青葉台

とされるが、“山の手”のイメージは第二、第三山の手あたりが標準となっている。

■ ホームコンサートについて

当初の発想からすると、場所はあくまでも一般家庭内でということであったが、現在の日本の住宅事情からすると、ある程度は公共の場の利用も考える必要がある。ならば、一般家庭で行うものと、郷土資料館のような場所でのものと二種類のプログラムを考えてみる必要もあろう。プログラムの内容は、10～15分位のものを三曲位、間に10分位の休憩時間を設けようなもので企画する。中には、若手演奏家の発表の機会となるようなものも行い若手を育てていけるような活動にしたい。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

第3回会議

日　時　／　1994年 2月15日（火） 9:30 ～
場　所　／　水戸
出席者　／　岩渕潤子　伊藤恵　犬飼素子　岩野裕一
松岡温彦　水野統夫　米村洋一

■　大磯町周辺におけるホームコンサート開催の可能性について

湘南学友会の理事である森氏との事前打合せより。現在、湘南楽友会では郷土資料館のホールで定期的にコンサートを行っている。大磯には、音楽好きな方でホームコンサートの場を提供してくれそうな人もいるので、大磯周辺の個人宅、別荘でのホームコンサートも可能だろう。また、もと三井家の別荘であった（現さくら銀行寮）明治期に建てられたと思われる洋館での開催についても交渉してみる。

■　ホームコンサートの方向性について

日本では，家庭内で音楽を楽しむための芽は育っているにもかかわらず（子供の音楽教育やピアノの普及率などからみて）、その状況は拡がっていかない。それが、なぜなのかを把握しておく必要がある。
ホームコンサートのプログラムとしては、いろいろな楽器の組み合わせを楽しむようなものを考えたい。カルテットや室内楽の楽しさは、実際に体験してみないとわからない。そこで例えば、既にピアノのある家へヴァイオリンを持ち込んだり、意外性のある楽器でのアンサンブルを考えてみる。そうしたことから、家を“会場”としたコンサートがより身近になり、その楽しさや精神的なゆとりを生みだす“会場”をもっと広くしたい、という発想に発展していくのではないだろうか。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

第４回会議

日　時　／　1994年 5月24日（火）　18:30 ～
場　所　／　銀座
出席者　／　犬飼素子　岩野裕一　鈴木伸子　松岡温彦
水野統夫　米村洋一

■　旧東伏見宮別邸におけるホームコンサートの開催に関して

１）コンサート開催に関するそれまでの経緯

当初会場候補には、大磯にある現さくら銀行寮（元三井家別荘）をあげていたが、その使用は不可能となったため、これに代わる場所を検討していた。
４月13日、葉山にある旧東伏見宮別邸を視察した結果、建築学的にも価値があり、コンサートを行うには申し分のない建物であった。現在、ここの管理者であるイエズス孝女会修道院へ研究会の主旨を説明し、７月３日の開催が決定した。
演奏者については、吉武由子氏（ｿﾌﾟﾗﾉ歌手）が、ここ数年間、毎年トリオ・ソリスツ・ウラジオストクとのコンサートを日本とウラジオストクで交互に開催しており、今年は日本で７月上旬に開催予定であった。その公演の合間の一日で演奏会をお願いする。

２）コンサートの位置付け

今回は、戦前の日本において、特定の階級層の人々によって行われていた、西洋館におけるサロンコンサートの再現及び、検証コンサートとして行う。今後、提案型のホームコンサートは、秋以降に企画する。そこで、プログラムには、現在では消え去ろうとしている“西洋館”に関する建築学的見地からのレクチャーと、白系ロシア人と東アジア（日本）のオーケストラに関するレクチャーの時間を設ける。

■　“山の手”に関する聞き取り調査について

毎年、山の手における生活に関して、数人の方を研究会に招き、直接話を聞くという形で調査を行う。おそらく、“山の手”の生活といっても、実際には様々な形のものが行われていたはずであり、それらは決して一律ではなかったのではないだろうか。
その中には実際にホームコンサートを行っていたという人もいるだろうし、そのような人から話が聞けるというのが望ましいが、それに似た会を催していた人、そのような会に参加したことがあるという人からも話を聞きたい。
ヒアリングする人は、メンバーからの紹介で、今後依頼していく。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

第５回会議

日　時　／　1994年 9月 4日（日）10:30 ～
場　所　／　中軽井沢
出席者　／　岩渕潤子　伊藤恵　岩野裕一　鈴木伸子
松岡温彦　水野統夫　米村洋一

■　11月27日のホームコンサート開催に向けて

研究会としては最初となる提案型のホームコンサートを11月27日に行う。演奏者は研究会のメンバーである伊藤恵氏のピアノを中心にしたプログラムとし、可能ならば、久保田巧氏（ヴァイオリン）にも共演を依頼する。
会場は現在建築中であるＨ氏邸（10月中旬完成予定）の一階部分で行う。

■　今後の活動について

ホームコンサート活動は少なくとも三年間は続けたい。また二年目はこれまで“山の手”“ホームコンサート”と分かれつつある活動を合わせて一本化する。
ホームコンサートの開催主旨は、“自分たちで行えるホームコンサート”の提言とする。
ホームコンサートの経験者である人への聞き取り調査も随時行う。
コンサートへ来た人々の反応やデータ（例えば、これまでにホームコンサートへ行ったこと開いたことがあるかないか、過去に経験があると答えた人に対しては、現在も定期的に参加、もしくは開催しているか、止めてしまっている場合はその理由等）を集め、ホームコンサートをとりまく現代の問題点を考える。合わせてホームコンサートを開くためのマニュアルを作成していく。
提案していくホームコンサートには、例えば公営住宅に見られるような決して広いとはいえない場所でもコンサートは開けるというタイプのものや、コンサートはピアノがなくてもできるということを示すようなタイプのものを企画する。

本来は、“少ないお金で豊かなものを手に入れることができる”という社会が“豊かな社会”なのであり、選択肢が多い中から“選ぶことができる”のが本当の“豊かさ”であろう。しかし現在の日本は“多くのお金で僅かなものを手に入れる”という状態にある。そして現在の音楽、および芸術全般がその流れの中で、すべて“消費財”となってしまっている。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

第6回会議

日　時　／　1995年 2月13日（火）　18:00 ～
場　所　／　銀座
出席者　／　毛利恭三氏
岩渕潤子　岩野裕一　鈴木伸子　松岡温彦
水野統夫　米村洋一

■　ホームコンサート事例　── 毛利恭三氏へのヒアリングより ──

毛利恭三　氏	1937年　愛知県出身　東京芸大卒 1980年からビューティフル・サウンド・コーナーを主宰

○ホームコンサートを始めるようになったきっかけ

Q：毛利さんたちの“ビューティフル・サウンド・コーナー”の活動記録をみせていただきますと、1981年からもう既に74回以上も行われていますね。そもそも、このような活動をされるようになったきっかけとは、何だったんでしょうか。

毛利：僕は新日フィルになってから20年以上、その前に旧日フィルで10年間、オーケストラをずっとやっていますけれども、オーケストラと言うと、言わばサラリーマン的なものがあるわけですよ。つまり、組織があるんです。スケジュールとか企画とかも、自分たちが口を出す範囲ではないですね。決められて、毎月配られるスケジュール表に従って、この日はどこへ行って何を練習して、それでどこどこへ行って、どこで演奏会。つまりスケジュールに従って動いていればいいわけですよ。
でも、それでは気が済まない人もいるわけですよ。やはり会社の仕事じゃなくて、自分の好きなことをやりたい、そんな気持ちになるのが室内楽だと思うんですね。オーケストラは指揮者にもっと早くひけとか、もっと弾けとか、とにかく全部命令されてやるわけだから。室内楽というのはそんなオーケストラとは違って、例えば四重奏だとか五重奏だとかになればそれぞれが皆、自分はこうなんだ、こうしようよとかが対等にいえるわけです。そういう自主的な音楽ができるということですね。
まあそれ以前に室内楽をやるというのは、おもしろいんです。例えば音楽的に「弦楽四重奏」が名曲だからといって、もちろんこれを自分たちで最高なものにと、練って練って作っていこうという楽しみもあるんですけれども、そうじゃなくてもっと気軽に、それこそ音を出して、ガーっと逃げるだけ。それでビールを飲んで、そういう遊びながらという室内楽が好きな仲間が僕の周りにはいたんです。
で、そもそも一番の始まりは、僕が今から17年ぐらい前に東京から綾瀬に引っ越して、それでその最初の正月休みに、オーケストラで室内楽の好きな仲間に、「ちょっと引っ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

越したから、正月休みに楽器でも持って遊びに来ないか」と誘ったんです。そのときは５人ばかり集まったの。中には自分のお母さんとか、二人のお子さんとかを連れて遊びにきた人もいて、それでうちの子供とかと一緒に、子供がそこらで遊んでいる時、親は合奏したりして。それで楽器を弾いて遊んで、それでまたちょっと飲んだり将棋をしたり、とのんびりと遊んだんです。そうしたら、それが楽しいので、またやろうということになったんです。それが段々固まっていって。
つまり始めはまったく自分たちの楽しみ、遊びだったんです。そうしたら、その遊び声が外に漏れていったんです。

○「ビューティフル・サウンド・コーナー」の名前の由来

毛利：それで例えば、音楽で遊んでいても、例えば野球にしようがなんだろが、やはりグループで遊ぶとなったら、やはりそれだけじゃなくて、やはりそのあとで飲んだり、おいしいものを食べたり、お喋りしたりとか、それが楽しさにさらに輪をかけると思うんですよ。やはり、うちでも音楽と食べ物というのは切り離せなかった。そのためには、家内が台所ではりきって食べ物をつくるわけですよ。その時にはお皿がいる、コップもいる。そうしたらどこかのお店に、ちょうどいいのが出ていたんです。その皿を買って使っているんですけれど、その皿には“ＢＳＣ”と書いてあったんです。
それでその皿は、皆が集まるたびに毎回出てくる。その内に「じゃあこの集まりは、何か“ＢＳＣ”で名前を付けよう」ということになったんです。そしたらある人が、ビューティフル・サウンド・クラブとか、ビューティフル・サウンド・コンサートとかと言ったわけ。それはいいと満場一致で決まったんですけれど、第一回目をやるときに、やはり“コンサート”というのとはちょっと意味が違うと思ったんです。コンサートというと、やはり舞台があって、客席があって、開演時間が来ると演奏が始まって、終われば帰るものでしょう。それで僕が「コーナー」というのはどうだろうかといったんです。
それと、もう一つ「コーナー」には理由があるんです。最初、うちは三つの部屋があったんですけれど、その間にあった壁がだんだん邪魔になったので、どんどん壁を外してしまったんです。そうしたら三部屋がつながってＬ字型になったわけですよ。それで、演奏はそのＬの角のところでやったんです。だから「コーナー」。でも、そのうちにまた家もちょっと広げたりして、今はＴ字型になっているんですけれど。

○近所への音の問題など

Ｑ：最初に引っ越しされた時、やはりご近所の方には、音楽をしますけれども、とかそういうお話はなさったんですか。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

毛利：それが、綾瀬市というのは厚木基地があるところなんです。それで僕らにとっては都合がいいんだけれども、飛行機の騒音のおかげというか、その騒音抑制策のおかげで我が家は全部防音なんです。つまり我が家にとっては飛行機の騒音が入ってくるのを防ぐというより、うちから出る音が外には漏れないんです。

Q：それは好都合ですね。でもじゃあ逆に、毛利さんのところで演奏会をやっている時に飛行機がうるさいということはありませんか。

毛利：それはもうしょうがないですね。他にも犬の吠える声とか、うちの裏のほうが坂道なんですが、時々、自転車のブレーキがキィーっと甲高い音がしたり。でもうちでやるのはだいたい週末が多いんです。そうすると、アメリカ軍人は土日は休んでいる。

Q：おうちでなさる時には、電話の音とかはどうなさっているんでしょうか。電話線を抜いてしまったりされるんですか。

毛利：ええ、前は抜いていたんですけれども、今は留守番電話をファックスモードにして呼び出し音がならないように切り替えています。でも以前にうっかり、うちに振り子の鳩時計があって…。（笑）　やはり日頃生活をしている場所ですから、いろんな物があるわけですよ。
でも場所が自宅ということは、僕の家というのが本当に普通の木造の二階建てで、やはり天井も低く、いわゆる残響というのはあまりないので、音は生です。本当にそこの弦から鳴っているという音がしますよ。

○ホームコンサートをやる時の準備

毛利：今までやった中で最高に入ったお客の数は、40人くらいかな。でもそれはもうギュウギュウですよ。最適な数といったら、やはり25から30ぐらいでしょうね。
それでまず準備の時、家具とかタンスとかは全部二階の寝室へ押し込んでいるわけ。初めて来た人は、物が何もないので広々としているように感じるかもしれないけれど、上に行ったら、それはもうギュウギュウで、タンスの隙間に布団をやっと敷いて寝るという状態なんです。それから、あとは風呂場に押し込む。衝立とか、ミシンだとか、とにかくあとは全部風呂場です。
あと準備に必要なものは、椅子です。お客さんが大勢来たときに、どのような座り方が場所を取らないかというと、背もたれがなくて、重ねられるタイプ。あの椅子をたくさん買ったんです、丸いやつを40個くらい。あとやはり靴なんかも大変なんですよ。それで、僕は割合日曜大工とかが好きだったので、組立式の靴棚を用意するんです。それから、あと畳の上に椅子を直に置くわけにはいかないですよね。だからその時のために絨毯を用意してあって、それを引っ張りだしてきて、それから椅子を乗せて、スリッパな

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

んかだってけっこうな数ですし靴箱を組み立てと、全部セッティングするのに最低丸一日はかかるんです。
それでも実際、うちでやるということは、やはり自分たちの家庭とかジロジロみられちゃうわけですよ。戸棚とか食器棚の中だって。壁に何か貼ってあれば、皆読んでいくわけでしょう。だからプライバシーというか、例えばスケジュールなんかは見えるところに貼っていたけど、そうするとやはりそこに何か家のいろんな都合のことが書いてあるわけですよ。それを見られちゃいけないというので、やはりそれは見えないところへ移しておきました。支払い日とかね、それはやはり相当勇気が要りますよね。

○演奏の後

毛利：それからその演奏する場所と、やはり終わったあとの飲み食い、お喋り、その場所が同じだから演奏が終わると、ワーと演台をたたんだりとかして、そこにテーブルを特設するわけです。テーブルっていうのが、前に壁を抜いた時、間仕切りに使っていた戸を使うんですけど。脚には自家製の馬の脚をおいて、そこにその戸板を置いて、上に白いきれをかけて。そういうのも、終わったあと全部、常連のお客さんが指示してくれて、なるべく早く、演奏していた人なんかがまだ汗を拭いているぐらいの状態で飲んだりしています。

○費用について

Q：経費はどのようにまかなわれているんですか。

毛利：僕らのところで開くときは、会費を集めます。それはうちでかかる経費で、それこそ料理の材料を買ったとか、飲物だとかで、それはしょうがない。それとあと、だんだん音楽を演奏するほうがエスカレートしていって、例えば弦楽ソナタで、最初１番をやったから、じゃあ次は２番、３番。そして６曲終わったら、じゃあ次は何だろうって。そしたら今度はベートーベンのカルテットをやろうって、どんどんやっていくわけ。そうすると、もう練習はものすごいたくさんやらないとできない。そのためには、皆忙しい人なんだけど、時間をやり繰りして、本当にものすごい時間をかけて練習をする。そうすると、練習のためにもみなお金がかかるわけですよ、交通費から食事代から。でも、僕らがやるときには、別にどこからも寄付はもらわないし、まったくお客さんからいただく会費だけで賄うわけですよ。だけど、初めから出演料とかそういうものを決めていると、集まらなかったら、赤字ということになるので、要するにどうしているかといいますと、正直なことといって、できるだけのことしかできないということですね。不可能なことはことはできないですから。
僕の例からいえば、まずよそでやるとき、いくらですかと聞かれたときには、皆さんの

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

できるかぎりでたくさん下さいと。少しでいいですよ、というのは駄目です。
僕たちはプロですから、できるかぎり一生懸命やります。僕たちで最高の努力をしてやります。だから、主催されるあなたがたも、できるだけたくさん下さい、但しそれは無理はしなくていいということなんです。

○ここまで続けてこられた理由

あとなぜこれだけ続いてきたかといったら、結局は内助の功というか、家内がすごくやりがいがあるといって、自分も楽しいと思ったからできるんだというんです。最初、家内も音楽会のような形ではなく、演奏が終わった後、演奏者とお客さんが一緒に話をしたり、またそういう場所があれば、といってね。演奏した人も聞いた人も一緒においしい物を食べて、演奏家にああだ、こうだといろんなことを聞いて、皆が楽しかったと思えるような音楽会があれば、といっていたんです。で、そのためにやる時はいつも、家内は台所にこもりっきりで仕込みです。
あと僕自身は、自分が演奏するというのも好きなんだけれども、自分が弾かなくても、それこそマネージャーというか、裏方というか、それも非常にやりがいがあるんです。でもそれはそれで、やはりこれから僕がやりたいのは、演奏したい人と聞きたいという人をつなぐ役目で、これはすごく時間がかかることですけれど、それはそれで大事だと思うんです。それをビジネスではなくて、まったくビジネスなしでは駄目だと思いますけれどビジネス性が弱い形でやりたいと思ってます。
それで現在は一応、ビューティフル・サウンド・コーナーの会ということでやっているんですけれども、会という名前にはしてありますけれども、結局これは個人なんです。つまり規約もないし、それこそいわゆる会費を、会員から会費を集めるとかそういうこともなくて、ただ何か開くときには参加費だけ集めてやってます。
個人の良さっていうと、やはり山で言えば一人歩きみたいなもので、そのときの自分のペースによって、ここで休もうとか、ここは何とか上がろうかとかができるけれども、やはりパーティーで動いていると、休みたくても休めない。だから一人は一人で寂しくて苦労も多いけれども、どちらかと言えば一人歩きの方が早いんです。

○ビューティフル・サウンド・コーナーを通して得られた収穫

Q：これまでの活動を通して得られた収穫というと何でしょうか。

毛利：まず結論として、音楽を通じていろんな人と出会って、非常に人間関係が広くなったということですね。やはり音楽をやっていなかったら、そういうことはなかったでしょうし、特に中でも室内楽をやっていたからだと。オーケストラだけではこういう出会いは生まれなかったと思います。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

それで、いろいろ交際の輪が広がったということと同時に、僕が一番、それこそ一番の収穫だと思っているのは、演奏家で自主的に自分の室内楽をやりたいと思っている人が本当に多い、ということを知ったことです。だから、もう本当にたくさんの仲間がいるんだけれども、そういうところでこそ、自分のやりたいものがやれるということ。それで、そのためにすごい時間をかけて練習して、練習のためのいろんな場所を探して練習所を借りたりしてやっている、そういう仲間がいるということが分かったということです。

それからあと、身近に聞きたいという人もたくさんいるということがわかった。

だから、ともかく皆さんがいつ、どこどこでやりたいというのがあって、もう一方どこかで、自分が勉強して練習した成果を発表したいと思っている人がいる。それは例えお客さんが10人でもいいから、とにかく人前で発表したいと思っている人がいるんです。そう思っている人に、ともかく申し出てくれという形で声をかけたら、きっといると思うんです。その人達と皆さんがやろうかと思うのとが一致したら、それはもう非常にスムーズにいくと思うんです。

普通は皆、室内楽をやりたがっているアーティストが多いとは、思っていないですよ。人によってはすごいプライドが高くて、俺はプロだからそんなはことできない、と思っている人だっているわけです。しかし、そういう風に思っている人もいれば、意外にもそうじゃない人がいるわけ。でもその辺はなかなかわからない。聞きたい側も、本当は聞きたいんだけども、ずいぶんやはりお金を出さなきゃ駄目なんだろうなと。

でも、普通の家庭の人で音楽好きな人はいっぱいいらっしゃると思うんですよ。できれば我が家のリビングは多少広いから近所の人と楽しくやりたいな、と思っていても、やはり音楽家を頼むと何十万かかるかな、とそんな感じで。

但しそんな時、学生はちょっと…。普通オーケストラでは、皆すごい過密スケジュールなんで、時々交替で休むわけです。そうするとそこにエキストラが入るんですけれど、学生もよく来るわけです、若い人が。そういうのを見てると、音楽学校でやっていることというのは、やはりその専門の演奏技術だけですね。音符と楽譜と、手と体、そこだけをやっている感じがする。やはり音楽というのはそこだけじゃないですよね。

僕等が求める室内楽の楽しさっていうのは、商品を決められた規格に作るんじゃなくて、自分の味付けで出せるということかな。

○これからやりたいと思っている人へのアドバイス

Q：これからホームコンサートをやりたいと思っている人に、何かアドバイスのようなものがありましたら、お願いします。

毛利：僕は音楽会というか、何か催しをやって、あれは成功だったか失敗だったかというのを、何で決めるかといったら、演奏した人と聞いた人が、ああおもしろかった、また行きたい、また弾きたいと思ったら成功だったと思うんです。自分も楽しいと思わなき

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

ゃできないですよ。それと、やはり積み重ねが大事ですね。
とにかく僕もあと2年くらいでオーケストラを卒業というか、やはりまだ体が自由に動くうちに卒業して、演奏したい人、聞きたい人、これをつなぐ役をやろうかと思っているんです。それは“演奏家と聴衆”というビジネス性の強いものではなくて。やりたいと思っている人、演奏したいという人をうちのコンピューターに登録しておいて、プランナーというか、コーディネーター。その時には、どうぞ何でもご相談下さい。

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp